付　編　1

1　轟貝塚出土資料の所蔵及び保管状況等について

2　轟貝塚第１次・第２次調査出土資料（京都大学資料）について

3　轟貝塚第３次調査出土資料（京都大学資料，東京大学資料）について

4　轟貝塚第５次調査出土資料（熊本大学資料）について

5　轟貝塚第６次調査出土資料（長崎大学資料，旧慶應義塾大学資料）について

本文目次

1　轟貝塚出土資料の所蔵及び保管状況等について…… 387
2　轟貝塚第１次・第２次調査出土資料（京都大学資料）について …… 388
3　轟貝塚第３次調査出土資料（京都大学資料，東京大学資料）について…… 391
4　轟貝塚第５次調査出土資料（熊本大学資料）について　…… 400
5　轟貝塚第６次調査出土資料（長崎大学資料，旧慶應義塾大学資料）について …… 424
引用・参考文献（付編１）…… 440

挿図目次

第 1 図　轟貝塚第２次発掘調査の調査区配置図…… 392
第 2 図　轟貝塚第３次発掘調査区と出土遺物のスケッチ‥ 394
第 3 図　轟貝塚第５次調査発掘地点 …… 402
第 4 図　轟貝塚第５次調査層位断面模式図 …… 402
第 5 図　轟貝塚第５次調査出土土器１ …… 404
第 6 図　轟貝塚第５次調査出土土器２ …… 405
第 7 図　轟貝塚第５次調査出土土器３ …… 406
第 8 図　轟貝塚第５次調査出土土器４ …… 407
第 9 図　轟貝塚第５次調査出土土器５ …… 409
第 10 図　轟貝塚第５次調査出土土器６ …… 410
第 11 図　轟貝塚第５次調査出土土器７ …… 411
第 12 図　轟貝塚第５次調査出土土器８ …… 412
第 13 図　轟貝塚第５次調査出土土器９ …… 414
第 14 図　轟貝塚第５次調査出土土器 10…… 415
第 15 図　轟貝塚第５次調査出土土器 11…… 416
第 16 図　轟貝塚第５次調査出土土器 12…… 417
第 17 図　轟貝塚第５次調査出土土器 13（№.278 ～№.297）及び小林コレクション（№.298 ～№.303）…… 419
第 18 図　轟貝塚第５次調査出土土器 14…… 420
第 19 図　轟貝塚第５次調査出土土器 15…… 421
第 20 図　轟貝塚第５次調査トレンチの層位と第 12・13 次調査で設定された基本層序との関係 …… 422
第 21 図　轟貝塚第６次調査出土縄文土器 …… 428
第 22 図　轟貝塚第６次調査出土石器１ …… 429
第 23 図　轟貝塚第６次調査出土石器２ …… 430
第 24 図　轟貝塚第６次調査出土貝製品１ …… 430
第 25 図　轟貝塚第６次調査出土貝製品２ …… 431
第 26 図　轟貝塚第６次調査出土貝製品３ …… 432
第 27 図　轟貝塚第６次調査出土貝製品４ …… 433
第 28 図　轟貝塚第６次調査弥生時代以降の出土遺物 …433

表 目 次

第１表　京都大学理学研究科所蔵轟貝塚出土人骨一覧 …… 389
第２表　京都大学総合博物館所蔵轟貝塚出土遺物一覧 …… 390
第３表　轟貝塚第３次調査出土遺物 …… 393
第４表　「轟式土器の編年」と本報告の遺物番号対照表 … 422
第５表　各層位からの出土土器点数（型式別）…… 422
第６表　長崎大学医学部所蔵轟貝塚出土人骨一覧…… 424
第７表　轟貝塚第６次調査出土遺物観察表（縄文土器）… 434
第８表　轟貝塚第６次調査出土遺物観察表（石器貝製品）…… 435
第９表　轟貝塚第６次調査出土遺物観察表（貝製品）…… 436
第10表　轟貝塚第６次調査出土遺物観察表（弥生時代以降）……436

写真目次

写真１　轟貝塚第２次調査Ⅵ区人骨出土状況図…… 388
写真２　轟貝塚第３次発掘調査の調査区配置図…… 392
写真３　長谷部言人による蒐集寄託等を示すラベル…… 394
写真４　轟貝塚第３次調査出土遺物１ …… 395
写真５　轟貝塚第３次調査出土遺物２ …… 396
写真６　轟貝塚第５次発掘調査出土遺物収蔵木箱… 400
写真７　轟貝塚第５次調査出土石器 …… 421
写真８　頭蓋骨（轟貝塚６次１号２号４号～６号８号）…… 425
写真９　轟貝塚６次１号～８号人骨（木箱収蔵分）‥ 425
写真10　轟貝塚６次１号人骨頭骨 …… 425

写真 11　轟貝塚６次２号人骨頭骨 ･････････････････ 425
写真 12　轟貝塚６次４号人骨頭骨 ･････････････････ 425
写真 13　轟貝塚６次５号人骨頭骨 ･････････････････ 425
写真 14　轟貝塚６次６号人骨頭骨 ･････････････････ 425
写真 15　轟貝塚６次８号人骨頭骨 ･････････････････ 425
写真 16　轟貝塚６次１号人骨（頭骨以外）･････････ 426
写真 17　轟貝塚６次２号人骨（頭骨以外）　･････････ 426
写真 18　轟貝塚６次３号人骨 ･････････････････････ 427
写真 19　轟貝塚６次４号人骨（頭骨以外）　･････････ 427
写真 20　轟貝塚６次５号人骨（頭骨以外）　･････････ 427
写真 21　轟貝塚６次６号人骨（頭骨以外）　･････････ 427
写真 22　轟貝塚６次７号人骨 ･････････････････････ 427
写真 23　轟貝塚６次８号人骨（頭骨以外）･････････ 427
写真 24　轟貝塚第６次調査出土縄文土器･･････････ 437
写真 25　轟貝塚第６次調査出土石器･･･････････････ 438
写真 26　轟貝塚第６次調査出土貝製品１･･････････ 438
写真 27　轟貝塚第６次調査出土貝製品２･･････････ 439
写真 28　轟貝塚第６次調査出土遺物（弥生時代以降）････ 439

1　轟貝塚出土資料の所蔵及び保管状況等について

学史的に著名な貝塚である轟貝塚は，明治 32（1899）年の『地学雑誌』における地質学者佐藤傳藏による報告（佐藤 1899）によってその存在が学会に知られることとなった。大正時代には，いわゆる「石器時代人種論」の議論の高まりを起因として，京都帝国大学や熊本医学専門学校（現熊本大学医学部），東北帝国大学の考古学者や人類学者らによって発掘調査が行われた。戦後には，宇土町（当時）や宇土高等学校，熊日学術調査団等によって発掘調査が行われ，2000 年代に入り宇土市教育委員会が貝塚の範囲確認や過去の調査地点の再調査を実施した。このうち，熊日学術調査団による調査の出土資料については，当該調査の主査であった江坂輝彌の所属先である慶應義塾大学で一括保管されていたが，宇土市教育委員会が資料の再整理を行い，発掘調査報告書（宇土市教育委員会 2008）を刊行した。

昭和５（1930）年の鳥居龍蔵を中心とした第４次調査を除き，過去の轟貝塚の調査内容については，調査後に刊行された報告書や論考等でおおむね把握することができ，出土した遺物や図面等の関連資料についても，一部所在不明となっているものもあるが，比較的良好に所蔵・保管されている。これまで轟貝塚の調査を行った機関や中心となって携わった調査者，現在の資料保管先，報告等は，以下のとおりである（各調査の概要については，第２章参照）。

【１　次　調　査】調査機関（調査者）:京都帝国大学（鈴木文太郎),熊本医学専門学校（川上漸･山崎春雄）
資料保管先：京都大学理学部
報　告　等：鈴木 1918a・1918b

【２　次　調　査】調査機関（調査者）：京都帝国大学（濱田耕作・清野謙次）
資料保管先：京都大学（人骨以外：総合博物館，人骨：理学部，調査図面等：文学部）
報　告　等：濱田・榊原・清野 1920

【３　次　調　査】調査機関（調査者）：東北帝国大学（長谷部言人）
資料保管先：京都大学（人骨以外：総合博物館，調査図面：文学部）
東京大学総合研究博物館（人骨）
報　告　等：濱田・榊原・清野 1920　※附記に記載

【４　次　調　査】調査者：鳥居龍蔵（当時の所属は，國學院大学・上智大学）
※資料は所在不明

【５　次　調　査】調査機関（調査者）：宇土町・宇土高校（調査員：松本雅明・富樫卯三郎）
資料保管先：熊本大学文学部
報　告　等：松本・富樫 1961

【６　次　調　査】調査機関（調査者）：熊日学術調査団（調査主査：江坂輝彌）
資料保管先：宇土市教育委員会（人骨以外），長崎大学医学部（人骨のみ）
報　告　等：江坂 1971，宇土市教育委員会 2008

【７次～13次調査】調査・保管先：宇土市教育委員会
報　告　等：宇土市教育委員会 2005・2006・2017

本編では，轟貝塚の１次～３次・５次・６次調査における出土資料の所蔵及び保管状況，５次調査や６次調査の未報告資料等を報告する。なお，引用・参考文献については，本編の最後に一括掲載した。

２　轟貝塚第１次・第２次調査出土資料（京都大学資料）について

（1）京都大学資料の概要について

京都帝国大学（以下，京都帝大）が実施した大正６（1917）年の轟貝塚第１次発掘調査と大正８（1919）年の第２次発掘調査の出土資料及び図面等の関連資料については，調査から 100 年以上経過した現在も京都大学（以下，京大）所蔵であり，資料の内容によって文学部考古学研究室，理学研究科自然人類学研究室，総合博物館においてそれぞれ収蔵・保管されている。

鈴木文太郎が中心となって実施した第１次調査の報告については，大正７（1918）年に刊行された「河内国府肥後轟貝塚等にて発掘せる人骨に就て報じ併せて石器時代の住民に及ぶ」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第２冊（鈴木 1918b）の他，ほぼ同様の内容が掲載された「肥後轟貝塚河内道明寺等にて発掘せる人骨に就いて」『人類学雑誌』第 33 巻第３号（鈴木 1918a）がある。また，第２次調査の内容や出土資料については，発掘調査の翌年に刊行された「肥後轟貝塚発掘報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第５冊（濱田・榊原・清野 1920）によって広く知られており，その一部については，縄文時代に関する研究論文等で出土土器の実測図や出土人骨の年代測定結果等が公表されている（宮本 1990，水ノ江 1990b，山田・日下・米田 2019）。なお，第１次・第２次調査の報告については，学史的に重要な調査であるため付編２に再録した。

宇土市教育委員会では，京大に所蔵されている第１次・第２次調査出土遺物や出土人骨，調査関連記録物等の内容や保管状況等の詳細を把握するため，平成 29 (2017) 年 11 月 27 日～ 29 日と令和元（2019）年 7月 30 日～８月１日の２度にわたって現地にて資料調査を実施した。以下，その内容について報告する。

（2）文学部考古学研究室所蔵資料について（写真１）

轟貝塚から出土した人骨を除く出土遺物は，後述する総合博物館に収蔵されているが，考古学研究室にはフォルダ２冊分に収められた写真類や遺物実測図等の記録物が保管されている。

a．写真類

轟貝塚周辺の風景や発掘調査時の出土遺物の写真であり，調査の翌年である 1920 年に京都帝大が刊行した発掘調査報告書に掲載されているものや，若干アングルを変えた報告書未掲載の写真もある。また，出土遺物の撮影年は「1943 年」や「1960 年」等の記述がみられるが，どのような目的で撮影されたのか不明である。

b．図面類

京都帝大による発掘調査報告書に掲載されている遺物実測図の版下が保管されており，既に印刷された図面に手書きでキャプションを書き込んだ状態のものもある。写真１は，第２次調査で多くの人骨が散在的に出土したⅥ

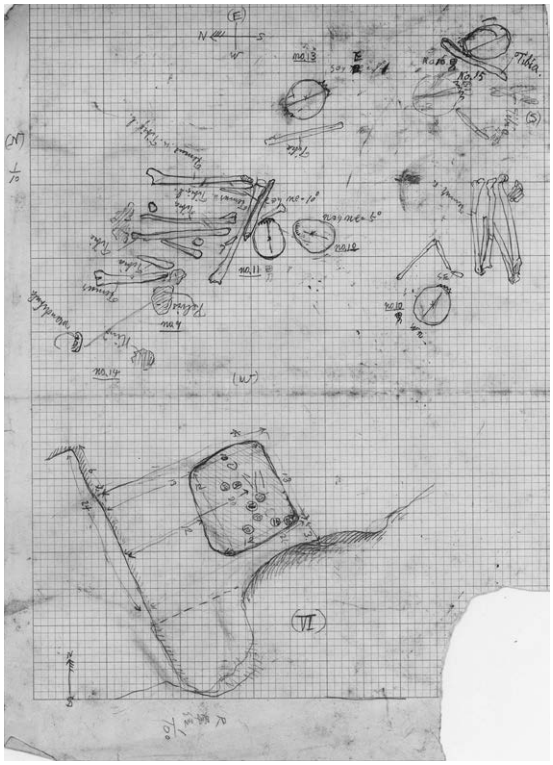


写真１　轟貝塚第２次調査Ⅵ区人骨出土状況図

区の人骨出土状況図で，1920 年の調査報告書では未掲載のものである（トレース図は第２章に掲載）。

なお，２度にわたる京大所蔵資料の現地調査は，第１次・第２次調査出土遺物や出土人骨，調査関連記録物等の内容や保管状況等の詳細を把握することが目的であったが，調査関連資料の確認の過程で，東北帝国大学（以下，東北帝大）の長谷部言人が大正９（1920）年の第３次発掘調査に伴い作成したとみられる図面を確認した。この第３次調査については，東京大学総合研究博物館に出土人骨が保管されており，当該人骨の形態学的特徴についてまとめられた研究報告（海部・中橋・橋本 1998）が知られていたが，それ以外では，濱田・榊原・清野 1920 において濱田耕作が記した「附記１」にその内容が簡潔に記されているだけであり，調査の内容がほとんど不明であった。このことから，学史的に重要な発見となったが，本図の詳細については付編１－３で報告する。

（3）理学研究科自然人類学研究室所蔵資料について（第１表）

第２次調査における人骨調査及び報告は，清野謙次が担当した（濱田・榊原・清野 1920）。京大理学研究科自然人類学研究室には清野が収集した各地の古人骨が所蔵されているが，これらの人骨資料は，自然人類学研究室発足時に京大医学部に残されていたものを引き取る形で所蔵されることになったという。なお，当該調査で出土した一部の人骨については，近年，年代測定が行われている（山田・日下・米田 2019）。

清野が収集した人骨資料は，通し番号で管理されており，この通し番号と轟貝塚出土人骨番号の対応関係は第１表のとおりである。清野が携わった第２次調査出土人骨１号～ 18 号のうち，11号を除く17体分を現地で確認した。その他，大正６（1917）年の第１次調査（調査者：鈴木文太郎氏及び熊本医学専門学校〔熊本

第１表　京都大学理学研究科所蔵轟貝塚出土人骨一覧（現地調査確認分）

箱番号 ※清野謙次蒐集番号	出土人骨番号等	内　　容
KIYONO-72・73	２次１号・２号	頭骨，下顎骨，寛骨，大腿骨等，四肢骨少数。全体として残存部位少ない
KIYONO-74	２次３号	四肢骨，肋骨，寛骨，椎骨等が良好に残存。下顎骨の一部を除いて頭骨無し
KIYONO-74	２次３号	頭骨のみ。袋に入った破片と，組みあがった頭骨（レプリカ？）
KIYONO-75	２次４号	頭骨，下顎骨，四肢骨等。多くの部位が残存
KIYONO-76	２次５号	頭骨を含め，各部位が良好に残存
KIYONO-77	２次６号	頭骨，四肢骨，肋骨，寛骨，椎骨等，全体として残存状態良好
KIYONO-78・79	２次７号・８号	四肢骨中心に残存。その他，肋骨とみられる骨や，頭骨の破片を含む
KIYONO-83(81)	２次12号(10号)	大腿骨，頭骨，鎖骨，椎骨の一部
KIYONO-84	２次13号	下顎骨，大腿骨等の四肢骨，寛骨等が少数残存。下顎骨が複数個体分あり，他の人骨が混入している可能性あり
KIYONO-86	２次15号	四肢骨，椎骨中心に残存
KIYONO-87	２次16号	頭骨及び四肢骨の一部のみ残存
KIYONO-88	２次17号	頭骨なし。四肢骨中心に残存
KIYONO-88(80歯)	２次17号(９号歯)	頭骨，下顎骨片等。「80」と書かれた袋には残りの良い大腿骨あり
KIYONO-89	２次18号	頭骨，四肢骨，椎骨，下顎骨等。多くの部位が良好に残る
KIYONO-2978 （解剖）→2977	１次	頭骨，下顎骨，四肢骨等が残存。肋骨等，小さい骨を中心に欠損多い
KIYONO-2979	熊本医学専門学校 (山崎春雄，川上漸の採集資料か)	未接合の頭骨片，四肢骨，椎骨，肋骨，下顎骨等，多くの部位が残存。一部貝殻（ハマグリ等）も入っている。
KIYONO-2981	轟小学校旧蔵資料 (推定)	大腿骨，中手骨等。残りは良いが四肢骨が中心。「動物」と明記された袋の中の骨は動物骨とみられる
KIYONO-2982・ 2984・無番号	１次	ほぼ完形の骨盤部あり。ほか大腿骨，椎骨，下顎骨の一部等。小箱内に未接合の頭骨片複数あり。タグの付いた骨（KIYONO-2980）あり

大学医学部の前身〕）の出土人骨を確認するとともに，第１次調査に伴い鈴木が現地で入手した轟貝塚出土人骨も清野蒐集番号が付されて収蔵されていることを把握することができた。

なお，熊本医学専門学校からの調査参加者として「山崎」，「川上」２名の名前が KIYONO-2979 の同梱のメモ等にみられるが，「山崎」とは熊本医学専門学校教授の山崎春雄，「川上」とは同校に在籍していた川上漸のことである。鈴木の報文（鈴木 1918 b）には，**「熊本県宇土郡轟村にて獲たる主要なるものは，該地貝塚にて予自ら発掘さるものなり，この人骨は男女の二躰と，是より先き同一地にて，川上，山崎両氏の発見されたる頭骨破片，肢骨其他同地小学校に在りたるもの等若干」**と記載があり，これらは第１表に示した人骨資料を指しているとみられる。また，**「同年（大正六年－筆者補記）五月熊本県宇土郡轟村貝塚にて，同地方庁の特別の厚意と，熊本医専の教授川上，山崎両学士の案内と助力に由り人骨を採集」**とあるように，川上氏と山崎氏が鈴木による調査の実現のために尽力したことがうかがえる。

（4）総合博物館所蔵資料について（第２表）

第１次・第２次調査のうち，人骨以外の出土遺物は全て総合博物館に収蔵されている。出土遺物の総量は，木箱にして計 10 箱で，轟式を中心とする縄文土器の他，石器類（石斧，石鏃等），骨角器等である（第２表）。これらのなかには，1920 年刊行の第２次調査報告書（濱田・榊原・清野 1920）に掲載されている資料，1960 年刊行の『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第１部日本先史時代（京都大学文学部博物館 1960）に写真が掲載された資料，未発表資料等が混在している。遺物に伴う記録類は全て轟貝塚を表す「ト」の注記や調査区名，「轟貝塚」とだけあるラベル類等で，出土層位の情報は明らかではない。

なお，「寄託　長谷部言人氏」等と記載されたラベルが伴う資料については，長谷部が実施した第３次調査で出土した資料とみられる。これらの資料については，付編１－３で報告する。

第２表　京都大学総合博物館所蔵轟貝塚出土遺物一覧（現地調査確認分）

収蔵用木箱の番号	収蔵棚の番号	箱注記	収蔵品	備　考
7202	87B	1964熊本・轟貝塚磨石　目録未載	磨石・叩石	
7205	87C	轟貝塚石器	石斧を中心とした石器類，縄文土器（阿高式），貝殻等	札２枚同封（「熊本 1933 轟貝塚 1964　磨製石斧 ス－35－17」，「肥後宇土郡轟村字宮ノ庄貝塚（西）」）
7206	87C	轟貝塚石器・骨角器	石斧，抉り入り礫器，石鏃，貝輪，骨角器等	「托 轟貝塚発見 骨器等六 長谷部言人氏托」と書かれた札が骨角器と一緒に入った小箱あり
7207C・D	87C	轟貝塚土器（h）	轟式を主体とする縄文土器	
7208	87C	轟貝塚土器（f・g）	轟式を主体とする縄文土器	
7209	87C	轟貝塚土器（a,b,c,d,I,j,k,l）	轟式を主体とする縄文土器	
7210	87C	轟貝塚土器（e）	轟式土器を中心とする縄文土器	
7211	87C	轟貝塚土器（未分類）	縄文土器（轟式主体），弥生土器，貝等	「寄托 轟貝塚 石鏃等五 長谷部言人氏」のラベルが入った小箱あり
7212	87C	轟貝塚土器・貝殻（未分類）	轟式を中心とした縄文土器	
－	3C7	－	轟式の底部等を中心とした縄文土器	箱注記と収蔵品は合致しない。札２枚同封（「轟貝塚 大正八年十二月発掘」，「No.1933 肥後国宇土郡轟村宮ノ庄貝塚 磨製石斧 大正８年十二月発掘」）※「No.1933」は京都大学総合博物館考古の登録番号

３　轟貝塚第３次調査出土資料（京都大学資料，東京大学資料）について

（1）第３次調査出土資料の概要

轟貝塚第３次調査は，大正９（1920）年に東北帝国大学（以下，東北帝大）の長谷部言人を中心に実施された。調査報告書は未刊行であるが，京都帝国大学（以下，京都帝大）の調査報告書（濱田・榊原・清野 1920）において濱田耕作が記した「附記１」にその概要を知ることができる（付編２－３参照）。これによれば，京都帝大の報告書印刷中であった大正９年７月に，長谷部が轟貝塚の残余の一部を発掘し，人骨約 20 体が出土したこと，少数の弥生式土器破片を耕土層中から発見したこと，骨器及び石製耳飾の残欠を２点が得られたこと等が報告されている。

現在，当該調査で出土した人骨は，東京大学（以下，東大）の総合研究博物館に収蔵されており，海部陽介，中橋孝博，橋本裕子による人骨の形態学的特徴に関する研究報告がある（海部・中橋・橋本 1998）。当該人骨が本博物館に収蔵されるにいたった詳細な経緯については不明であるが，長谷部が大正５（1916）年から昭和 13（1938）年まで東北帝大に所属し，その後，東京帝国大学（以下，東京帝大）へ転出したことをきっかけにこれらの人骨もあわせて東京帝大へ移管されたものと推察される。

このように，第３次調査の調査地点や調査内容については，これまで詳細不明とされており，出土品も京都帝大の調査報告において写真が掲載された玦状耳飾や，上記の人骨以外は知られていなかったが，宇土市教育委員会が京都大学（以下，京大）所蔵の第１次・第２次調査出土遺物や人骨資料，調査関連記録物の内容や所蔵状況等の詳細を把握するために実施した現地調査の過程で，第３次調査に伴い作成されたとみられる図面や出土遺物が存在することが判明した（付編１－２参照）。

（2）京都大学資料について

①第３次調査に伴う図面について（第１図，写真２）

第３次調査に伴い作成されたとみられる図面は，現在，京大考古学研究室において保管されている。当該図面には，以下の内容が記録されていた（写真２，トレース図は第２章及び本項第２図参照）。

○ 京都帝大による第２次調査の調査区を基準とし，新たに北西側や南側へ拡張された調査区が設定されており，Ⅰ区からⅨ区までグリッド状に区分されて赤鉛筆でラフに着色されている。

○ 人骨出土地点が１～ 19 まで番号を付してあり，**「残缺」**（残欠）と記載されているものについても人骨出土地点のものと表現手法が共通していることから，人骨片を示しているとみられる。また，調査区配置図の周囲には，石器や骨角器等の出土遺物のスケッチが描かれている。

○ 第２次調査区に相当する部分に〇印が 17 箇所確認できるが，これは第２次調査の１号から 18 号人骨出土地点と合致している（ただし，２号人骨出土地点にあたる位置には〇印未記載）。

○ 図面左上には，**「此他帰途京大考古学教室ニ提出シタル諸品アリ　コヽニ記入シタルハ其内玦二ヶノ所在ノミ」**との記載があることから，発掘調査終了後の帰途，京都帝大の考古学教室に立ち寄り，**「玦」**等の出土遺物の一部を提出したと推測される。

このような記載内容から，第２次調査の内容を理解していた人物によって作成された図面とみられるが，第２次調査翌年の大正９年当時，東北帝大の長谷部言人が発掘調査（轟貝塚第３次発掘調査）を行い，人骨が約 20 体出土したことが，京都帝大の発掘調査報告（濱田・榊原・清野 1920）に「附記」という形で濱田が紹介している（付編2－3参照）。それには，**「長谷部言人君は肥後轟貝塚の残余の一部を発掘」**とある。また，当該図面において調査区のまわりにスケッチされた石器や骨角器等の遺物については，京大総合博物館所蔵

の「長谷部言人氏蒐集品」，「寄託 長谷部言人氏」等のラベルとともに収蔵されている考古資料にその一部を確認した。

これらの事実から，当該図面は多数の人骨の出土が報告されているにもかかわらず，調査の内容が長年不明であった長谷部言人による 1920 年の発掘調査（第３次調査）に伴い作成された図面と認定できよう。人骨の出土位置や出土遺物等，調査の大まかな内容がわかることから，当時の調査内容を知る上で，極めて重要な資料といえる。

第３次調査は，第２次調査報告（濱田・榊原・清野 1920）の刊行前に実施されたことから，おそらく，京都帝大の調査図面を長谷部が何らかの機会に同大関係者から報告書刊行前に入手し，その図面を基準として第３次発掘調査を行ったことは明らかである（第１図）。

長谷部の当時の所属先であった東北帝大で保管されていたはずの図面や出土品（人骨除く）が，京大において保管されるにいたった経緯は不明であるが，長谷部の没年が昭和 44（1969）年であるので，これより前には京大に当該図面と出土遺物が移管されたのであろう。

なお，長谷部と濱田・清野の関係については，濱田・榊原・清野 1920 の附記１に，長谷部言人による調査の出土人骨や遺物について比較的詳細な記述があり，文中に**「同君の厚意により，此の新事実を附記し，耳飾は之を巻首図版中に挿入するを得たるは，余輩の深く喜ぶ處なり」**と濱田が記しているように，濱田と長谷部は轟貝塚の調査において協力的関係にあり，調査に関する情報を共有していた可能性が高い。

このことは，第３次調査図面の記載内容や，現在，京大に当該図面や出土遺物が存在することからも首肯できよう。長谷部と清野は，ともに人骨の形質研究から人類学者・小金井良精に代表される「石器時代人＝アイヌ」説を否定する立場をとっていたことからも，轟貝塚の調査に関して情報共有が行われた理由ではないかと推測される。

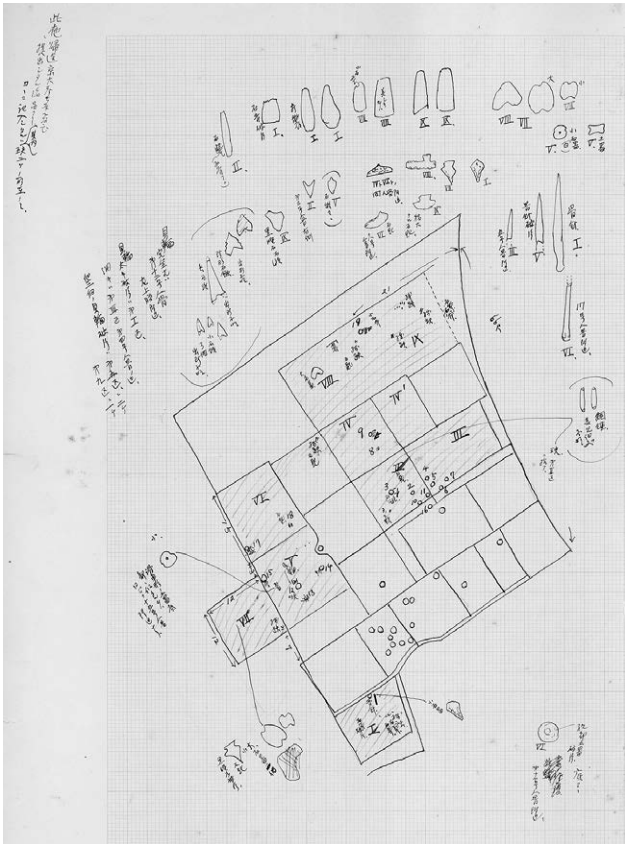
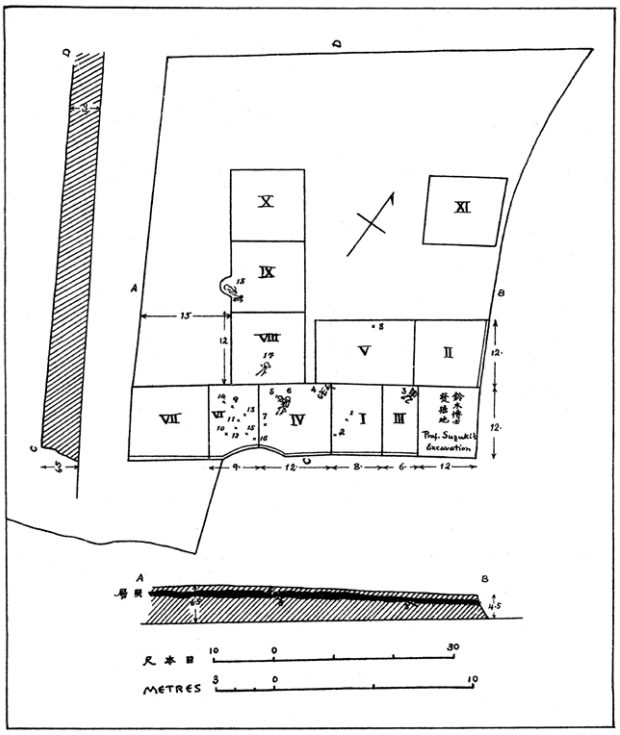


写真２　轟貝塚第３次発掘調査の調査区配置図



第１図　轟貝塚第２次発掘調査の調査区配置図

なお，長谷部から提供を受け，第２次調査報告の「巻首図版」掲載した玦状耳飾２点について，濱田は報告書の「附記」に**「白色大理石より成り，其の形式全く河内国府遺跡等より発見せられしものと相同じきを見るは最も重要なる事実」**と高く評価しているが，この玦状耳飾は第３次調査区のⅡ区とⅤ区で採集・記録された**「玦」**と同一のものであろう。

②第３次調査出土遺物について（第２図，第３表，写真３～５）

京大総合博物館で実施した轟貝塚第２次調査出土資料の内容確認時に，第３次調査で出土した遺物を確認した。遺物の種類は，石器（石鏃・尖頭器・石匙・打製石斧・磨製石斧・双角状礫器），石錘，土錘，貝輪，骨角器（簪・骨製刺突具）等である。

上記の第３次調査時作成とみられる図面に関して，同図に描かれた遺物のスケッチと総合博物館収蔵品との照合を行ったところ，石器を中心にスケッチと文字で示された出土遺物のほとんどである35点の遺物を特定することができた。特定できた遺物の多くに調査区を示すローマ数字の注記や「寄託　長谷部言人氏」等

第３表　轟貝塚第３次調査出土遺物（京都大学総合博物館所蔵）

写真番号	収蔵用木箱の番号	収蔵棚の番号	器種・種別	石材・材質	計測値（cm）			注記
					長さ	幅	厚さ	
4－1	7206	87C	石鏃	黒曜石	2.5	2.1	0.5	ト Ⅸ
4－2	7206	87C	石鏃	頁岩	2.3	1.5	0.4	ト Ⅱ
4－3	7206	87C	石鏃	頁岩	2.8	2.4	0.5	ト
4－4	7206	87C	石鏃	頁岩	4.5	1.8	0.4	ト
4－5	7205	87C	石鏃	頁岩	3.9	1.5	0.4	ト Ⅴ
4－6	7206	87C	尖頭器	頁岩	4.9	3.1	0.9	Ⅰ
4－7	7206	87C	石匙	頁岩	4.2	6.8	1.2	ト 九 Ⅸ
4－8	7206	87C	石匙	頁岩	4.5	3.2	0.7	ト Ⅶ
4－9	7206	87C	石匙	頁岩	1.8	4.3	0.6	ト Ⅷ
4－10	7206	87C	石匙	安山岩	1.9	4.7	0.5	ト Ⅳ-Ⅴ
4－11	7206	87C	石匙	安山岩	1.5	3.7	0.4	ト Ⅵ
4－12	7206	87C	石錘	安山岩	10.3	11.9	3.3	ト 七 Ⅶ
4－13	7206	87C	石錘	安山岩	5.6	5.3	2.4	ト Ⅶ
4－14	7206	87C	石錘	ﾁｬｰﾄ?	3.8	4.1	0.7	轟 Ⅴ
4－15	7206	87C	石錘	砂岩	5.5	2.6	1.0	ト Ⅸ
4－16	7205	87C	打製石斧	安山岩	11.5	4.0	1.5	ト
4－17	7205	87C	打製石斧	安山岩	12.7	5.0	3.0	ト 九
4－18	7205	87C	磨製石斧？	安山岩	10.4	2.5	1.8	ト Ⅱ
5－19	7205	87C	磨製石斧	安山岩	13.5	6.4	2.9	ト 九
5－20	7205	87C	磨製石斧	蛇紋岩	11.5	5.4	2.2	ト Ⅰ
5－21	7205	87C	磨製石斧	安山岩	6.2	4.0	1.3	Ⅰ
5－22	7206	87C	双角状礫器	安山岩	10.2	13.7	2.8	ト 八 Ⅷ
5－23	7206	87C	骨製簪	動物の四肢骨	15.8	1.1	0.9	轟 Ⅰ
5－24	7206	87C	骨製簪？	動物の四肢骨	10.6	1.3	0.5	ト Ⅵ
5－25	7206	87C	骨製刺突具	動物の四肢骨	4.1	0.8	0.4	Ⅲ
5－26	7206	87C	骨製刺突具	動物の四肢骨	6.9	0.8	0.6	Ⅴ
5－27	7206	87C	貝輪	フネガイ科サルボウ？	8.0	0.8	0.6	轟 ト Ⅴ
5－28	7206	87C	貝輪	フネガイ科サルボウ	7.5	1.9	2.0	轟 ト Ⅰ
5－29	7206	87C	貝輪	フネガイ科サルボウ？	6.5	0.9	1.0	轟 ト Ⅴ
5－30	7206	87C	貝輪	タマキガイ科ベンケイガイ	6.4	0.6	0.5	轟 ト Ⅲ
5－31	7206	87C	貝輪	フネガイ科サルボウ？	7.0	0.6	0.7	轟 ト Ⅸ
5－32	7206	87C	貝輪	フネガイ科サルボウ	7.7	6.4	0.6	ト Ⅴ 轟12号人骨右上腕
5－33	7211	87C	土錘	土師質	3.6	0.9	－	
5－34	7211	87C	土錘	土師質	3.2	0.8	－	
5－35	7211	87C	須恵器坏蓋		3.3	3.2	－	

と記載されたラベルが伴っていることから，これらの遺物が第３次調査出土品に相当することは確定的といえる。ただし，第２次調査報告に掲載された玦状耳飾は，収蔵品のなかに確認することができなかった。

第３次調査図面には，**「此他帰途京大考古学教室ニ提出シタル諸品アリ　コヽニ記入シタルハ其内玦二ヶノ所在ノミ」**とあり，玦状耳飾含む「諸品」以外の調査区配置図周辺にスケッチされた遺物及び人骨は基本的には長谷部が東北帝大へ持ち帰った可能性が高い。その後，時期不明[1]であるが，人骨を除く出土遺物を京大に寄託したと考えられ，第２次調査出土遺物とともに収蔵されるにいたったと推測される。また，第３次調査区配置図についても，出土品の寄託時に京大へ提出された可能性がある。

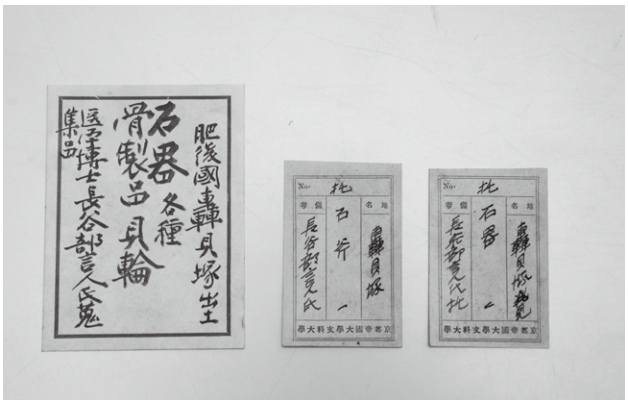
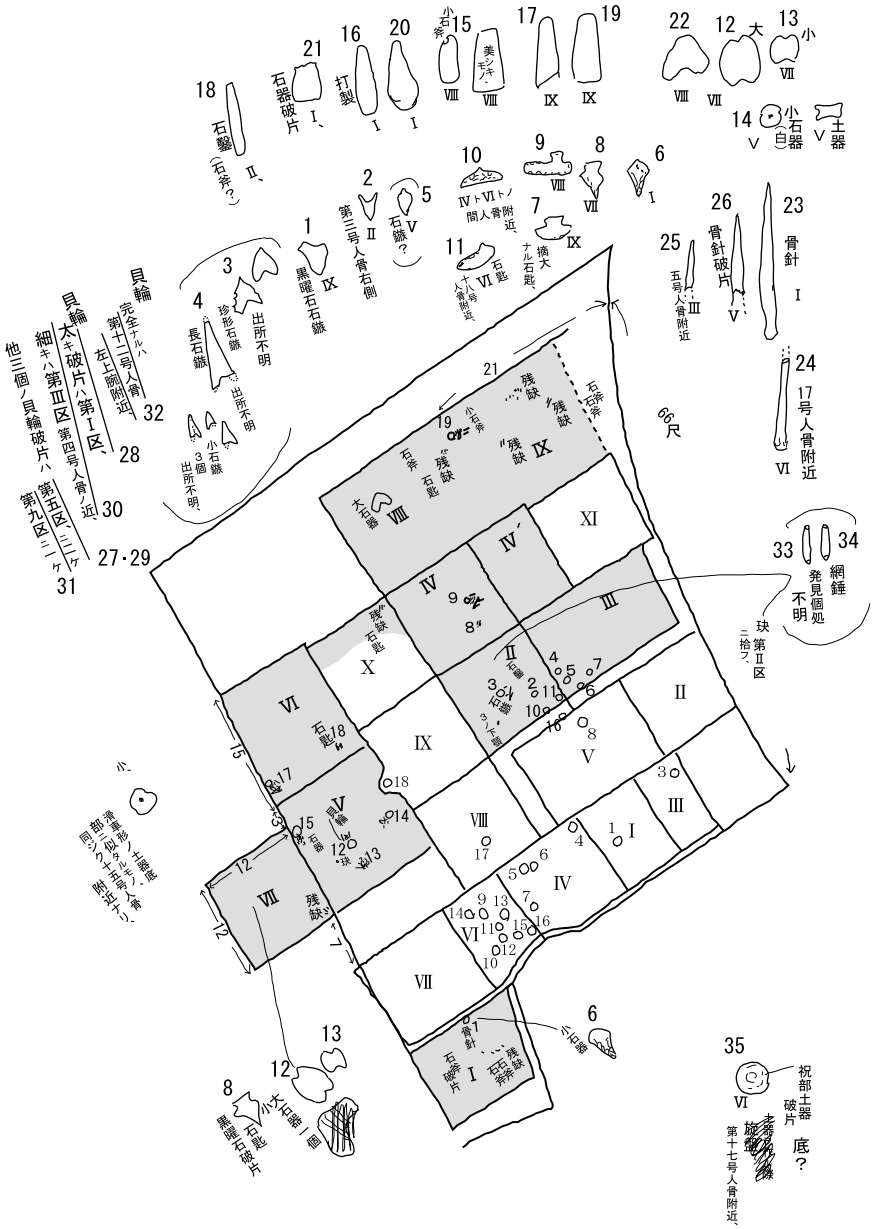


写真３　長谷部言人による蒐集・寄託等を示すラベル



第２図　轟貝塚第３次発掘調査区と出土遺物のスケッチ（遺物番号は第３表，写真４・５と対応）
※調査区内のアラビア数字は人骨番号（明朝体：２次調査，ゴシック：３次調査）

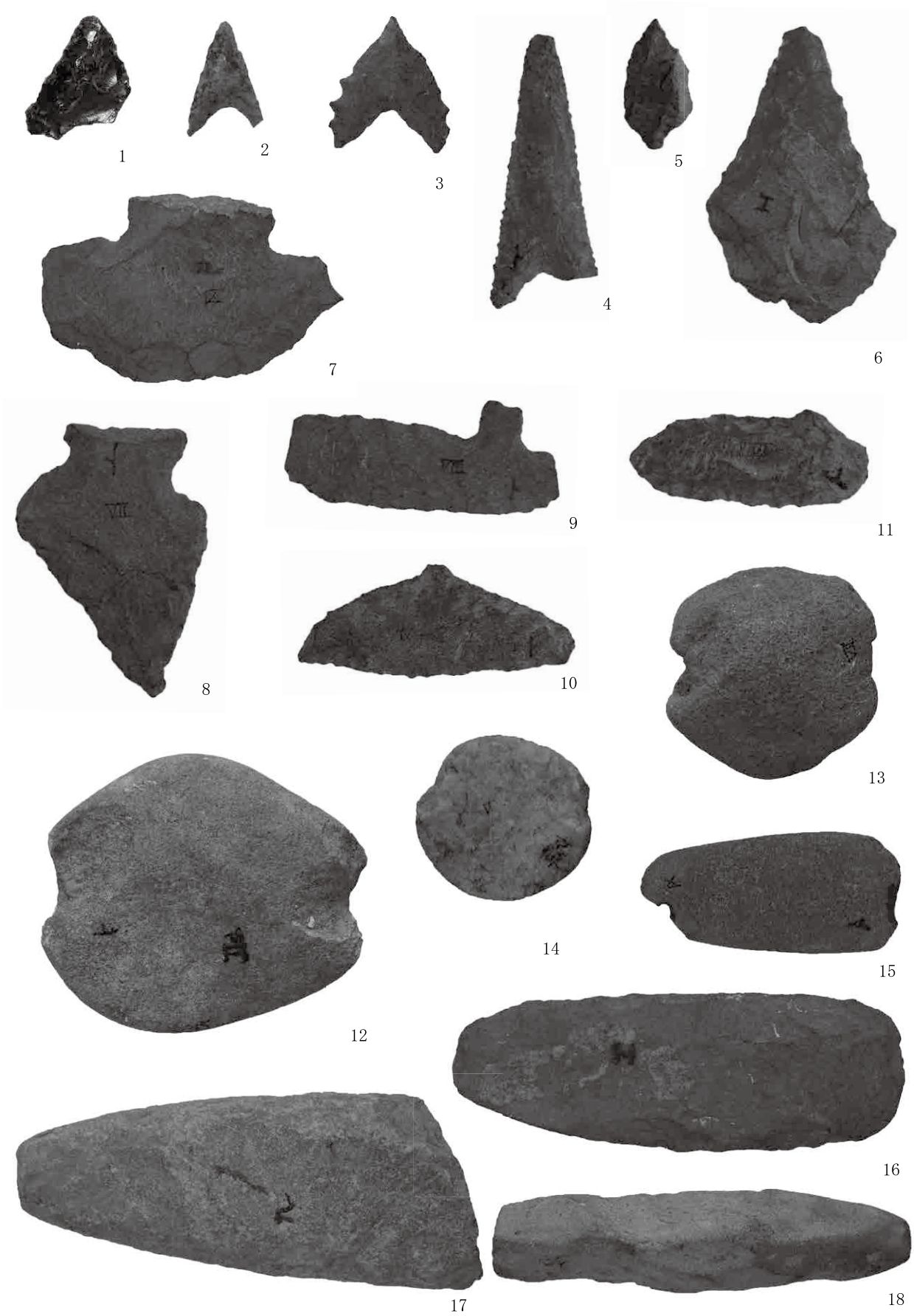


写真４　轟貝塚第３次調査出土遺物１（京都大学総合博物館所蔵）

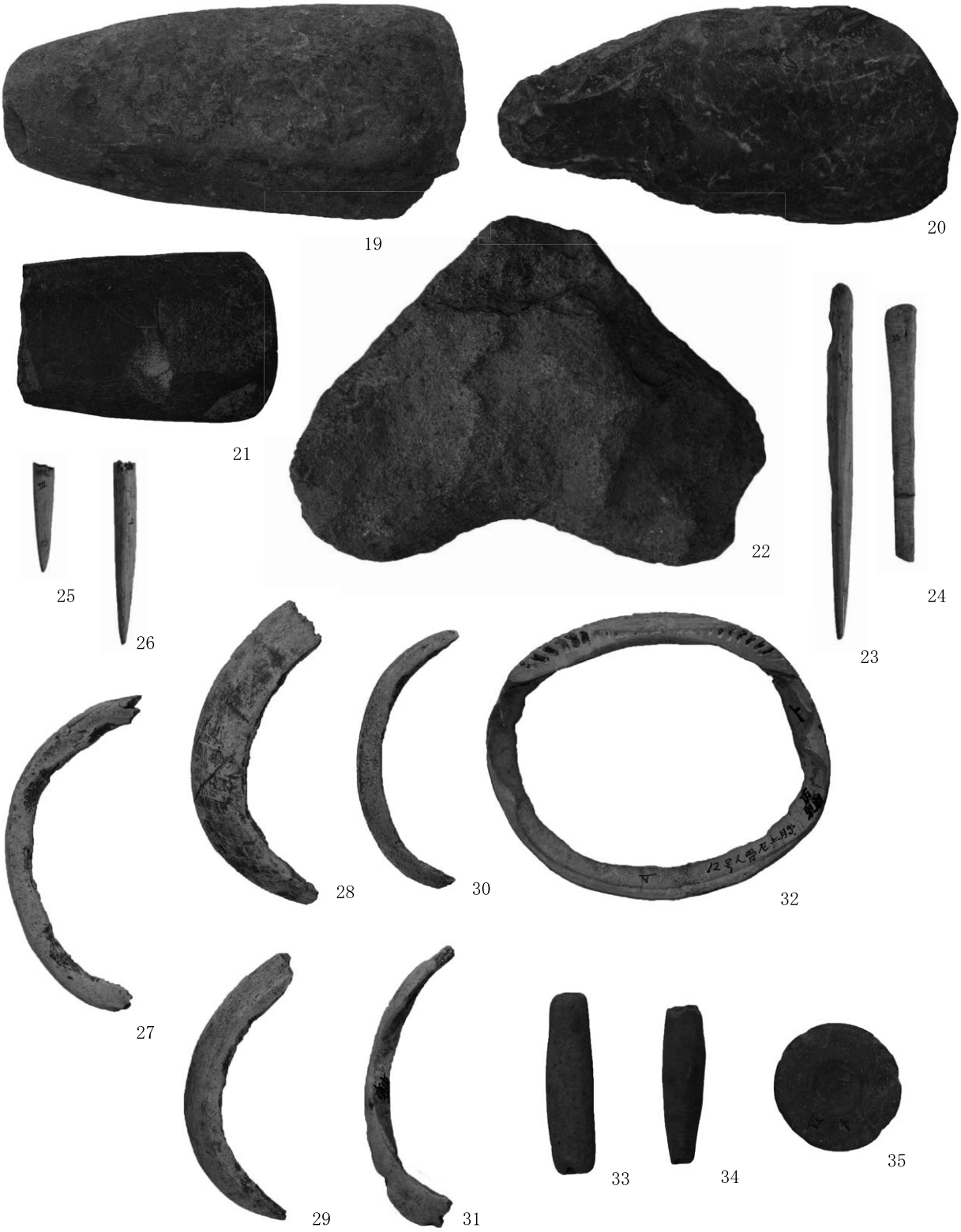


写真５　轟貝塚第３次調査出土遺物２（京都大学総合博物館所蔵）

（3）東京大学資料について

東大に所蔵されている轟貝塚関連資料は，第３次調査の出土人骨のみである。当該人骨資料は，元々，調査終了後に長谷部言人によって東北帝大で保管されていたものとみられる。このことは，清野謙次が**「東北医大の長谷部博士の所には備中国津雲・肥後国轟・河内国国府・備中国端島等の石器時代人骨が有るらしい」**と『日本原人の研究』（清野 1925）のなかで記述していることからもうかがえる。長谷部が東京帝大に所属先が移った昭和 13（1938）年以降，東北帝大から東京帝大へ資料が移されたと推測される。

先述のとおり，長谷部は大正９（1920）年の第３次調査に関する報告書は作成しておらず，大正 12（1923）年に出土人骨の抜歯状況に関する報告（長谷部 1923）を行った程度であったが，1998 年に「九州地方出土縄文時代人骨の形態学的特徴－東京大学総合研究博物館所蔵標本資料について－」『国立科学博物館専報』第 30 巻で第３次調査出土人骨の形態学的な研究報告がなされた（海部・中橋・橋本 1998）。

石器時代人種論争で著名な小金井良精以来，東大には歴代の研究者によって全国各地の縄文時代人骨が蒐集，保管されてきたが，当該報告は東大総合研究博物館が所蔵する轟貝塚を中心とする九州地方の縄文人骨を取り上げ，その形態的特徴を検討したものである[2)]。轟貝塚第３次調査出土人骨について，推定される年齢や性別，遺存部位等を，海部・中橋・橋本 1998 から以下のとおり転載する[3)]。

131591（轟 1，44）：成年（骨端）女性（四肢骨）の四肢骨。左上腕骨混入。

131592（轟 2，45）：成年（骨端）女性（四肢骨）の四肢骨。轟１，２，３号のどれとも判断できない頭骨片があったが，形態学的特徴の記載においては取り敢えず２号として扱った。

131593（轟 3，46）：壮年（恥骨結合面，骨端）男性（恥骨と四肢骨）の２個体分の体幹体肢骨片。２個体あるのは大腿骨と脛骨で個体分けできない。この他に女性と思われる右尺骨と大腿骨の破片が混入している。

131594（轟 4，47）：熟年（咬耗度）女性（四肢骨）の断片的全身骨格。頭骨は轟４，５号の混ざった箱にあったが，女性と判断されるため４号に分類した。

131595（轟 5，48）：成年（骨端）男性（四肢骨）の体幹体肢骨。幼児骨を含む混入骨あり。

131596（轟 6，49）：壮年（耳状面，縫合）女性（耳状面前溝，四肢骨）の断片的全身骨格。

131597（轟 6’，HS 番号なし）：全身の破片を含むが複数個体あると思われる。頭骨片は女性。

131598（轟 7，50）：成年（骨端）男性（四肢骨）の部分的全身骨格。女性の右大腿骨混入。

131599（轟 8，51）：少年（骨端）の体幹体肢骨片。

131600（轟 9，52）：熟年（咬耗度）女性（大坐骨切痕，耳状面前溝）の全身骨格。保存良好。

131601（轟 10，53）：成年（骨端）女性（四肢骨）の断片的全身骨格。長谷部（1923）は熟年男性としている。

131602（轟 11，54）：大腿骨，脛骨の断片。

131603（轟 12，55）：青年（骨端）女性（四肢骨）の断片的全身骨格。

131604（轟 13，56）：若年（骨端）男性（大坐骨切痕）の体幹体肢骨。

131605（轟 14，57）：熟年（恥骨結合面）男性（恥骨，大坐骨切痕）の体幹体肢骨。保存良好。尺骨と脛骨の破片が混入。右橈骨に骨折の跡を認めるが右尺骨には影響がない。

131606（轟 14’，HS 番号なし）：幼児（長骨サイズ）の四肢骨片。

131607（轟 15，58）：壮年（骨端，サイズ，縫合）男性？（四肢骨）の部分的全身骨格。

131608（轟 15’，HS 番号なし）：乳児（３ヵ月，歯）の頭骨と，幼児（３～４歳，長骨サイズ）の体幹体肢骨片。成人と思われる頭骨片混入。

131609（轟 16，59）：若年（骨端）の下肢骨片。成人の下肢骨片混入。

131610（轟 17，60）：熟年（恥骨結合面）男性（恥骨，大坐骨切痕）の全身骨格。保存良好。

131611（轟 19，62）：壮年（恥骨結合面）男性（恥骨，大坐骨切痕）の全身骨格。比較的保存良好。

131612（轟 20，63）：成年（骨端）男性（大坐骨切痕）の部分的全身骨格。

131613（轟 21，64）：壮年（縫合）女性（頭骨）の全身骨格。比較的保存良好。橈骨と尺骨は別個体の男性と思われる。

131614（轟 22，64(1)）：熟年（恥骨結合面）男性（恥骨，大坐骨切痕）の断片的全身骨格。

131615（轟 23，HS 番号なし）：体幹体肢骨片。

131616（轟 24，HS 番号なし）：小児（歯）の頭骨と幼児（サイズ）の体幹体肢骨。

131617（轟 25，HS 番号なし）：壮年（縫合）女性（四肢骨）の断片的全身骨格。若年個体の鎖骨片混入。

131618（轟 26，HS 番号なし）：熟年（咬耗度）男性？（頭骨）の頭骨。

登録番号なし（轟 01，42）：成年（骨端とサイズ）。橈骨と腓骨の破片。

登録番号なし（轟 02,HS 番号なし）:壮年（縫合,咬耗度）男性（四肢骨）の断片的全身骨格。大腿骨は別個体の可能性あり。

登録番号なし（轟 03，HS 番号なし）：成年（サイズ）男性？（四肢骨）の断片的全身骨格。幼児骨混入。

登録番号なし（轟 04，HS 番号なし）：成年（骨端）女性（四肢骨）の断片的全身骨格。

登録番号なし（轟 05，HS 番号なし）:成年（耳状面）女性（大坐骨切痕，耳状面前溝）の寛骨片，男性と思われる脛骨片，幼児の右上腕骨などが混ざっている。

登録番号なし（轟 06，HS 番号なし）：体幹体肢骨片。

このように，別個体の人骨の混入が多い等の問題もあるものの，第３次調査出土人骨が一括保管されていることから資料的価値は高い。なお，登録番号なしの人骨も含めれば，計 34 個体が報告されているが，京大で確認した第３次調査とみられる調査区配置図では，１号から 19 号の人骨が示されており，大きな隔たりがある。この理由については，混入により同一個体が別個体としてカウントされている可能性があげられる。

また，１号から 19 号までの人骨出土地点の他，上記配置図に「残缺」（残欠）との記載が７箇所あり，それぞれ短い線や点で多数スケッチされているが，その表現手法から人骨の破片を示した可能性が高く，少なくとも計 26 地点から出土した人骨ととらえることができ，人骨個体数はそれ以上であったと推測される。その他，図面に出土地点を記載されずに取り上げられた人骨の存在も想定される。

海部らの研究では，渡来系弥生時代人（北部九州・山口地方出土）を基準とした轟貝塚や本州の縄文時代人（岡山県笠岡市津雲貝塚，福島県相馬郡新地町三貫地貝塚等），現代人（主に九州地方）との比較検討がなされた（海部・中橋・橋本 1998）。

その結果，頭骨資料は，概ね本州の縄文時代人の変異幅に納まると判断され，渡来系弥生時代人との強い類縁性をうかがわせるものはなかった。保存のよい熟年男性１例（17 号，HS 番号 60）では，高眼窩傾向や鼻骨の形態等，本州の縄文時代人の平均的状態と多少異なる特徴もあるが，低顔性とこれに付随する広鼻傾向等，本州の縄文時代人に特徴的な形態が認められたとする。他の断片的頭骨資料や下顎骨の形態及び歯の形質も，概ね本州の縄文時代人と共通するものであった。

また，頭骨以外では，四肢骨の長さが渡来系弥生人より短い個体が多いようであり，骨体の諸形態にも本州の縄文時代人と共通する特徴が色濃く認められたとする。このことから，検討された資料は少数であり，所属時代が不明であるものの，これらの縄文時代人は本州の縄文時代人と共通した骨形態特徴を保有していたと考えて矛盾ないと結論付けた。

註

１）長谷部による寄託を示すラベルは，「京都帝國大學文化大學」と右横書きされおり，戦前に作成されたものであろう。

このことを重視すれば，第３次調査の資料は戦前に京都帝大へ寄託された可能性を指摘できよう。

２）海部・中橋・橋本 1998 によれば，これらの資料は，「長年のうちに一部の個体が混ざり合っていたので，接合可能なものは復元しながら調整し直した。一部の骨には番号が記されており，整理はこれに従ったが，同一番号でも明らかに別個体であるもの，番号が異なっていても同一個体とみなせるものがあり，記入されている番号の信頼性は必ずしも確かでない。取り敢えず，同一番号の標本，もしくは同じ箱や区域に納められていた標本で，サイズや頑丈性において矛盾が認められなかった場合には，同一個体とみなすこととした。しかしそれでも個体分けできなかった資料があったほか，上記の事情のため，一部の個体分けには誤りがある可能性もある」としている。

３）６桁の番号は東大総合研究博物館の登録番号で，その次の括弧内は標本名及び長谷部による番号（HS 番号）（遠藤・遠藤 1979）。轟 01 ～ 06 は新たにつけられた標本番号。性別と年齢には，括弧内に主な判定部位もしくは根拠を付記。年齢区分は，溝口（1995）にならって胎児，幼児（０～６歳），少年（７～ 15 歳），若年（16 ～ 19 歳），壮年（20 ～ 40 歳），熟年（41 ～ 60 歳），老年（61 歳～）の７段階，およびこれらに区分できない場合は未成年（～ 19 歳），成年（20 歳～），あるいは青年（16 ～ 30 歳）という区分が用いられている。

4　轟貝塚第５次調査出土資料（熊本大学資料）について

（1）第５次調査出土資料について

第５次調査は，昭和 33（1958）年７月 30 日から８月３日にかけて宇土市や県立宇土高等学校が実施主体となって行われたものであり，小林久雄を調査隊長として実施された。本調査の目的は，「縄文前期の文化の性格を，貝層の層によってつきとめ，その編年の関係を明らかにする」（松本 1958）というものであり，その調査成果については，調査員の松本雅明（熊本大学法文学部）や富樫卯三郎（宇土高等学校）によって「轟式土器の編年－熊本県宇土市轟貝塚調査報告－」『考古学雑誌』第 47 巻第３号で発表された（松本・富樫 1961。宇土市教育委員会編 2008 に再録）。現在，出土遺物は熊本大学文学部考古学研究室で管理・保管されている。

当該調査報告では，貝層の確認と層位関係の把握から轟式土器をＡ式～Ｄ式に細分したが，掲載された土器や石器以外にも多量の遺物が出土している。このうち，動物遺存体と貝製品については，中川毅人（中川 2001）によって報告されたが，土器・石器の多くは未報告のままとなっていたことから，熊本大学文学部考古学研究室では，平成 25（2013）年から令和元（2019）年にかけて当該資料の再整理を行った。以下では，その内容について報告する。遺物実測図の作成は，安田未来，片山弘喜，富高敦史，中村聖美，山元瞭平，廣重知樹が行い，本文の執筆・編集は廣重が行った。

写真６　轟貝塚第５次発掘調査出土遺物収蔵木箱

（2）熊本大学文学部考古学研究室所蔵の轟貝塚出土資料について

熊本大学文学部考古学研究室

① はじめに

轟貝塚は，宇土市宮庄町須崎・居屋敷・池田に所在する縄文時代早期から後期の大規模な貝塚である。大正時代から発掘調査が始められ，現在 13 次を数える。これは『轟貝塚』（宇土市教育委員会編 2008）や『轟貝塚』Ⅱ（宇土市教育委員会編 2017）に詳しく述べられている。そのうち，第５次調査出土土器は，一部が縄文早期末から前期に位置づけられる轟式土器の標式資料とされ，「轟式土器の編年」（松本・富樫 1961）にて発表された。当該調査は，轟貝塚において現在へ通じる初めての考古学的調査であり，貝層の確認と層位関係の把握から轟式土器をＡ～Ｄ式に細分している。しかし，この型式分類は研究者の間でも指摘されているように，先行型式の土器が混じり，混乱がみられる。本稿では，第５次調査で出土資料のうち，図化に耐えうる資料を提示し，調査出土遺物の提示と層位の再検討を行う。

土器は，松本・富樫 1961 で未報告の轟式以外の型式の土器についても報告するものとする。なお，熊本大学考古学研究室で保管している轟貝塚出土の縄文土器には，小林久雄の収集資料（いわゆる「小林コレクション」，一時的に熊本大学に保管されていた）や坂本経堯が報告した土器（坂本 1983）があり，坂本によれば昭和５（1930）年の調査による遺物であると記載されている。これらの資料についても，計６点掲載した（第 16 図 298 ～ 303）。また，石器は，松本・富樫 1961 で報告された資料の写真を掲載した。なお，動物遺存体や貝製品については，中川毅人の報告（中川 2001）を参照されたい。

② 調査の概要と轟式土器の型式分類（第３・４図）

調査の概要　第５次調査は，「縄文前期の文化の性格を，貝層の層によってつきとめ，その編年の関係を明らかにする」（松本 1958）ために行われた。トレンチを６ヶ所設定し，最も原初の状態をとどめるⅠ Tr，その他比較的良好に残るⅡ Tr，Ⅴ Tr，Ⅵ Tr の出土遺物の層位に基づいて検討が行われた（第３・４図）。各トレンチの概要は，次のとおりである。

Ⅰ Tr は，南北 1.5 ～ 1.8 m，東西 2.5 mのトレンチで，５つの層位が確認された。第１層は約 20 ㎝の耕土層，第２層は約 20 ～ 25 ㎝の純貝層，第３層は約 15 ～ 23 ㎝の混土貝層，第４層は約 10 ㎝の貝層，第５層は約 100 ㎝の純黒土層である。第４層の上面の一部に広さ１㎡，厚さ約 15㎝ の焼土が確認されている。第５層は上位 30 ㎝に遺物が集中して出土している。第２層は阿高式の単独出土，第３層以下は轟式が出土し，第５層下層からは押型文土器も出土したことが記されている。

Ⅱ Tr は，ａとｂの２つの小トレンチで構成される。このうち比較的プライマリーな堆積状況を残しているとされる部分があるのがｂトレンチ（南北６ｍ，東西２ｍ）で，３つの層位が確認された。第１層は約 20 ㎝の表土，第２層は約 20 ～ 30 ㎝の貝層，第３層は約 30 ～ 40㎝ の黒色土層である。第３層の下層がその中でも混乱のない層であるとされており，轟式土器が単独出土したと記されている。一方，混乱しているａにも遺物が出土する層がある。深さ 60 ～ 100 ㎝にある純貝層であるが，土師器を交え，上位に焼貝層が存在することから近世の撹乱であるとみられる。

Ⅴ Tr は，ａ～ｃの計３つの小トレンチで構成される。このうち比較的プライマリーな堆積状況を残しているとされる部分があるのがｂトレンチ（南北２ｍ，東西 4.5 ｍ）で，３つの層位が確認された。第１層は約 15 ㎝の黒色表土（混貝層），第２層は約 20 ～ 45 ㎝の混土貝層（第一），第３層は約 10 ㎝の混土貝層（第二）である。それ以下は第４層の黄褐色土層がある。また，トレンチの一部では第４層の下で段落ちしており，第５層の灰色粘土層が見られる。第５層は湧水が見られ，埋め立てられた湿地もしくは水田とされている。

Ⅵ Tr は，ａとｂの２つの小トレンチから構成される。このうち比較的プライマリーな堆積状況を残すとされる部分があるのがｂトレンチ（南北 2.5 ｍ，東西２ｍ）で，４つの層位が確認された。第１層は約 15 ㎝の黒色表土（混貝層），第２層は 15 ～ 20㎝ の混土貝層，第３層は東南隅にある厚さ不明の純貝層，第４層は約 65㎝ の黒色土層である。第２層は阿高式と轟式が混合し，最下層からは轟Ａ式土器が出土しているとされ，全体的には轟Ｂ式土器の出土が多かったと記されている。第４層下には，地山層とみられる黄褐色土層が広がる。

それぞれ層位は異なる様相が認められるものの，全体として統一した層位を復元することができるとしている。なお，この他のトレンチ（Ⅲ Tr・Ⅳ Tr）においては，全て層位が確実でないとされている。

各トレンチから出土した土器は轟式土器が多く，松本・富樫 1961 ではその型式を次のように細分した。

Ａ式：最下層から出土し，表裏に強い条痕ののこるもの

Ｂ式：条痕の上に粘土帯を貼り付けるもの

　Ｂ－１：条痕の上に粘土帯をはりつけ，それを指頭でつまみ「ミミズバレ文」をつくるもの

　Ｂ－２：「ミミズバレ文」が退化し細くなったもので，表裏の条痕を意識的に消す

　Ｂ－３：「ミミズバレ文」の上に貝殻で刻み目を入れ刺突の沈線に変化するもの

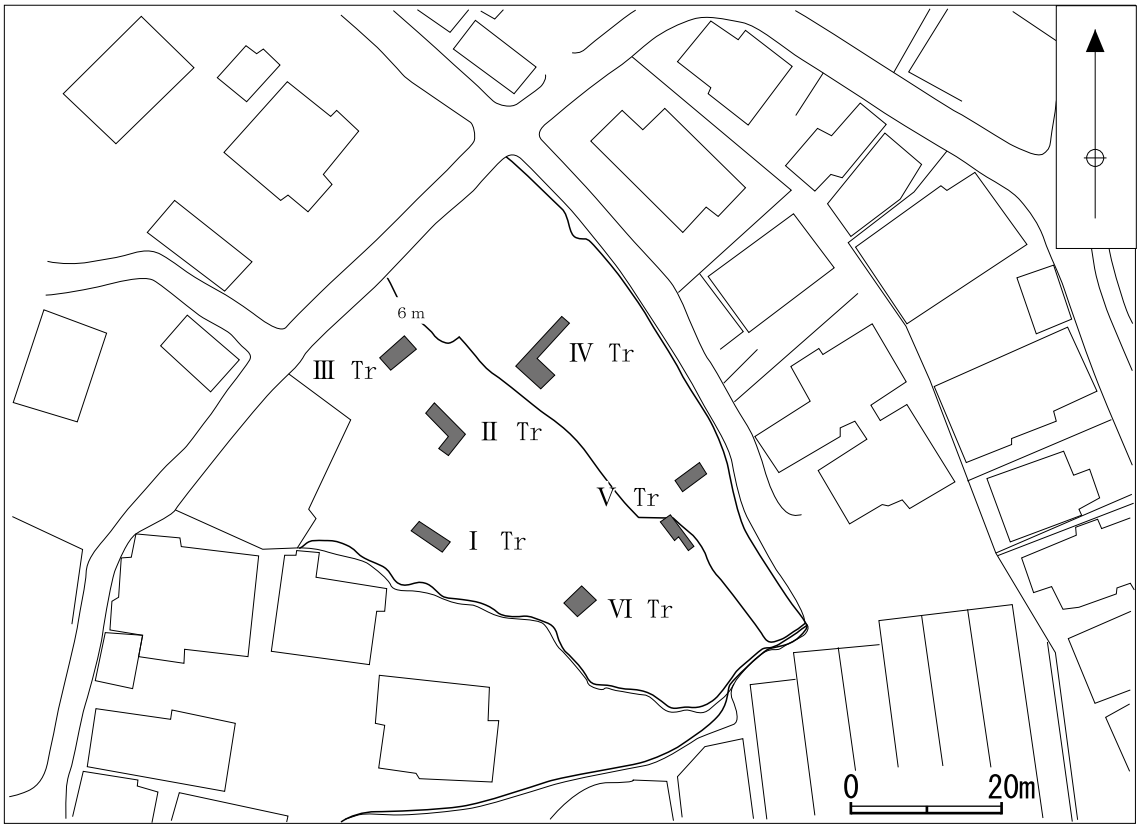
Ｃ式：浅い条痕をのこし，波状文を主体とするもの

　Ｃ－１：条痕文の上を指頭で整え，その上に波状文をほどこしたもの

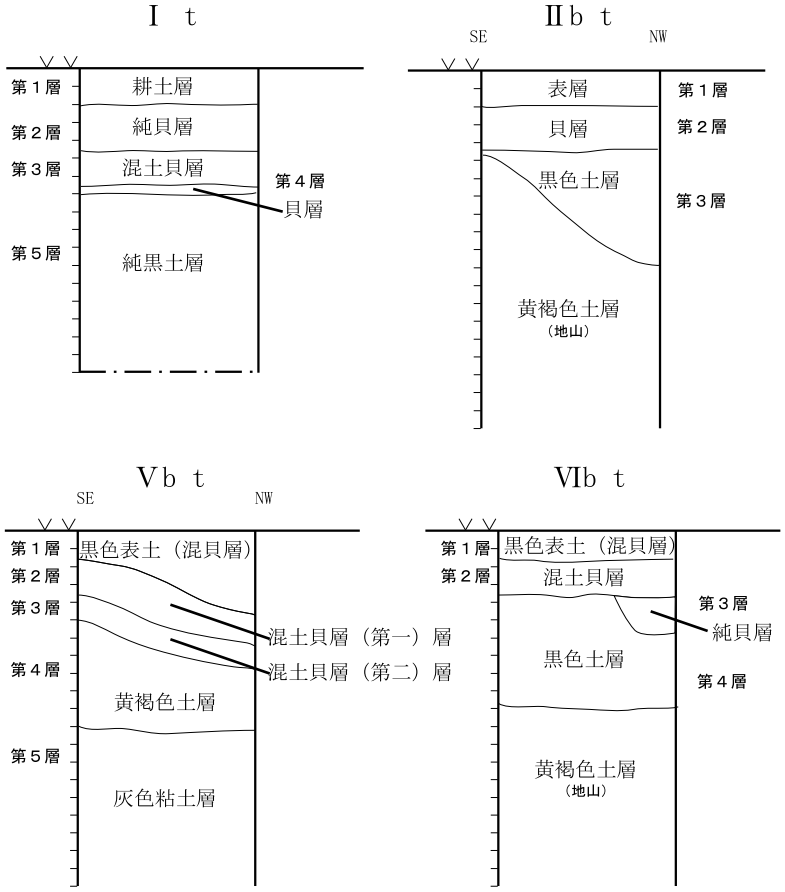
　Ｃ－２：1 類が変化して裏面の条痕が消えるもの

　Ｃ－３：条痕は浅く，貝による刺突文，平行沈線持つもの

4　轟貝塚第５次調査出土資料（熊本大学資料）について



第３図　轟貝塚第５次調査発掘地点（宇土市教育委員会編 2017 に基づき作成）



第４図　轟貝塚第５次調査層位断面模式図

D式：条痕がほとんど消え，他の施文方法が取り入れられる

D－１：短直線紋で内面にも文様を施すもの

D－２：列点文が施文されているもの

D－３：刺突文，直線文や波状文列や爪形文を施すもの

松本・富樫 1961 で示されたのは，轟式土器が条痕文を施したものから，単純な条痕文に粘土帯貼りつけたもの，そして他文様との複合といった，文様の複雑化・複合化を変化の方向とした編年となっている。これは上記の轟貝塚出土土器の層位関係に基づき，轟A式から轟D式までの連続性を想定したものであった。これに対し，1966 年に調査を行った江坂輝彌は，轟C式・轟D式を曽畑式土器に後続する土器として位置付け，轟A式・轟B式と轟C式・轟D式の直接的なつながりを否定している（江坂 1966）。

その後，轟C・D式は，田中良之（田中 1979）や水ノ江和同（水ノ江 1990a）の研究によって型式学的な編年の検討を経て，後者では文様の多条化，地文様の粗雑化を変化の方向として想定した【轟D式→轟C式→尾田式】の編年が発表されている。編年研究の進展を本資料へ照らしてみると，轟C式１類や轟C式３類に塞ノ神式や尾田式が含まれていることが確認できる（第４表）。該当する土器と同型式の土器は，第５次調査以外でも出土しており（宇土市教育委員会 2008，宇土市教育委員会 2017），現在の縄文土器編年に基づいて再検討する必要がある。

③ 出土土器（第 5～19 図）

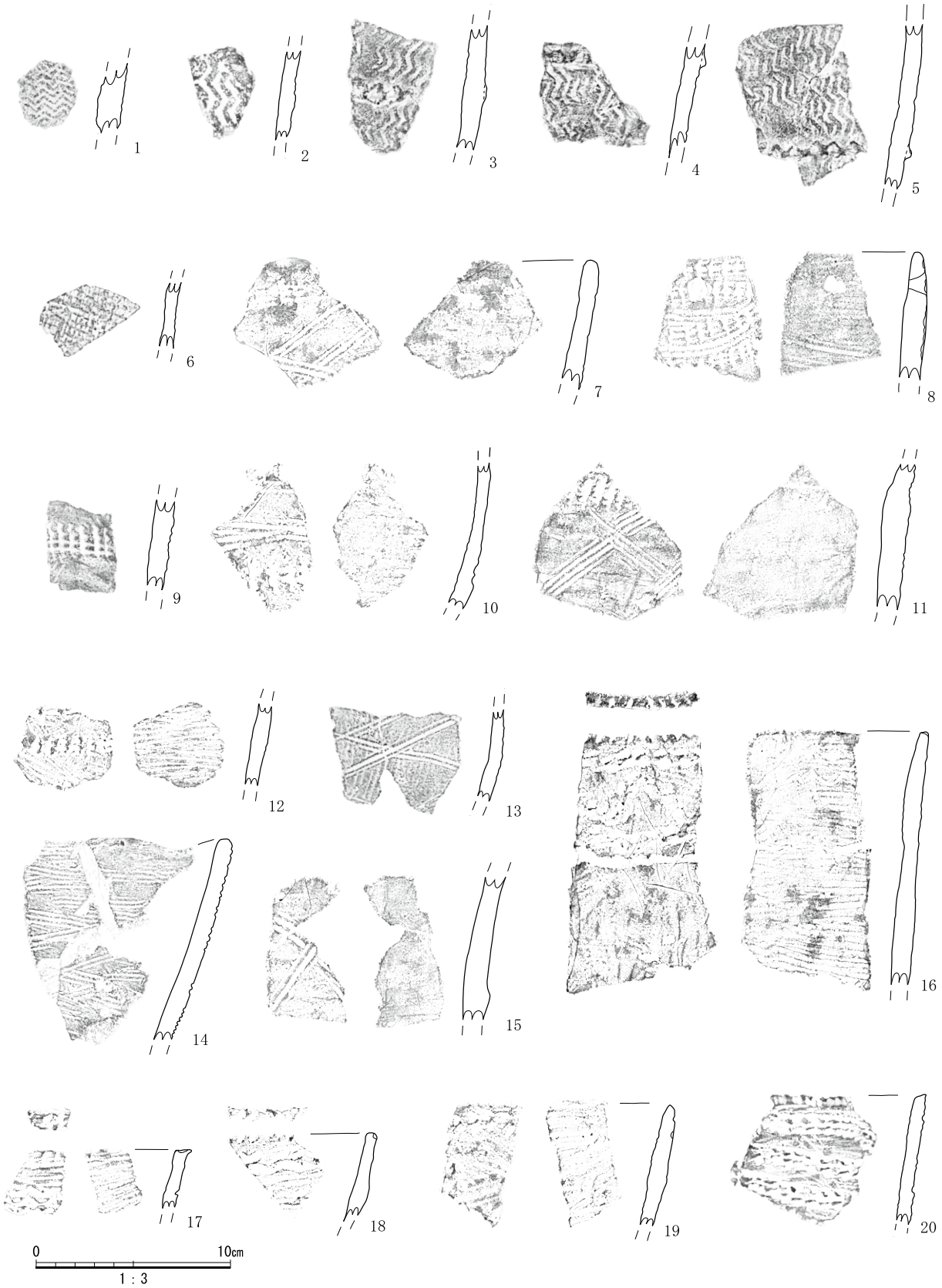
第５次調査においては木箱で 38 箱ほどの遺物が出土しており，このうち轟式土器は細分されて報告されている（松本・富樫 1961）。しかし，他次調査と同様に当該調査においても様々な型式の土器が多数出土しており，早期の押型文土器（手向山式土器）から後期の黒色磨研土器（御領式土器）までと幅広い年代の土器が出土している。以下では，これらの土器を型式に分けて報告する。また，各土器の出土層を復元し，遺跡構造の理解に供したい。

１～６は押型文土器である。いずれも手向山式土器である。１～５は山型の回転楕円体を用い，更に３～５は隆起帯文を施している。６は格子目の回転楕円体を用いている。いずれも胴部である。Ⅰ Tr から２点出土し，１は第５層出土，２は層位不明である。Ⅴ Tr から３～５の計３点が出土したが，いずれも層位不明。６は出土地点不明。

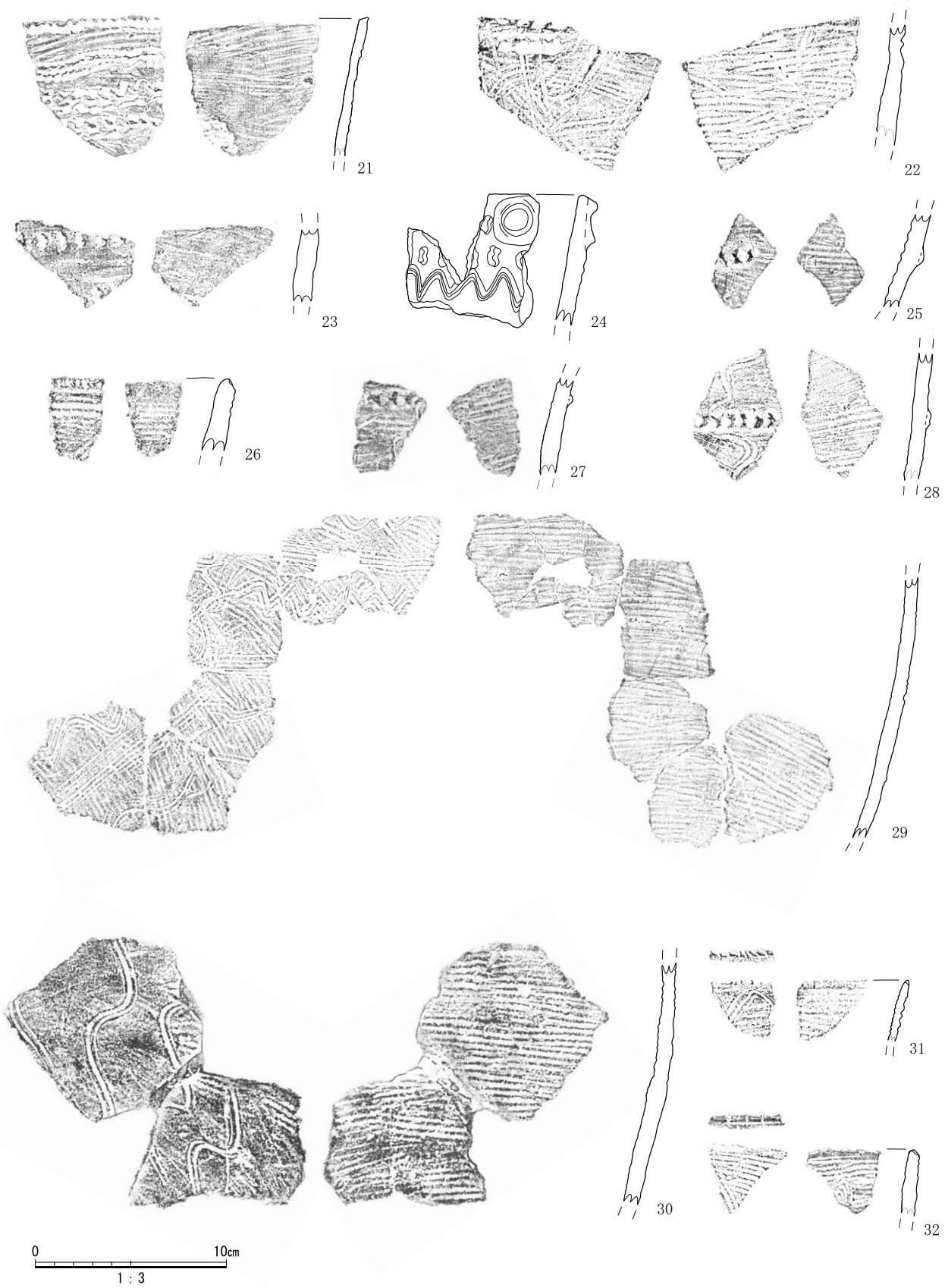
7～23 は塞ノ神式土器である。口唇部に外面から刻み目がみられる。二枚貝を用いて条痕や刺突文，貝殻による条線・刻目文等を施している塞ノ神Ⅲ式（高橋 1997）段階と思われる。7～15 は貝殻条線を格子状に施し上もしくは下に貝殻腹縁による列点文を施すもの，16～22 は貝殻腹縁で押引文を施すものである。これらの中には，22 のように条痕を波状に施すものもみられる。Ⅰ Tr から 17 が出土したが，層位不明である。Ⅱ Tr から 10 点が出土し，７・19 は第２層，15 は第３層から出土した。18 は攪乱層（a 地点純貝層，以下，攪乱層として表記）から出土。9～11・20・21・23 は層位不明である。Ⅲ Tr から出土した 14，Ⅴ Tr から出土した 12・22 は層位不明である。Ⅵ Tr から出土した 13・16 は第４層の出土。８はトレンチ及び層位不明である。

24～27 は苦浜式土器である。横方向若しくは縦方向の波線文の上に隆起帯を貼り付けるものである。佐賀市東名遺跡出土の苦浜式土器に類似するものがある。Ⅱ Tr から 24・26・27 が出土し，24 は第３層，26 は第２層，27 は攪乱層から出土。Ⅲ Tr から出土した 25 は層位不明。

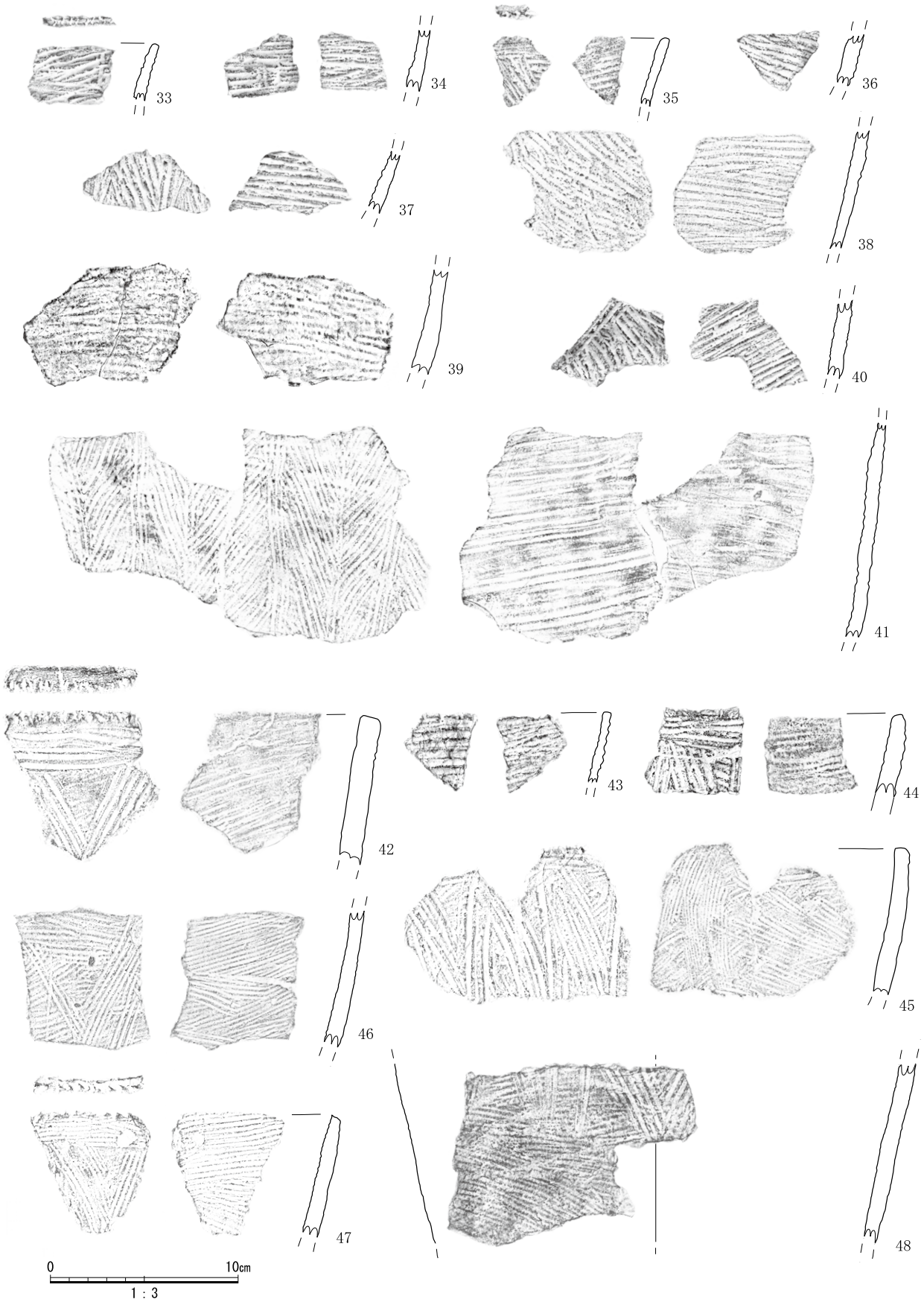
28～60 は轟A式土器である。塞ノ神式以来の口唇部外側の刻み目を継続して施し，条痕を用いて口縁部に鋸歯文や綾杉文，波線文を施し，口縁部直下で横方向に施すものがある。轟A式の中でも桒畑光博の編年（桒畑 2016）におけるＡ２式～西之薗式の段階と思われる。28～52・56・57・59 はＡ２式と思われ，53～55・58



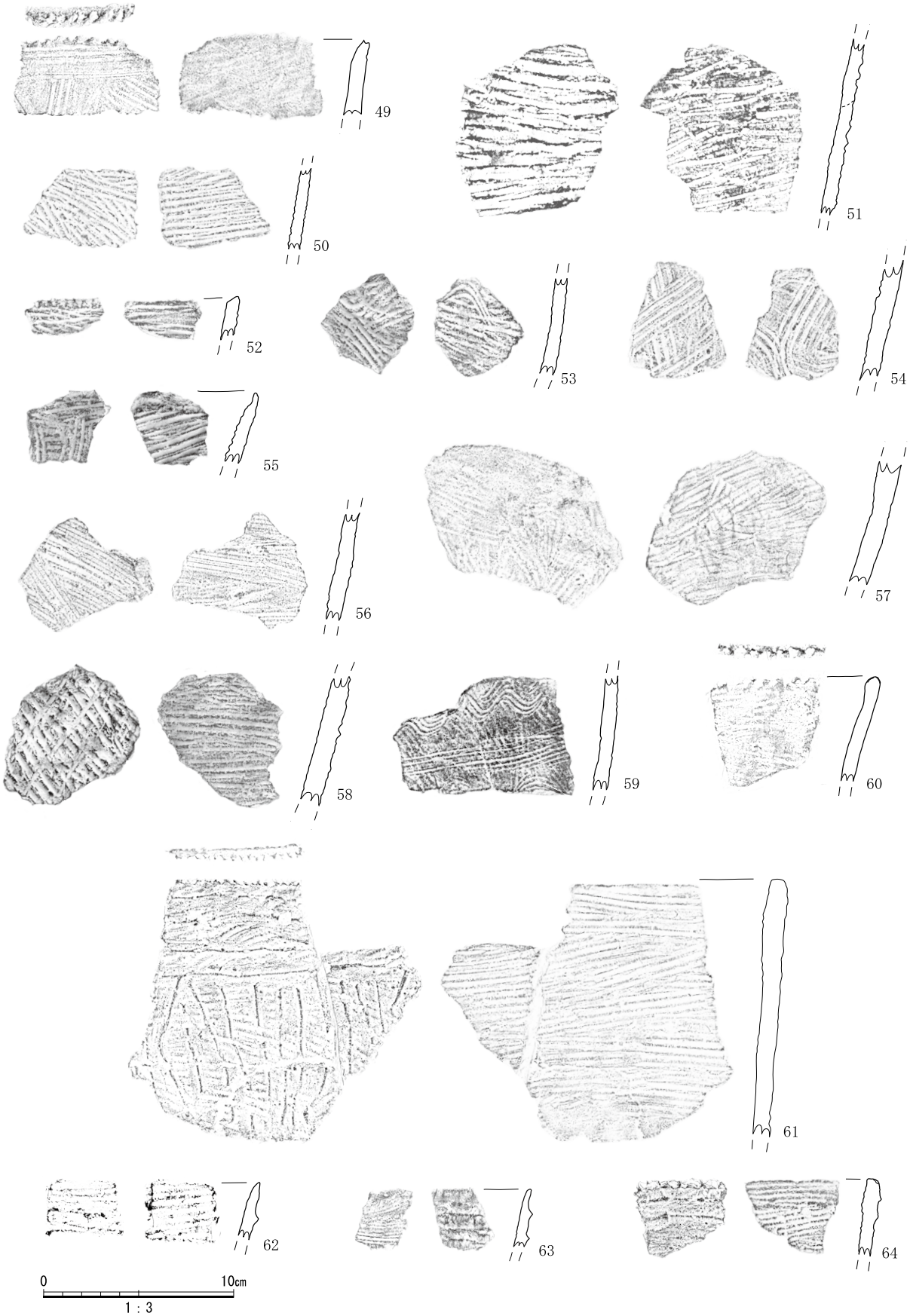
第５図　轟貝塚第５次調査出土土器１



第６図　轟貝塚第５次調査出土土器２



第７図　轟貝塚第５次調査出土土器３



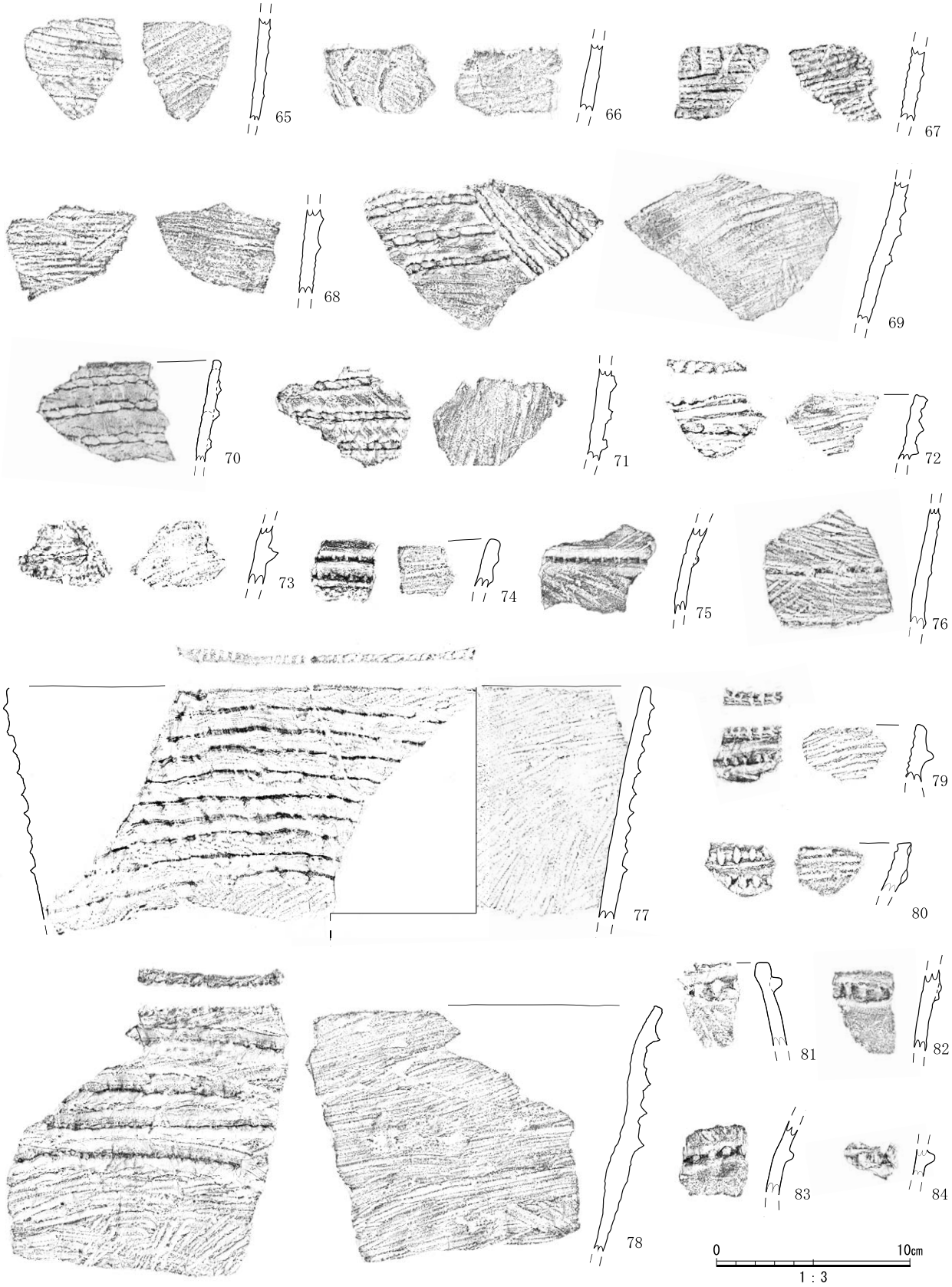
第８図　轟貝塚第５次調査出土土器４

は西之薗式と思われる。胴部の資料については，時期が判定できない。29 は斜め方向の条痕調整に横方向・斜め方向に走る直線状もしくは波線状の条痕文が施される。30 は縦方向の条痕文が施される。31・32 は口縁部に波線状の条痕を施し，口唇部直下に横方向へ直線状の条痕が走る。41 は条痕で綾杉文を描き，縦方向の条痕で区画している。42・44～49 は口縁部に条痕で鋸歯文を描き，口唇部直下を横方向へ条痕を走らせる。59 は横方向へ直線状・波線状の条痕を施している。Ⅰ Tr から５点が出土。第５層から 33～36，第３層から 37 が出土した。Ⅱ Tr から９点が出土し，38 が第３層，39 が攪乱層出土で，29・30・40・53・55・59・60 は層位不明。Ⅴ Tr から 16 点が出土。51 は第５層，31・42・44 は第３層から出土した。32・41・43・44・46～48・52・54・56 ～ 58 は層位不明。Ⅵ Tr は 28・49 の２点が出土した。49 は第３層出土。28 は層位不明で，50 は出土地点不明。

61～91 は轟Ｂ式土器である。貝殻条痕による調整の上に隆起線文や隆帯文を施すものである。61～68 は微隆起線で文様を構成する。61 は口縁部に斜め方向の条痕，胴部に横方向の条痕を施す。そして口縁部に微隆起線文で鋸歯文を描き，口唇部直下に４本の微隆起線文を施している。62～64・67 は口縁部とその周辺であり，66 は胴部に微隆起線文で円を描いている。69～76・79～86 は隆起帯文で正面から刻んだものである。67～73 は太い隆起帯を隆起帯と平行するように正面から刻んでいるものである。74～76・79～86 は太い隆起帯と直角に刻んでいるものである。87～91 はミミズバレ文と呼ばれるような上下から指でつまみ，隆起線を断面三角形状にしたものである。Ⅱ Tr から８点が出土。65・70・77 は第３層，74 は第２層，75・81 は攪乱層から出土。61・76 は層位不明である。Ⅴ Tr から 10 点が出土。66・88 は第３層出土で，67・71・73・79・80・83・89・90 は層位不明。Ⅵ Tr から出土した５点のうち，68・69・78 は第３層から出土，63・91 は層位不明。82・84・86・87 は出土地点不明である。

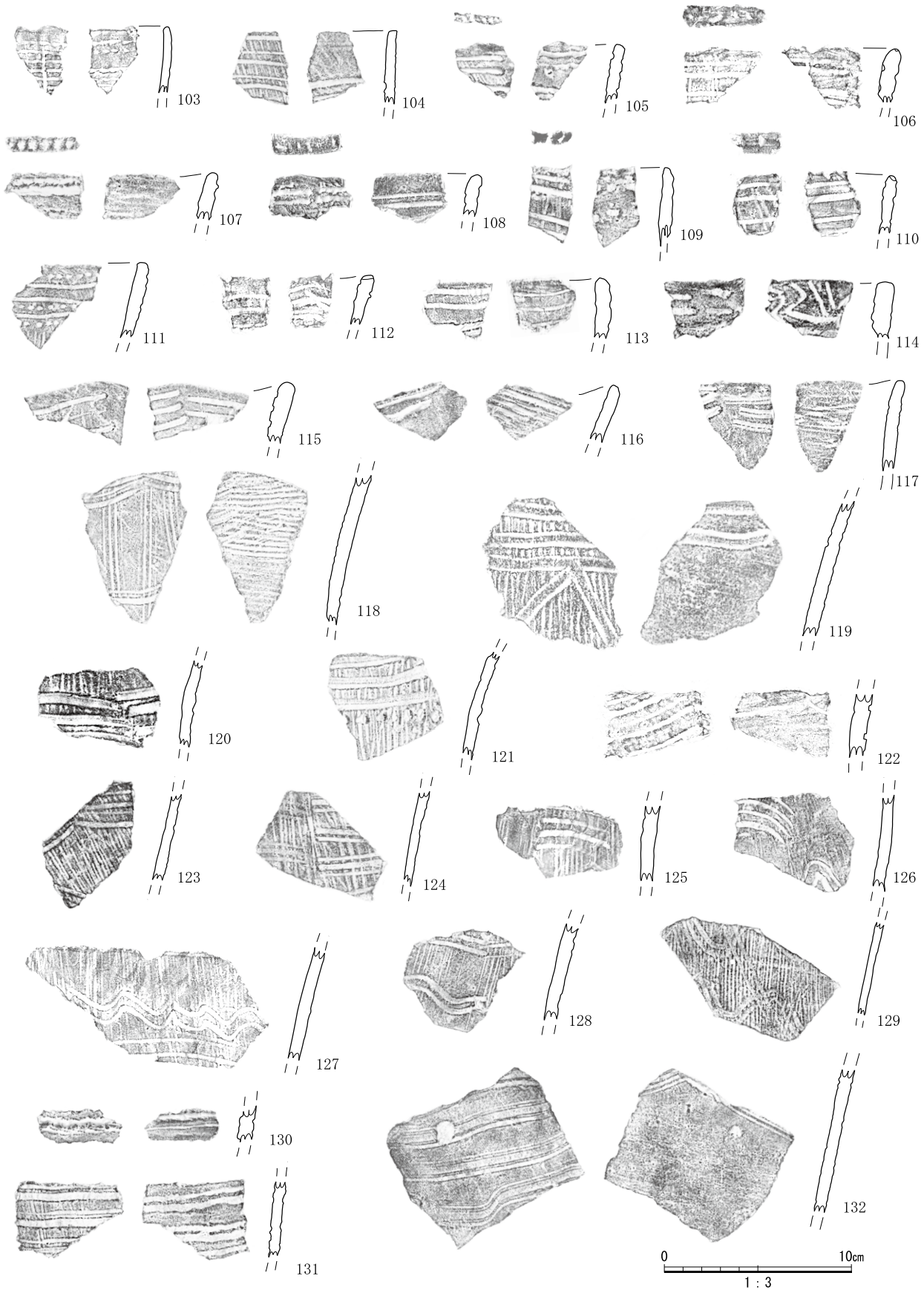
92～174 は轟Ｄ式土器である。条線と呼ばれる縦方向の条痕を地文様として施し，その上から主文様として横方向への直線状・波線状の文様が施される土器群である。地文様と主文様の幅は異なっている。内面は横方向の条痕若しくは沈線文，刺突文等が施される。口唇部には刺突を施すものもある。92～123・125～142・145・147～152 は２本単位の横方向直線文・波線文を施している。95 は外面の直線文を押し引いている。100 は内面に２本単位の沈線文と刺突文を交互に施している。101・109 は内面を刺突文のみで構成している。107・108 は外面の文様を押し引いて施している。111 は外面に刺突と沈線文を交互に施し，胴部は縦方向の条痕が走る。115・116 は波状口縁の一部と思われる。124 は３本単位の横方向直線文を施している。143・144 は波線状の沈線文を胴部に施している。152 は右下方向の条痕の上から左下方向への条線を施している。153～166 は条線が不明瞭なものである。159・160・163 は間隔が狭い押し引きを行い，横方向の条痕は多条である。161・162 は波状の２本単位の沈線文を多条に施している。164～166 は胴部で沈線文３本と刺突文を交互に施している。167 ～ 173 は外面を刺突文で構成するものである。174 は外面を条線と沈線文で施文した上から隆起線文を複合させているものである。Ⅰ Tr から 32 点出土し，123 は第２層，96・97・105・112・113・117・130・135・137・147・148 は第３層，119・127 は焼土層，92・94・109・115・116・141・146・167・172 は第４層，107・110・131・142・144 は第５層から出土した。114・124・139・168 の４点は層位不明。Ⅱ Tr から 26 点出土。98・104・132・138・155・157 は攪乱層，102・103・136・140・143・150・152・154・156・160・162・163・169・170 は第２層，166・174 は第３層から出土。93・153・161・173 は層位不明である。Ⅳ Tr から 11 点出土。95 は混土貝層，99・101・129・164 は焼土層から出土。145 は東２pit から出土。Ⅴ Tr から９点が出土し，106 は第２層，120 は第３層から出土。100・121・128・133・159・165・171 は層位不明。Ⅵ Tr から出土した 118 は層位不明。108・125・134・158 は出土地点不明である。

175～184 は轟Ｃ式土器である。条線が浅くなり，地文様と主文様の幅の違いが無くなる。文様の構成は轟Ｄ式土器の流れを引き継ぎ，主文様には波線状・直線状の単位を持った沈線文が走る。Ⅰ Tr から５点出土。

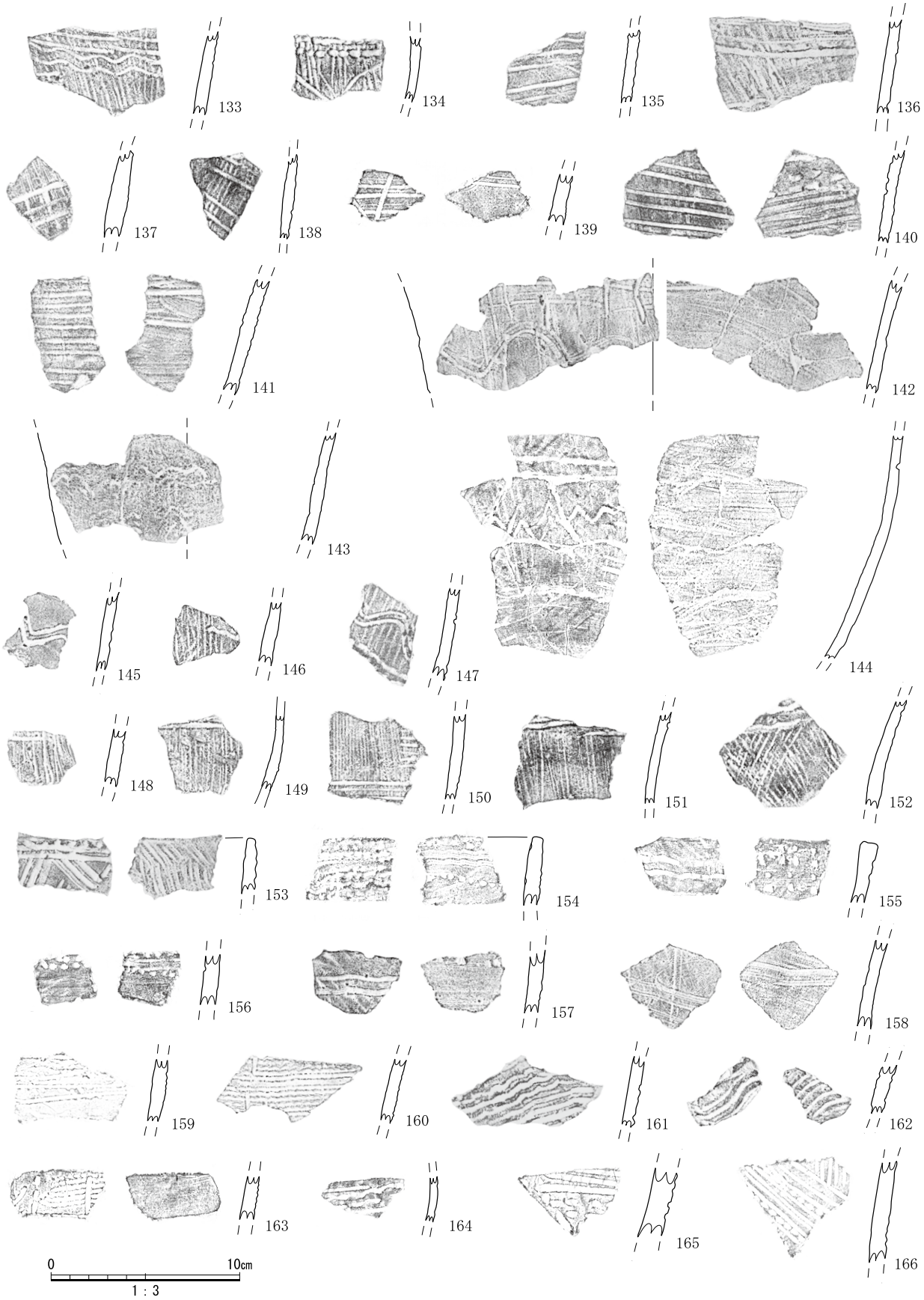


第９図　轟貝塚第５次調査出土土器５

第 10 図　轟貝塚第５次調査出土土器６



第 11 図　轟貝塚第５次調査出土土器７



第 12 図　轟貝塚第５次調査出土土器８

177 は第３層，175 は第４層，178・181・182 は第５層から出土。Ⅳ Tr からは３点出土。180 は焼土層，184 は東２pit から出土。183 は層位不明。また 176 は出土地点不明である。

185～195 は尾田式土器である。貝殻腹縁を用いた連続刺突文や刺突文，沈線文などを外面に施す。185・190・187・195 は横方向の連続刺突文を施し，191 は縦方向の連続刺突文を施す。186・189 は縦方向と横方向が複合している。193 は隆起線文が複合している。194 は沈線文で相互弧文が確認できる。Ⅰ Tr からは 193 が第３層，192 は第４層から出土。Ⅱ Tr 出土の 185 ～ 188・195 は撹乱層，189・191・194 は第３層から出土。190 は層位不明である。

196 は曽畑式土器である。条線の上に，２本単位の沈線文で横方向・斜め方向に施す。Ⅰ Tr の第４層から出土した。

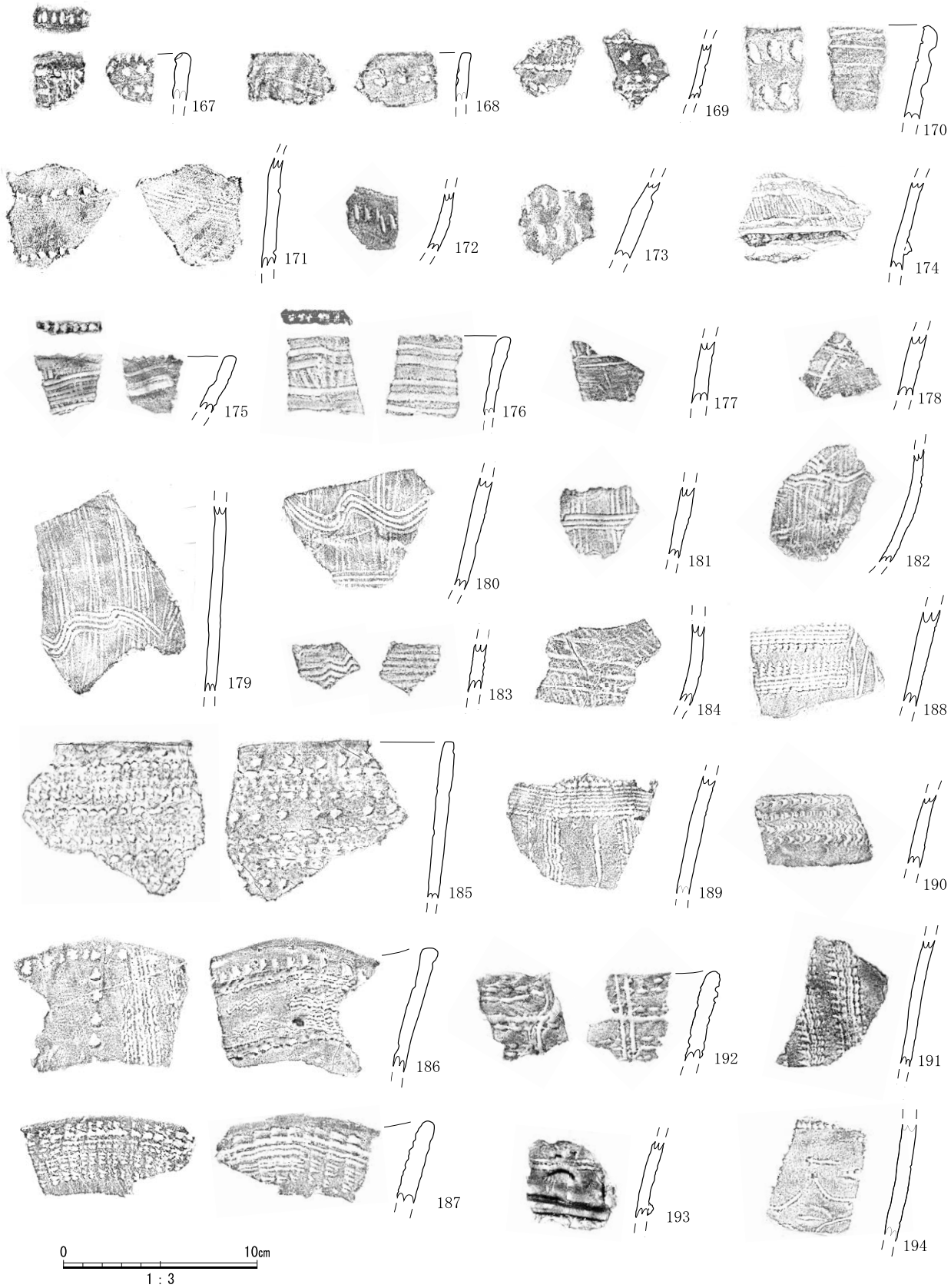
197～205 は並木式土器である。凹線文間を爪状に刻んでいる土器群である。198・199 は刻みの両端が強く押されている。199 は凹線文がない。Ⅱ Tr からは２点が出土した。200 は第２層から出土した。199 は層位不明である。Ⅴ Tr からは２点出土した。198 は第３層から出土した。197 は層位不明である。Ⅵ Tr からは３点出土した。202 は第３層から出土した。203 は第２層から出土した。204 は層位不明である。また，201・205 はトレンチ層位不明である。

206～245 は阿高式土器である。凹線文を口縁部から胴部に施し，口唇部に凹点文を施す土器群である。調整が精緻で，滑石が混じる。荒木隆宏による分類（荒木 2003）によれば，阿高Ⅱ式～Ⅲ式に相当する土器と考えられる。206 は口縁部～胴部の文様帯にかけて残り，口縁部は凹線文による鉤文，胴部は凹線と凹点を複合させた文様が残る。211・212 は底部付近であるが縦方向の凹線文が確認できる。235 は，口縁部が内傾して口唇部が立ちあがり，肩部に把手が付けられる。238 は二股上に分かれた把手で外面の各突出部中央に沈線が走る。Ⅰ Tr から 17 点出土し，214 ～ 216・218・220・234・239 は第２層から出土。207・209・210・212・213・217・219・229・232・245 は層位不明である。Ⅱ Tr は５点で，222・223・227 は第２層から出土した。206・208 は層位不明。Ⅳ Tr は６点で，237・244 は焼土層，221・224・240・241 は東２pit から出土。Ⅴ Tr は 211・236・238・242 が出土したが，いずれも層位不明。Ⅵ Tr は３点で，228・233 は第２層から出土した。243 は層位不明。また，225・226・230・231・235 は出土地点不明である。

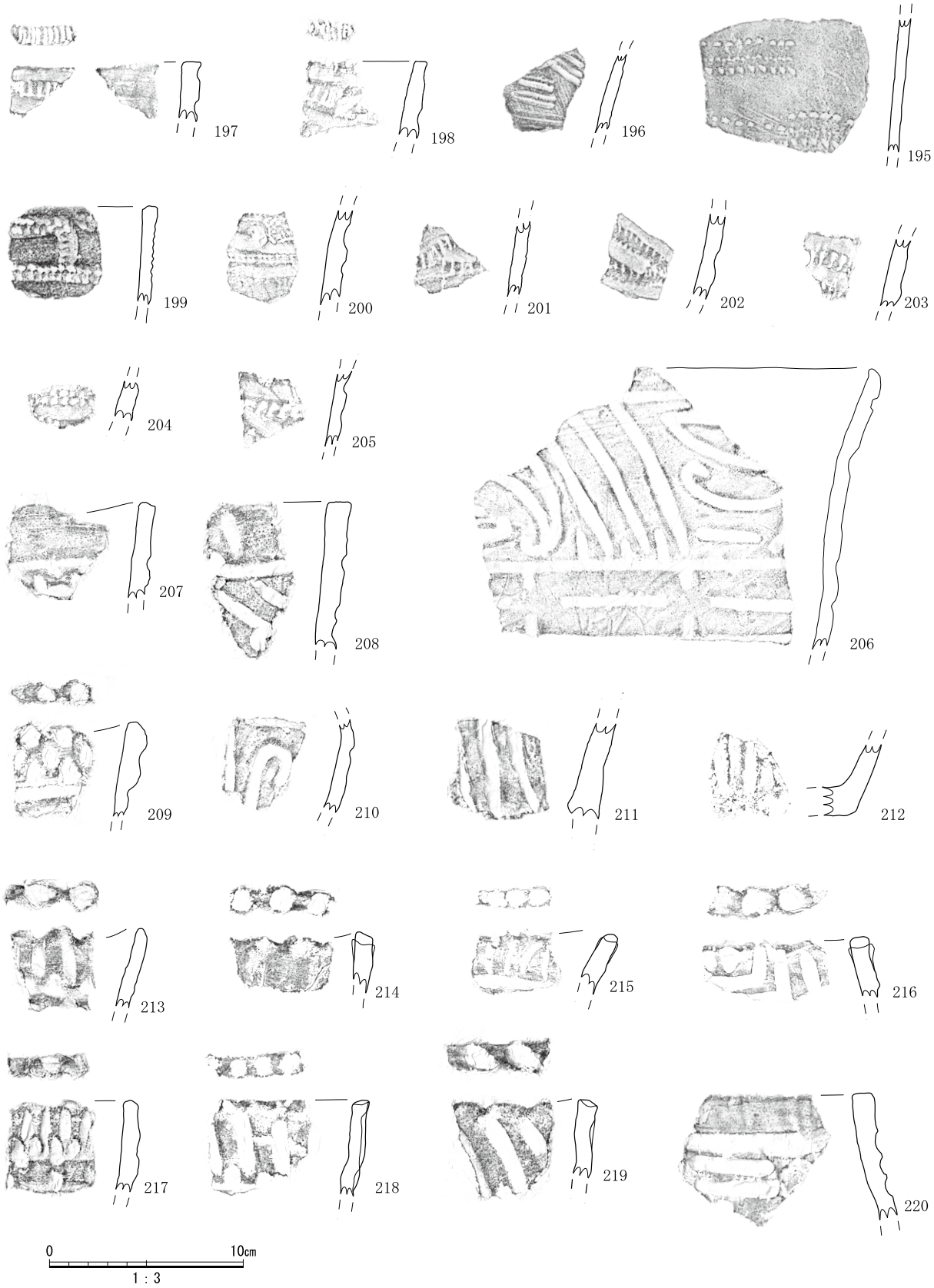
246～261 は南福寺式土器である。凹線は狭く浅くなり，外面に対して斜め方向からヘラ状のもので施文している土器群である。口縁部に横方向，斜め方向に凹線文や凹点文を施す。246 は横方向の綾杉文を施している。247～249 は横方向に凹線文を施している。252・253 は斜め方向の凹点文を施している。254～256 は斜め方向に凹線文を施している。Ⅰ Tr から６点出土し，246・247 は第２層から出土。248・249・257・259 は層位不明である。Ⅱ Tr は２点で，250 は第２層から出土。261 は層位不明である。Ⅳ Tr 出土の 252・255・256，Ⅵ Tr 出土の 251・253・254 は，いずれも層位不明。258・260 は出土地点不明である。

262～273 は出水式土器である。更に線が狭く浅くなり沈線となる。265 は口縁部で粘土帯をずらして接着し，段差を隆起帯状にして刻んでいる。口縁部の文様は，中心に凹点を配置した菱型文である。267 は同様の隆起帯状を持ち，山形の沈線を配置する。263 は口唇部の貼り付け粘土紐をうねらせて接着している。266 は口唇部に３本の粘土紐を編みこむような形で接着している。Ⅰ Tr から２点出土し，262 は第２層から出土。265 は層位不明である。Ⅲ Tr 出土の 269，Ⅳ Tr 出土の 263・268・273 は，いずれも層位不明である。Ⅴ Tr からは１点，267 が出土したが層位不明。Ⅵ Tr からは４点が出土し，266・270 は第２層，272 は第３層から出土。264 は東２pit から出土した。271 は出土地点不明である。

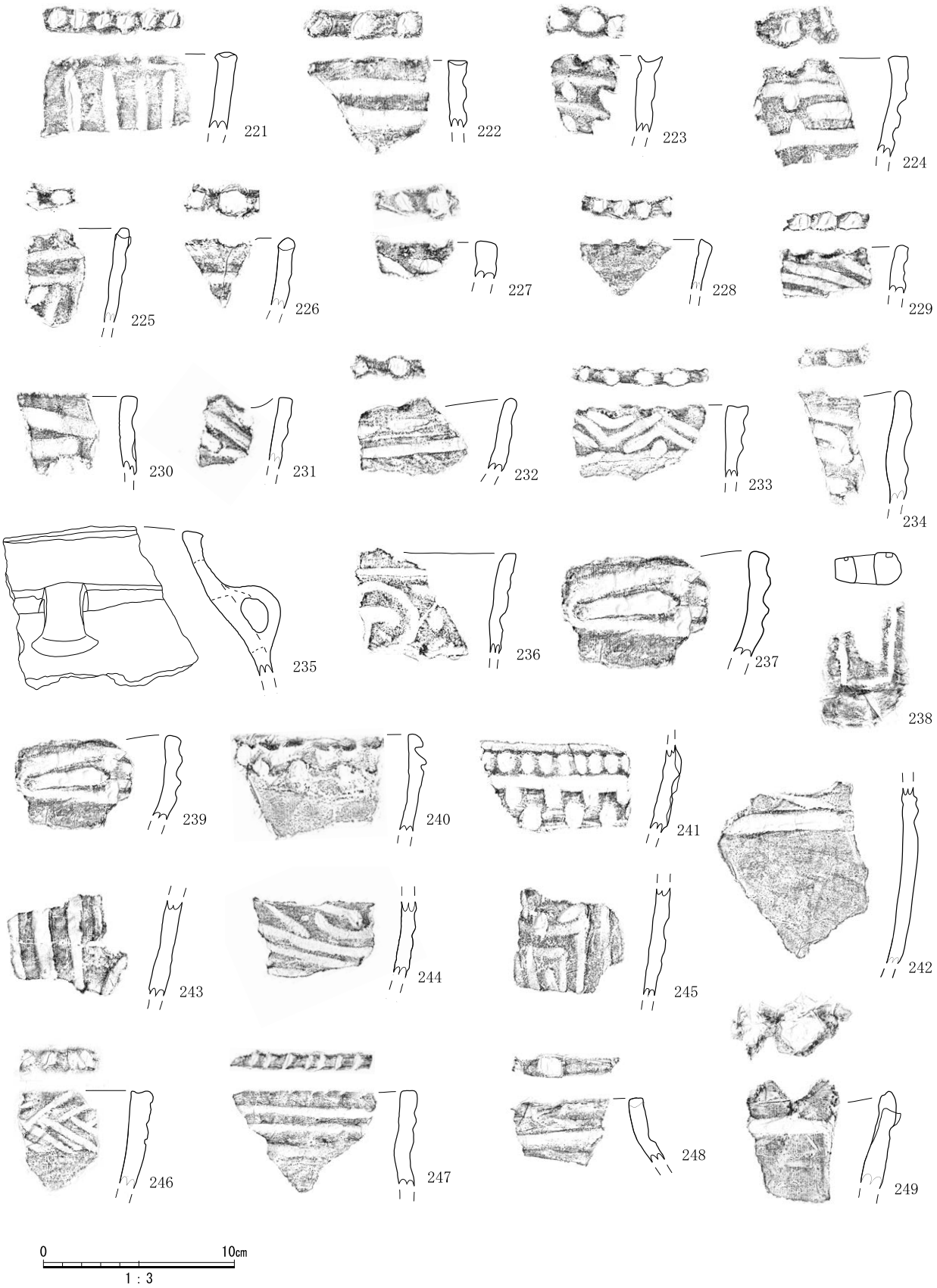
274～296 は磨消縄文土器である。沈線で区画された内部に縄文もしくは疑似縄文を施す一群である。274・275 は御手洗Ａ式土器である。274 はⅤ Tr 出土だが，層位不明。275 は出土地点不明である。276 ～ 281 は鐘崎式土器である。Ⅴ Tr 出土の 277・281 はいずれも層位不明。Ⅵ Tr からは４点で，279 は混貝土層，278・



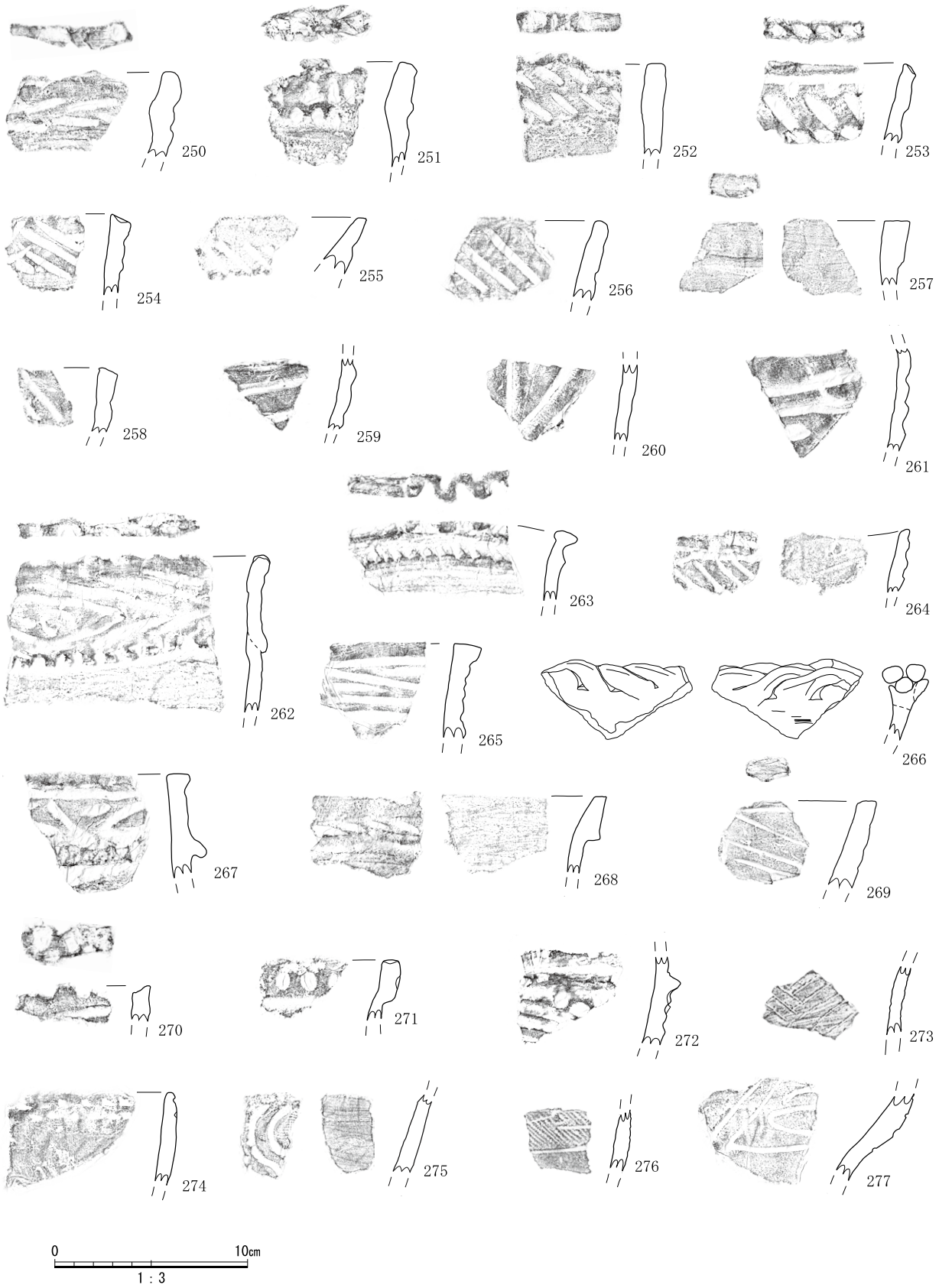
第 13 図　轟貝塚第５次調査出土土器９



第 14 図　轟貝塚第５次調査出土土器 10



第 15 図　轟貝塚第５次調査出土土器 11



第 16 図　轟貝塚第５次調査出土土器 12

280 は東２pit から出土。276 は出土地点不明である。282 ～ 288 は北久根山式土器で，Ⅰ Tr からは 283 が出土，Ⅳ Tr は３点で，285 は東２pit 出土。284・288 は層位不明。282・286・287 は出土地点不明。289・290 は御手洗Ｃ式土器である。Ⅳ Tr の混土貝層から 289 が出土。290 は出土地点不明。291・292 は西平式土器である。Ⅲ Tr からは１点，291 は層位不明である。また，292 は出土地点不明である。293～296 は太郎迫式土器で，Ⅳ Tr からは３点出土。294 は混土貝層，293･295 は東２pit から出土した。296 は出土地点不明である。297 は黒色磨研土器で，御領式土器である。出土地点不明。

298～303 は小林コレクションの一部と考えられる。小林久雄の資料として坂本経堯による報告（坂本 1983「轟貝塚」）に実測図が確認できる。これらは出土位置や層位については不明である。298 は塞ノ神式土器である。貝殻の腹縁によって外面に押引文を施している。299・300・302 は轟Ｂ式土器である。299 は口縁部で，微隆起線文と刺突文から構成されている。300 は微隆起線文を横方向に４本，302 は同様に２本施している。303 は並木式土器である。凹線を曲線的に施している。301 は御手洗Ｃ式土器である。口縁部に押引文を施し，その下に沈線文を施している。

304～323 は底部である。型式が不明なものもあり，ここでまとめて報告する。304･305 は塞ノ神式土器である。いずれもⅡ Tr 出土で，304 は第３層，305 は第２層から出土した。306 ～ 309 は轟式土器で，306・307 は轟Ａ式である。Ⅳ Tr からは 306 が第２層より出土。Ⅴ Tr 出土の 307 は層位不明。Ⅱ Tr 第２層から 308 が出土。309 は出土地点不明。310～317 は阿高式土器である。底部に鯨底が残るものが多い。318～323 は型式不明の底部である。Ⅰ Tr から４点で，322 は焼土層出土。319・320・323 は層位不明。Ⅵ Tr から出土した 318・322 は層位不明である。

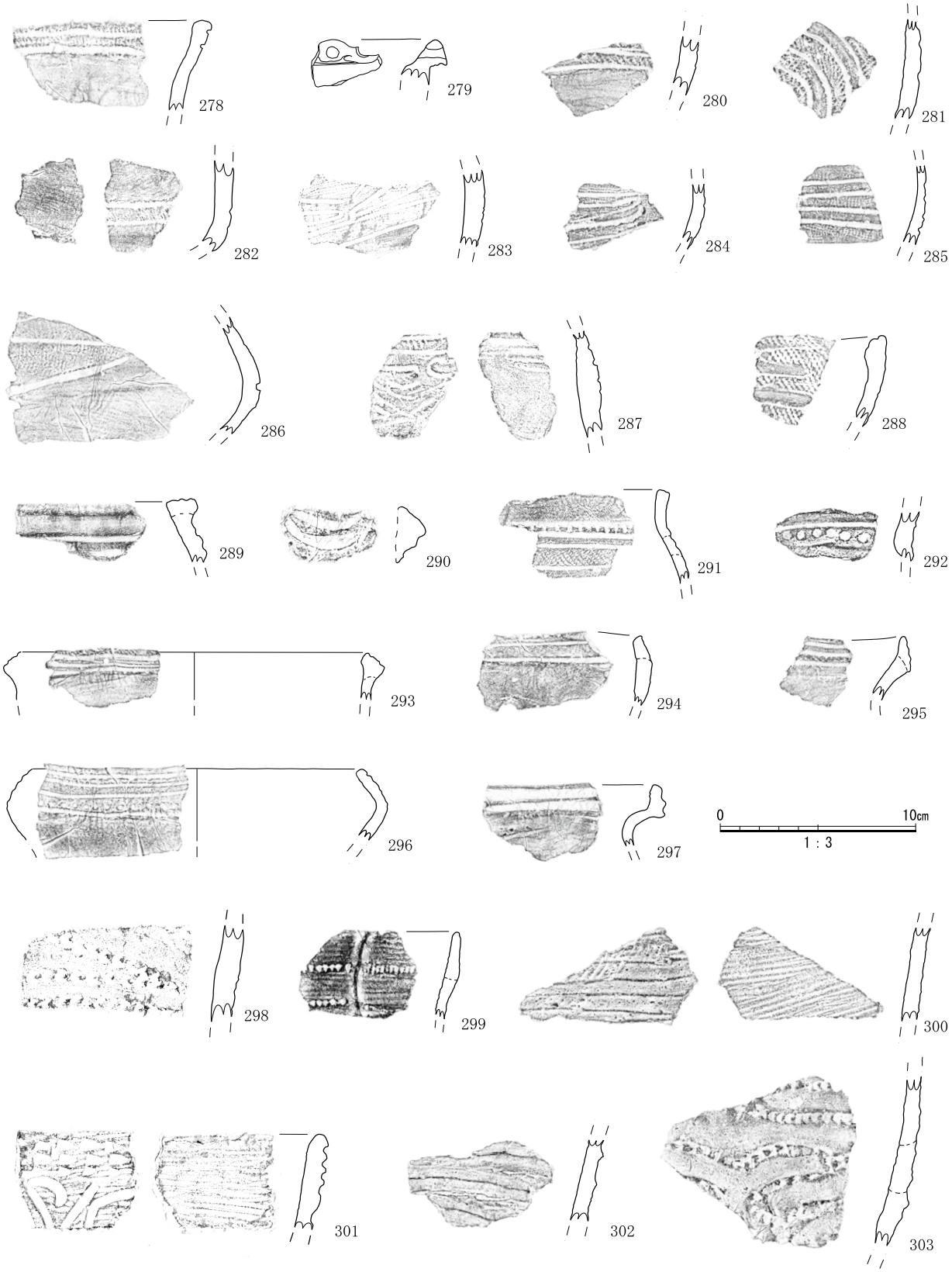
④ 出土石器（写真７）

石器は 15 点を報告する。これらは「轟式土器の編年」において報告されており，現在も確認できるものである（第４表）。

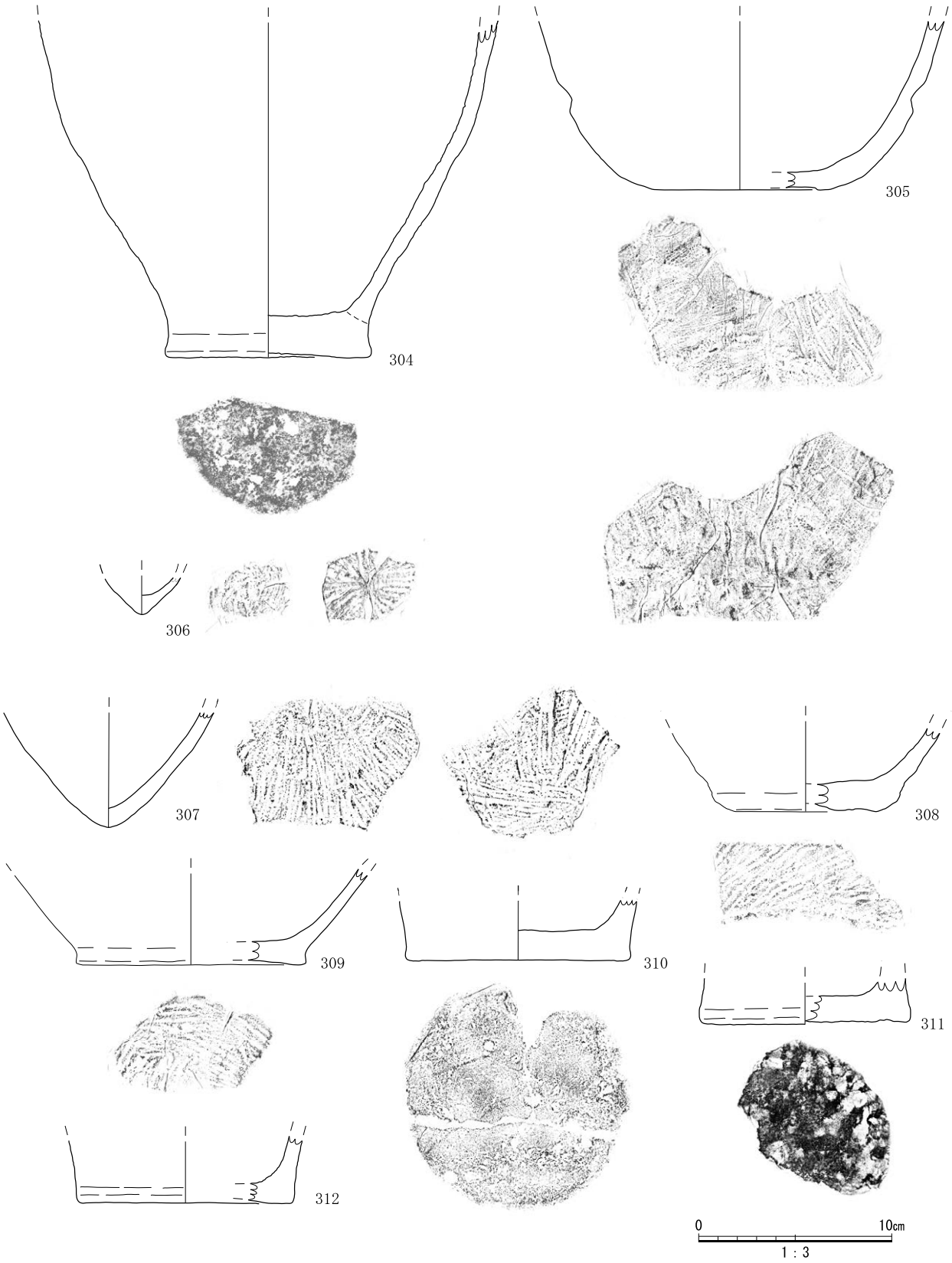
１～３は安山岩製の石鏃である。いずれも両面に調整を施している。いずれもⅥ Tr の第４層から出土した。４は安山岩製の石錐である。刃先は両面から細かく調整されている。Ⅴ Tr の攪乱層から出土。５～８は石匙である。そのうち６は未製品である。５～７は安山岩製であり，８はチャート製である。５はⅥ Tr 第４層から出土。６は未製品でⅡ Tr の第３層から出土した。７はⅤ Tr から出土したが層位不明。８はⅠ Tr 出土だが層位は不明。９～ 13 は安山岩製のスクレイパーである。これらは両側縁と下縁に調整を施している。９はⅠ Tr の焼土層から出土。10 はⅥ Tr から出土したが層位不明。11 は小型で縁辺に調整が見られる。12・13 は大型で両面から細かな調整をつけた石器である。11 はⅠ Tr 焼土層から出土。12・13 はⅡ Tr から出土したが，いずれも層位不明。14・15 は安山岩製の磨製石斧である。14 は両刃であり丁寧に磨いている。Ⅵ Tr 第３層出土。15 は扁平な片刃であり，全面が研磨されている。Ⅱ Tr から出土したが，層位は不明。石器については黒曜石がほとんど見つからず，安山岩製のものがほとんどを占める。

⑤ 出土土器と層位（第 20 図，第５表）

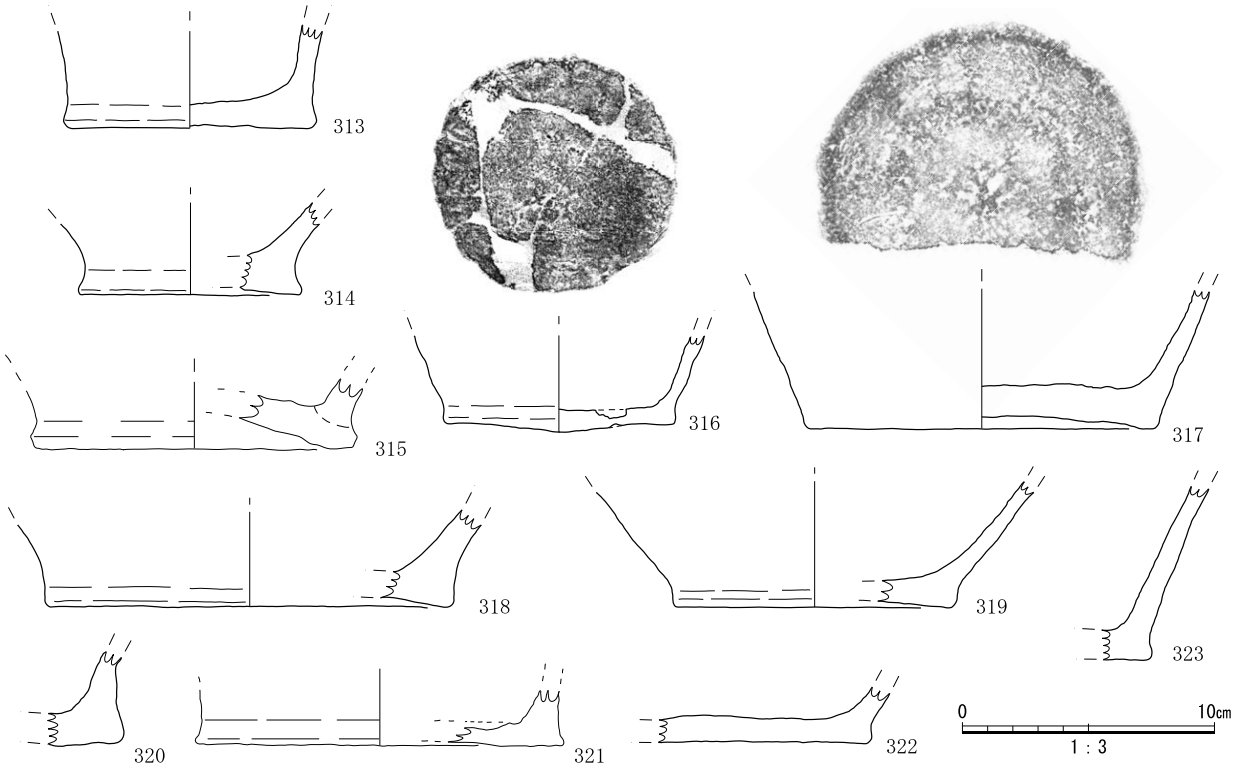
第５次調査において，Ⅰ Tr はプライマリーな堆積をしていたとされている。そのため，Ⅰ Tr を軸として出土遺物と層位の関係を検討する。また「轟式土器の編年」に示されているように，比較的プライマリーな堆積を残しているとされるⅡ Tr，Ⅴ Tr，Ⅵ Tr の出土遺物も加味する。各 Tr の層位別に各型式土器が何点出土しているかを第５表に示した。これに基づき主体土器や各層の最古型式土器の確認から第 20 図を作成した。これに第５次調査で比較的プライマリーな堆積をしている各トレンチと宇土市の示した基本層序（宇土市教育委員会 2017）との対応を示している。



第 17 図　轟貝塚第５次調査出土土器 13（No.278 ～No.297）及び小林コレクション（No.298 ～No.303）



第 18 図　轟貝塚第５次調査出土土器 14



第 19 図　轟貝塚第５次調査出土土器 15

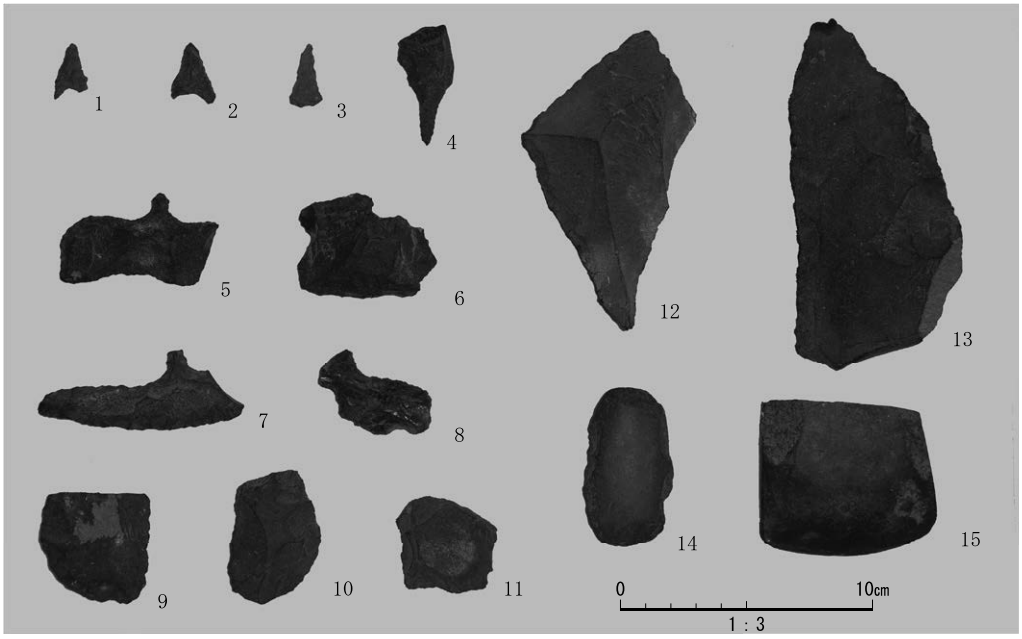


写真７　轟貝塚第５次調査出土石器

第４表　「轟式土器の編年」と本報告の遺物番号対照表

（「類」・「番」は「轟式土器の編年」による図面の番号，「図番」は本報告における図面番号）

3層		4層		5層上		5層下	
番	図番	番	図番	番	図番	番	図番
1	-	1	196	1	110	1	107
2	-	2	128	2	-	2	178
3	135	3	172	3	176	3	33
4	137	4	-	4	-	4	34
5	147	5	-	5	144	5	35
6	177	6	141	6	142	6	36
7	-	7	175	7	181	7	1
8	148	8	115	8	182		
9	-	9	113	9	-		
10	97	10	94	10	37		
11	96	11	109				
12	112	12	167				
13	105	13	192				
14	130						

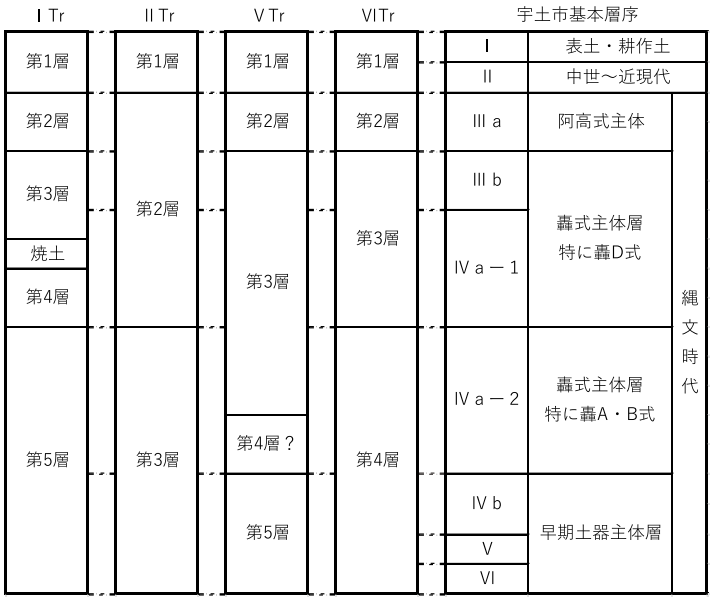
A			B			C			D		
類	番	図番	類	番	図番	類	番	図番	類	番	図番
1	1	41	1	1	77	1	1	29	1	1	92
	2	51		2	78		2	30		2	127
	3	58		3	89		3	28		3	95
	4	-		4	69		4	144		4	100
	5	-		5	90	2	1	179		5	102
	6	40		6	72		2	180		6	93
	7	53		7	78		3	174	2	1	185
	8	-		8	88		4	49		2	171
	9	55		9	71		5	60		3	155
	10	-	2	1	61		6	14		4	274
	11	45		2	68	3	1	8		5	194
	12	47		3	66		2	11		6	98
	13	42		4	65		3	-	3	1	186
	14	31		5	67		4	-		2	187
	15	43		6	62		5	23		3	189
	16	32		7	63		6	7		4	188
	17	52	3	1	-		7	9		5	190
	18	307		2	80		8	12		6	154
	19	306		3	-					7	-
	20	308		4	79					8	105
	21	305		5	20・21						
				6	19						
				7	18						
				8	16						
				9	22						

石器		
番		図番
1		6
2		8
3		5
4		7
5		11
6		10
7		9
8		13
9		12
10		4
11		-
12		15
13		14
14	左	1
14	中	2
14	右	3

第５表　各層位からの出土土器点数（型式別）

型式＼トレンチ	Ⅰ Tr					Ⅱ Tr		Ⅴ Tr				Ⅵ Tr		
層位	5	4	焼土	3	2	3	2	5	4	3	2	4	3	2
黒色磨研														
磨消縄文		△												
出水式					△								△	○
南福寺式					○		○							
阿高式			△		◎		○							○
並木式							△			△			△	△
尾田式		△		△			○							
轟C式	○	△		△									△	
轟D式	◎	◎	○	◎	○	○	◎			△	△			
曽畑式												○		
轟B式						○	△			○				
轟A式	○					△		△		○			△	△
塞ノ神式						○	△					○		
苦浜式						△	△							
押型文	△													

凡例
出土量
◎：5点以上　○：2点以上　△：1点



第20図　轟貝塚第５次調査トレンチの層位と第12・13次調査で設定された基本層序との関係

Ⅰ Tr 第５層は最深部から押型文土器が出土し，轟Ａ式から轟Ｃ式も出土していることから，縄文早期から縄文前期の層と認識することができる。「轟式土器の編年」において，第５層は上層と下層に分けられるとされているが，遺物に上下を区別する注記がないため，同論文第２図に図示されている資料のみでしか判断できない。その図より判断するに，「５層下」とされている層は押型文土器，塞ノ神式土器が確認できる縄文早期の層，「５層上」とされている層は主に轟Ｄ式土器，轟Ｃ式土器が確認できる縄文前期の層として判断できる。これと同様な時期の層は，Ⅱ Tr 第３層，Ⅴ Tr 第５層，Ⅵ Tr 第４層である。Ⅱ Tr 第３層からは，苦浜式土器から轟Ｂ式土器と轟Ｄ式土器が出土している。Ⅴ Tr 第５層からは，轟Ａ式土器が出土している。Ⅵ Tr 第４層では，塞ノ神式土器，曽畑式土器が出土している。これらから，縄文早期から前期の層として認識できる。

Ⅰ Tr 第４層と第３層は轟Ｄ式土器を主体とする層である。轟Ｄ式土器はⅠ Tr とⅡ Tr での出土が多く，Ⅴ Tr とⅥ Tr では少ない。第４層において磨消縄文土器が１点出土し，第４層と第３層の間にある焼土において阿高式土器が１点出土しているが，轟Ｄ式土器の主体性は変わらないため，流れ込みの可能性も考えられる。そのため，この層を縄文前期から縄文前期後半を中心とする層として判断する。

これと同様の時期の層はⅡ Tr 第２層，Ⅴ Tr 第３層と第４層，Ⅵ Tr の第３層と第２層である。Ⅱ Tr 第２層は轟Ｄ式を主体として，苦浜式，塞ノ神式，轟Ｂ式の各１点と尾田式から南福寺式が各２～３点出土している。これらから轟Ｄ式を中心とする，縄文前期後半から縄文後期の層と認識できる。Ⅴ Tr 第３層と第２層は，轟Ａ式と轟Ｂ式が出土しているが，轟Ｄ式や並木式も出土しているため，縄文前期から縄文中期の層として認識できる。Ⅵ Tr も轟Ｂ式から阿高式まで出土しているため縄文前期から縄文後期の層として認識することができる。

Ⅰ Tr 第２層は阿高式を主体とする層である。そのほかに南福寺式，出水式が出土していることから，縄文後期の層と認識できる。

以上，第５次調査出土土器の遺物と層位の関係を分析した結果，轟貝塚で生活が営まれた主要な時期を縄文早期から前期にかけての時期，縄文前期後半を中心とする時期，縄文後期以降の時期と大まかに３つに区分できる。

（3）ま と め

第５次調査においては，押型文から黒色磨研土器まで幅広い時期の土器が出土している。ただし，轟Ａ式から轟Ｄ式と阿高式から南福寺式の出土量が比較的多く，第６次調査や近年の宇土市による調査と同様に縄文前期と後期に活動が活発であったことが窺える。第５次調査の各トレンチを比較するとⅡ Tr・Ⅴ Tr・Ⅵ Tr において縄文早期の土器の出土が比較的多い。一方でⅠ Tr は轟Ｄ式土器以降の土器型式において出土量が増加している。ここから時期を経ることで轟貝塚が立地する台地の中でも標高の高い方へと遺跡内の生活場所の移動があった可能性が高い。第５次調査では，遺構が全くと言っていいほど確認されていないため，直接的な生活痕跡は検討できないが，遺物の出土量から以上のようなことは他次調査の結果と重なることもあって，蓋然性が高まった。

宇土半島基部では縄文前期における大規模な貝塚がいくつも知られているが，実態の解明は進んでいない。当時の周囲の環境や周囲の遺跡との関係などが特にそうである。過去資料も含めた総体的な研究が進むことで，明らかになることを期待したい。

最後に，本稿は熊本大学の小畑弘己先生，木下尚子先生，杉井健先生にご指導を賜り，同志社大学の水ノ江和同先生に土器型式についてご教示いただき作成したことを付記したい。

５　轟貝塚第６次調査出土資料(長崎大学資料,旧慶應義塾大学資料)について

（１）第６次調査出土資料の概要

第６次調査は，熊本日日新聞社学術調査団が宇土周辺地域の古代文化に関する学術調査の一環として，慶應義塾大学（以下，慶大）江坂輝彌講師（当時）を主査とし，昭和 41（1966）年３月 20 日から同 29 日の期間で実施されたものである(詳細については,宇土市教育委員会 2008 や本書第２章第４節参照)。調査終了後，人骨以外の出土遺物は慶大で保管され，人骨は調査担当者の一人であった新潟大学小片丘彦助手の所属先である同大医学部で保管されていた。

人骨以外の出土遺物は，平成 13（2001）年，新宇土市史編纂事業や発掘調査報告書作成のために宇土市へ移され，発掘調査報告書（宇土市教育委員会 2008）刊行後の平成 23（2011）年，慶大から正式に宇土市へ寄贈された。一方，人骨については，第９～13 次発掘調査報告書（本書）を作成するにあたり，過去の調査で出土した資料の所在を把握するため，平成 31（2019）年３月に同大へ人骨資料の所在等について照会した結果，昭和 56～57 年頃，資料が長崎大学医学部へ移管されたことが判明した。このことから，令和元（2019）年８月，当該人骨が保管されている同大において，資料の保管状況等の確認を行うとともに，資料の詳細観察や人骨の状態記録，写真撮影等を行った。

（２）長崎大学資料について（第６表，写真８～23）

第６次調査人骨の保管状態は良好で，樹脂を用いて可能な限り接合されている。１号・２号・４号・５号・６号・８号の頭蓋骨（４号のみ中世人骨）は専用のガラスケース内に保管されており，それ以外の人骨については木箱に収納されている。木箱に納められている人骨の遺存状態も比較的良く，第６次調査日誌に全て記載があり，号数の混乱もみられなかった。また，１号～８号以外の表土や撹乱層から出土した人骨も少量保管されており，これらは調査日誌にも記載されていることを確認した。第６次調査における１号～８号人骨の埋葬姿勢や出土層位等は第６表のとおりである。

なお，人骨の性別・年齢及び備考に記載した所見は，1966 年発掘調査時の調査日誌等によるが，当該所見は調査者のひとりであった新潟大学医学部小片岳彦助手（当時）により記録されたものである。宇土市教育委員会 2008 における人骨関連報告についても同氏の所見に基づいている。

１号人骨（女性／熟年）は，両手の手根骨から指骨の一部，両足の中足骨から指骨の一部，肩甲骨や骨盤

第６表　長崎大学医学部所蔵轟貝塚出土人骨一覧

番号	推定時期	性別	年代	埋葬姿勢	頭部方向	出土地点	出土層位	遺存状態	備考
１号	縄文前期	女性	熟年	仰臥屈葬	南東	A21・A22	褐色土層	良好	左右前腕に貝輪装着，腹腔に食物残滓
２号	縄文前期か	女性	熟年	仰臥屈葬	西	A21	混貝土層－褐色土層間	良好	貝製首飾共伴
３号	縄文前期	不明	老年	仰臥屈葬？	北	B3	褐色土層	不良	
４号	中世	女性	熟年	伏臥屈葬	北西	E3	黒褐色混土貝層	良好	
５号	縄文後期	不明	若年	仰臥屈葬	北西	E3	黒褐色混土貝層	良好	
６号	縄文後期	女性	老年	不明	不明	E3	黒褐色混土貝層	良好	
７号	縄文前期か	不明	熟年～老年	横臥屈葬	北	B7	黒褐色土層	不良	
８号	縄文後期	女性	老年	横臥屈葬	北西	E3	黒褐色混土貝層	良好	腰椎に変形性脊椎痕あり

写真８　頭蓋骨（轟貝塚6次1号2号・4号～6号・8号）

写真９　轟貝塚６次１号～８号人骨（木箱収蔵分）

写真 10　轟貝塚６次１号人骨頭骨

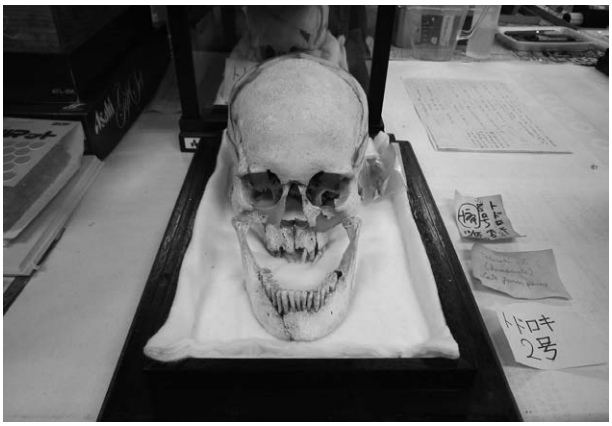


写真 11　轟貝塚６次２号人骨頭骨

写真 12　轟貝塚６次４号人骨頭骨

写真 13　轟貝塚６次５号人骨頭骨

写真 14　轟貝塚６次６号人骨頭骨

写真 15　轟貝塚６次８号人骨頭骨

写真 16　轟貝塚６次１号人骨（頭骨以外）

写真 17　轟貝塚６次２号人骨（頭骨以外）

写真 18　轟貝塚６次３号人骨

写真 19　轟貝塚６次４号人骨（頭骨以外）

写真 20　轟貝塚６次５号人骨（頭骨以外）

写真 21　轟貝塚６次６号人骨（頭骨以外）

写真 22　轟貝塚６次７号人骨

写真 23　轟貝塚６次８号人骨（頭骨以外）

の一部を欠損しているものの，それ以外の骨はおおむね残存している。２号人骨（女性 / 熟年）は，左肩甲骨や骨盤の一部等を欠損しているが，１号人骨と同様にその他の骨はおおむね残存している。３号人骨（性別不明 / 老年）は，残存状況は不良で，頭骨も上顎骨や下顎骨，頬骨等を欠く。４号人骨（女性 / 熟年）は，尾骨や肩甲骨の一部を欠くものの，両手足の指骨も多数残る等，その他の骨はおおむね残存している。５号人骨（性別不明 / 若年）は，頭骨は比較的良好に遺存しているが，全体的に各部位の一部もしくは全部を欠く。６号人骨（女性 / 老年）も頭骨は比較的良好に遺存し，肋骨や椎骨も比較的多く残るが，上腕骨や尺骨，橈骨，骨盤の大半を欠く。７号人骨（性別不明 / 熟年から老年）は，頭骨が下顎骨や側頭骨の一部のみで大半を欠損しており，全体的に遺存状態は不良である。８号人骨（女性 / 老年）も全体的に失われている部分が多いが，上顎骨を欠くものの頭骨が比較的良好に残存しており，四肢骨の多くが残る。

なお，第６次調査では１号人骨に伴う食物残滓が出土しており，その詳細については，小片 1972 で報告されている。縄文時代人骨に伴うものとしては国内で初めての事例として貴重であるが，長崎大学に移された時点で資料に含まれていなかったという。

（3）旧慶應義塾大学資料について

江坂輝彌を中心とした第６次調査では，貝製腕輪を装着した人骨が出土したほか，多量の縄文土器や石器，骨角器等が出土した。調査以降は江坂の所属先である慶大において曽畑貝塚出土資料（1959 年に江坂を中心とした調査団が調査を実施）とともに慶大において保管されていたが，平成 13（2001）年に両資料は宇土市へ移された。その後，整理作業を実施し，平成 20（2008）年に轟貝塚の発掘調査報告書を刊行した（宇土市教育委員会 2008）。さらに，曽畑貝塚発掘調査報告書（宇土市教育委員会 2011）刊行後，両貝塚の資料は，平成 23（2011）年に慶大から正式に宇土市へ寄贈され，現在，宇土市教育員会において保管している。

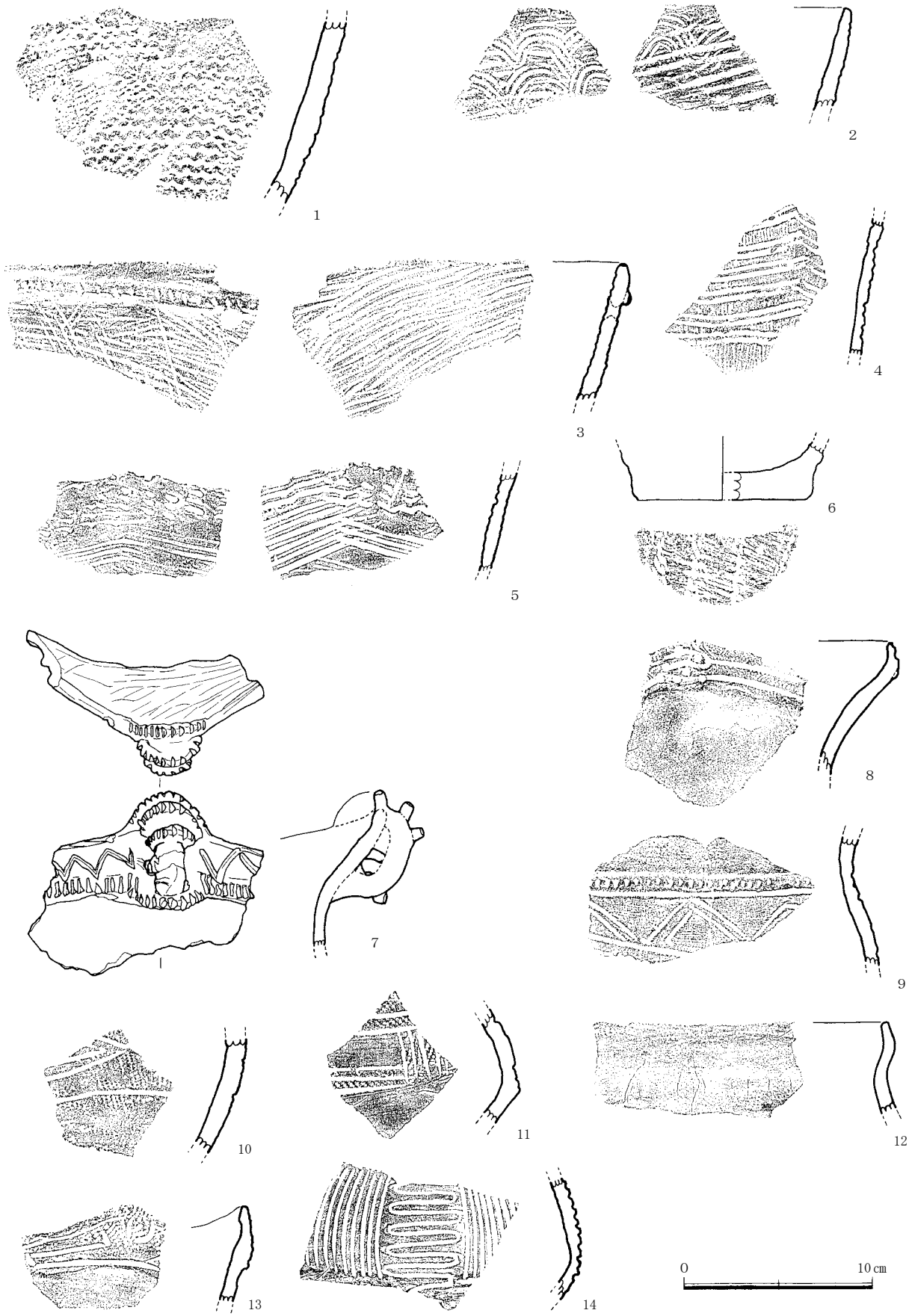
2001 年の移管時，ごく一部の資料については慶大で引き続き保管されることとなったが，当該資料についても平成 27（2015）年に宇土市へ寄贈された。このような経緯から，宇土市教育委員会 2008 には未掲載であるため，以下のとおり報告する。なお，縄文土器の分類は，本書第４章の分類基準を適用する。

①縄文時代の遺物（第 21～27 図，第 7～9 表，写真 24～27）

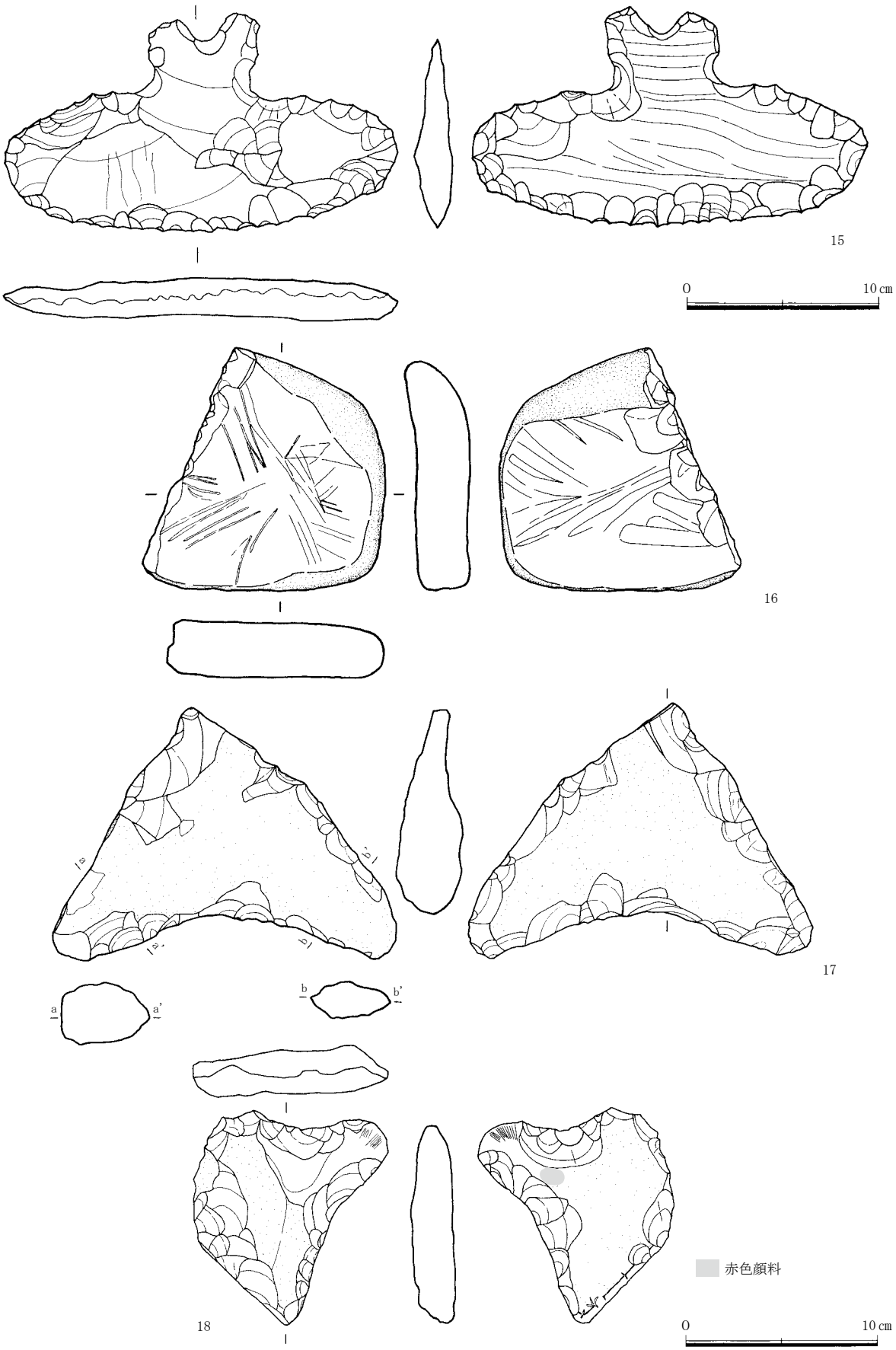
１～ 14 は縄文土器である。１はⅠａ類の深鉢で外面に山形押型文を施す。２～６は貝殻条痕を施すⅢ類の深鉢で，２はⅢａ類，３はⅢｂ２類，４はⅢｄ１類，５はⅢｆ類，６は底部片である。２は外面に貝殻条痕で曲線文を施す。３は口縁下部に穿孔がある。７はⅤ類とみられる口縁部に橋状把手を有する深鉢。８～ 10 は磨消縄文を施すⅥ類の鉢及び深鉢。11 ～ 13 はⅦ類の鉢及び深鉢で，11 の外面に赤色顔料が付着。14 は後期とみられる深鉢で，外面に縦方向の沈線と曲線を密に施す。

15～20 は石器及び石製品で，15 は石匙，16 は砥石，17 ～ 19 は双角状礫器，20 は十字形石器である。15 のつまみ部の先端は二又状となっている。17・18・20 は江坂 1968 で報告がなされており，江坂は双角状礫器を「打製靴型石器」と呼称し，十字形石器とともに阿高式期における土掘り具としての使用を想定している。なお，18 については形状から十字形石器の可能性があり，一部に赤色顔料が付着している。

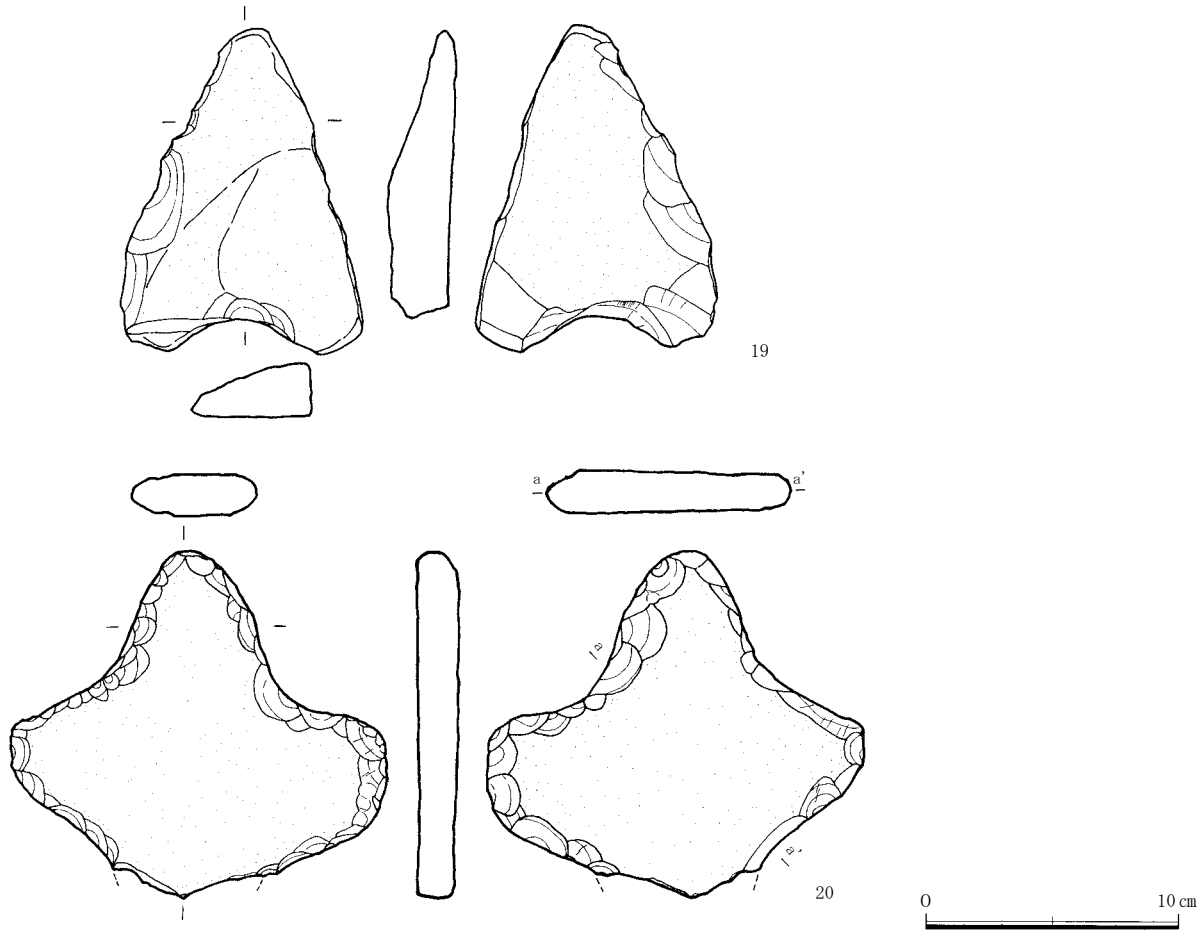
21～65 は６次２号人骨に伴う貝玉で，頸骨から胸椎付近にかけて集中的に出土していることから貝製首飾とみられる。21～32 はイモガイ製，33～65 はアマオブネ製である。これらは，螺塔部を利用しており，紐を通すために殻頂部を打ち欠いて直径５㎜前後の穿孔を施している。当時，人骨調査を担当した小片丘彦の調査日誌によれば，頸骨から胸椎付近の貝玉の出土状況から「前側にイモガイを多くし，後側にアマオブネを用いたと考えることはできないだろうか」と記録しており，首飾前側にイモガイ，それ以外の部分にアマオブネの使用を示唆している。また，35～47 は首の中心から右側，48～53 は右耳付近から出土したことが記録



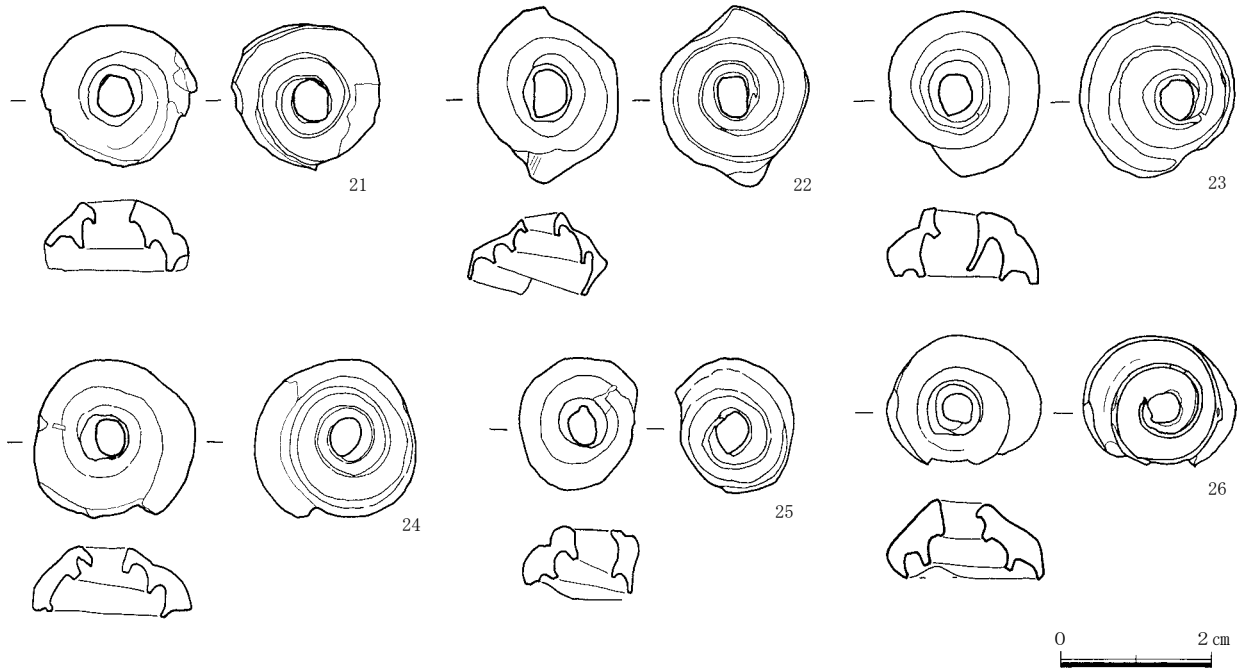
第 21 図　轟貝塚第６次調査出土縄文土器（1／3）



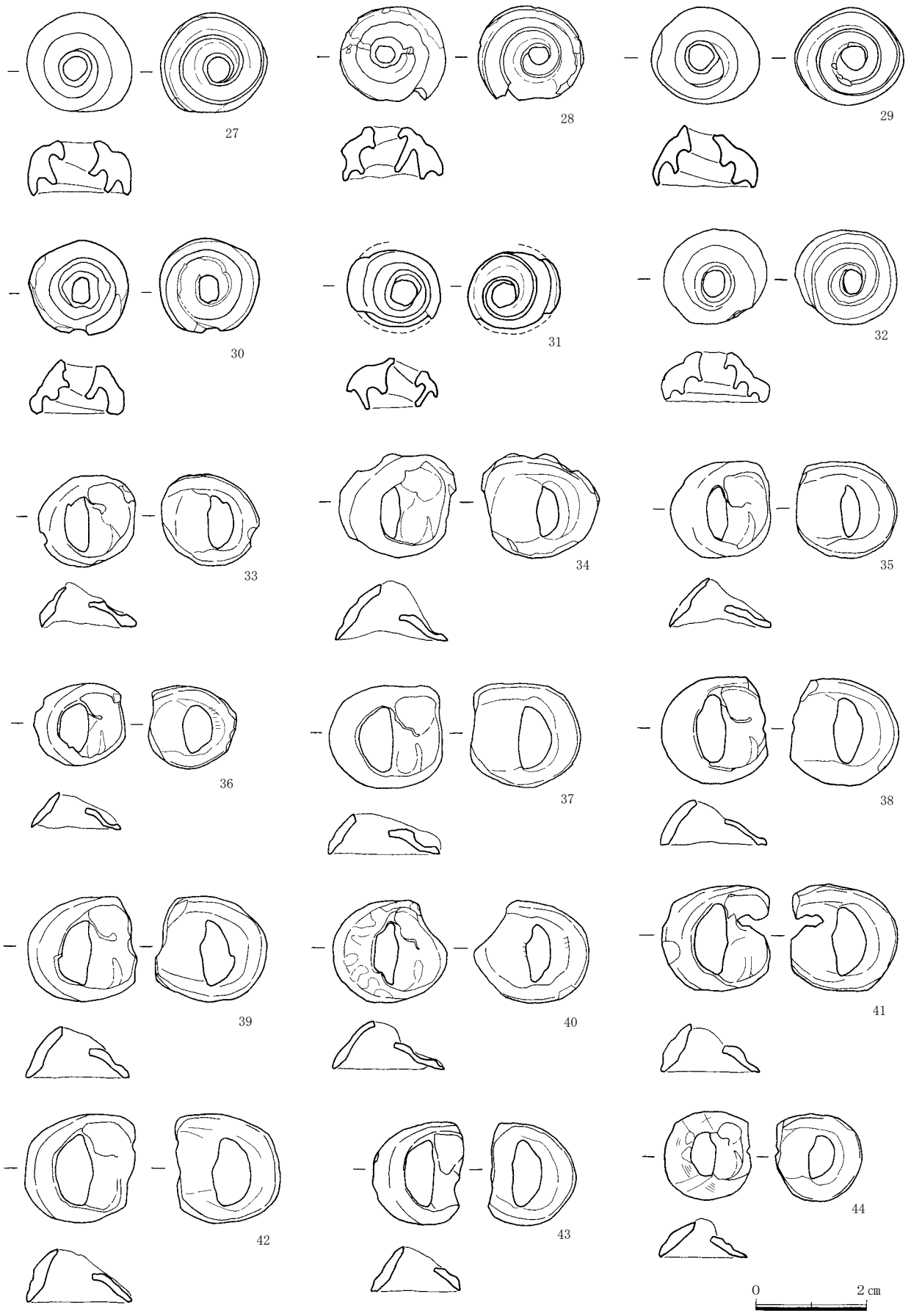
第 22 図　轟貝塚第６次調査出土石器１（1／3）



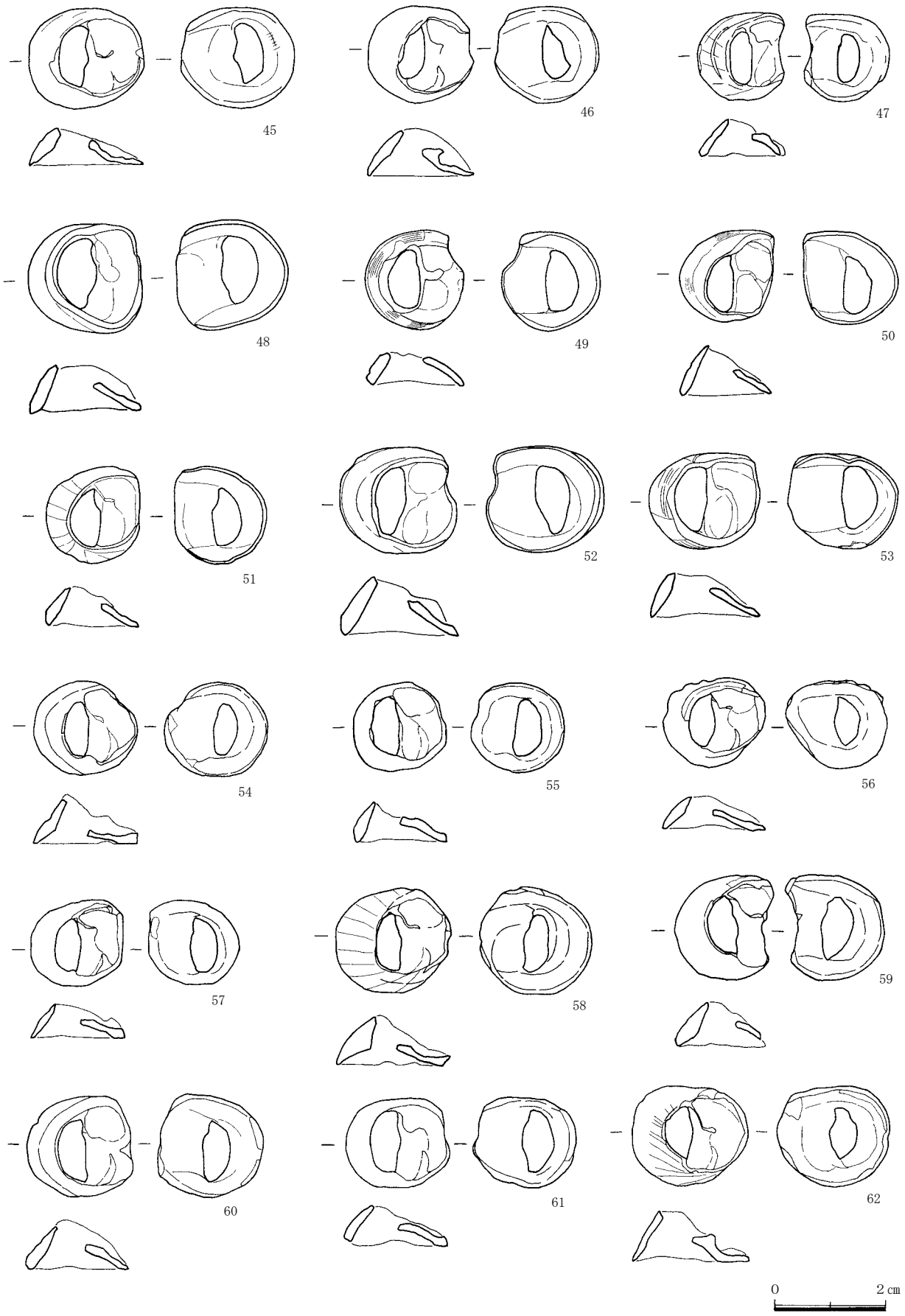
第 23 図　轟貝塚第６次調査出土石器２（1／3）



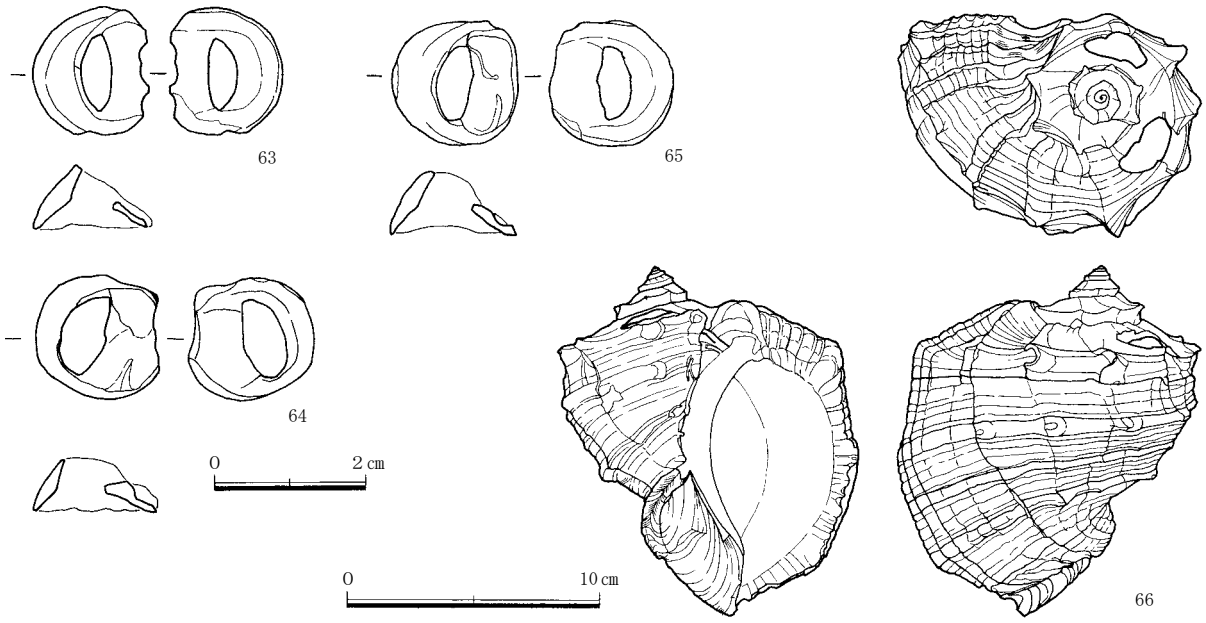
第 24 図　轟貝塚第６次調査出土貝製品１（1／1）



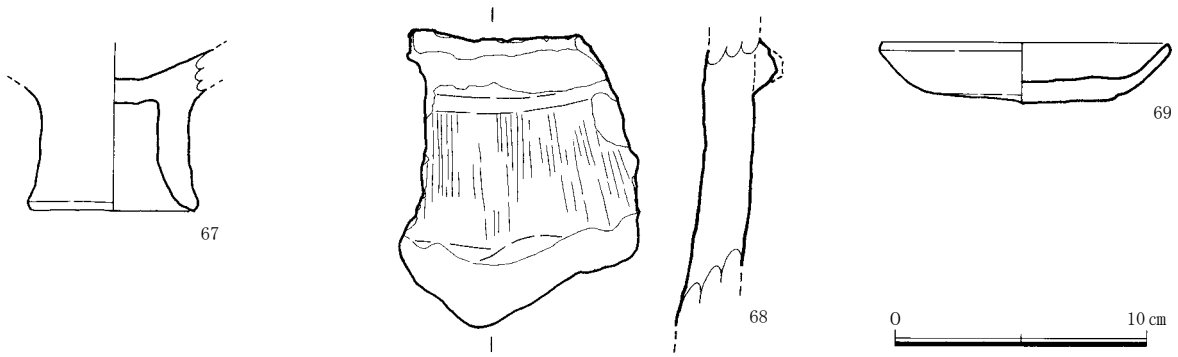
第 25 図　轟貝塚第６次調査出土貝製品２（1／1）



第 26 図　轟貝塚第６次調査出土貝製品３（1／1）



第 27 図　轟貝塚第６次調査出土貝製品４（１／１，１／３）



第 28 図　轟貝塚第６次調査弥生時代以降の出土遺物（１／３）

されている。なお，２号人骨の調査状況写真については，宇土市教育委員会 2008 の図版６に掲載しており，右鎖骨付近に本稿に掲載したイモガイ製貝玉の一部を確認できる。66 は用途不明の貝製品で，２箇所に穿孔がある。

②縄文時代以降の遺物（第 28 図，第 10 表，写真 28）

67 は弥生土器の台付甕の脚台部，68 は円筒埴輪で，肥厚の状態から底部に近い部分とみられる。69 は土師器質土器の皿で，底部は回転ヘラ切りの痕跡が残る。

第７表　轟貝塚第６次調査出土遺物観察表（縄文土器）　※宇土市教育委員会2008未掲載分

挿図番号	実測番号	出土地点	層位	基本層序	器種	残存部位	器面調整（内面／外面）		胎土	焼成	色調 内面/外面	口径（cm）	残存高（cm）	分類	備考
							内面	外面							
1	1478	不明	不明		深鉢	胴部	ナデ	山形押型文	角閃石多量含む	良	にぶい黄橙/にぶい橙	—	9.8	Ⅰa	
2	1474	BT10Gr	上部混貝	Ⅱ	深鉢	口縁部	貝殻条痕	貝殻条痕	雲母・角閃石少量含む	良	褐灰/灰褐	不明	5.4	Ⅲa	貝殻条痕は曲線文含む
3	1483	CT15Gr	撹乱	Ⅰ	深鉢	口縁部	貝殻条痕	貝殻条痕，隆帯，刻み	砂粒微量含む	良	黒褐/黒褐	不明	7.4	Ⅲb2	口縁下部に穿孔あり
4	1470	AT24Gr	混貝層下	Ⅱ？	深鉢	胴部	押引文，ナデ	貝殻条痕，沈線	雲母・角閃石多量含む	良	にぶい黄橙/褐灰	—	7.2	Ⅲd1	
5	1472	CT1Gr	貝層下	Ⅳa？	深鉢	胴部	沈線	沈線，刺突	石英・雲母・角閃石微量含む	良	にぶい橙/にぶい黄橙	—	5.5	Ⅲf	
6	1419	AT23Gr	褐色土層の-10～20cm	Ⅳ？	深鉢	底部	貝殻条痕	貝殻条痕	石英・角閃石少量，径２～３mmの小礫多量含む	良	褐灰/にぶい橙	—	3.1	Ⅲ	
7	1475	AT3Gr	混貝（撹乱）	Ⅱ	深鉢	口縁部	ミガキ	ナデ，沈線，刺突	石英・金雲母微量，砂粒少量含む	良	橙/橙	不明	8.5	Ⅴ？	
8	1487	CT15Gr	撹乱	Ⅰ	鉢	口縁部	ナデ	磨消縄文，沈線，刺突，ナデ	石英・角閃石多量含む	良	褐灰/黒褐	不明	7.1	Ⅵ	
9	1471	BT15Gr	上部混貝層	Ⅱ	深鉢	胴部	ナデ	磨消縄文，沈線，刺突	角閃石・石英多量含む	良	にぶい黄橙/にぶい黄橙	—	6.9	Ⅵ	
10	1485	CT15Gr	撹乱	Ⅰ	鉢	胴部	ナデ	磨消縄文，沈線	角閃石・雲母やや多く含む	良	灰黄褐/にぶい黄橙	—	6.1	Ⅵ	
11	1476	AT3Gr	混貝（撹乱）	Ⅱ	鉢	胴部	黒色磨研	黒色磨研，磨消縄文	金雲母微量，砂粒少量含む	良	黒褐/黒褐	—	6.0	Ⅶ	赤色顔料付着
12	1482	CT15Gr	撹乱	Ⅰ	深鉢	口縁部	黒色磨研	磨消縄文，ミガキ	角閃石・雲母やや多く含む	良	黒褐/にぶい赤褐	不明	4.9	Ⅶ	
13	1486	CT15Gr	撹乱	Ⅰ	鉢	口縁部	黒色磨研	磨消縄文，沈線，ミガキ	雲母・角閃石・石英多量含む	良	灰黄褐/にぶい褐	不明	5.1	Ⅶ	
14	1473	AT3Gr	混貝（撹乱）	Ⅱ	深鉢	胴部	ミガキ	沈線，刺突	雲母・砂粒少量含む	良	黒褐/にぶい褐	—	6.4		

第８表　轟貝塚第６次調査出土遺物観察表（石器・貝製品）　※宇土市教育委員会2008未掲載分

挿図番号	実測番号	出土地点	層位	基本層序	種別	種類	材質	計測値				備考
								長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	
15	1445	BT22Gr	不明		石器	石匙	安山岩	5.7	10.3	1.1	50	サヌカイトの可能性あり
16	1477	不明	不明		石器	砥石	安山岩	12.7	11.3	3.8	760	研磨痕あり
17	1467	DT	貝層	Ⅲ	石器	双角状礫器	安山岩	13.2	17.9	3.6	59.5	
18	1468	不明	不明		石器	双角状礫器	安山岩	11.1	8.3	2.2	387	赤色顔料付着，十字形石器の可能性あり
19	1479	BT8	撹乱層	Ⅰ	石器	双角状礫器	安山岩	12.9	9.6	2.8	380	
20	1469	不明	不明		石器	十字形石器	安山岩	13.8	15.0	1.8	420	
21	1420	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	イモガイ	1.9	2.0	0.95	1.7	2号人骨の貝製首飾
22	1421	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	イモガイ	2.4	2.0	1.1	1.7	2号人骨の貝製首飾
23	1422	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	イモガイ	2.2	2.0	1.0	2.5	2号人骨の貝製首飾
24	1423	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	イモガイ	2.1	2.1	9.5	2.4	2号人骨の貝製首飾
25	1424	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	イモガイ	1.8	1.6	9.5	1.5	2号人骨の貝製首飾
26	1425	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	イモガイ	1.7	2.0	1.1	2.1	2号人骨の貝製首飾
27	1426	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	イモガイ	1.8	1.9	1.0	2.5	2号人骨の貝製首飾
28	1427	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	イモガイ	1.7	1.9	1.0	1.4	2号人骨の貝製首飾
29	1428	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	イモガイ	1.7	2.0	1.1	2.6	2号人骨の貝製首飾
30	1429	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	イモガイ	1.7	1.8	1.0	0.9	2号人骨の貝製首飾
31	1430	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	イモガイ	1.4	1.7	0.9	0.8	2号人骨の貝製首飾
32	1431	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	イモガイ	1.7	1.9	0.9	1.9	2号人骨の貝製首飾
33	1446	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	アマオブネ	1.6	1.8	0.7	1.0	2号人骨の貝製首飾
34	1447	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	アマオブネ	1.8	2.1	1.0	1.6	2号人骨の貝製首飾
35	1448	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	アマオブネ	1.8	1.8	0.9	1.2	2号人骨の貝製首飾
36	1449	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	アマオブネ	1.5	1.6	0.7	0.7	2号人骨の貝製首飾
37	1450	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	アマオブネ	1.9	2.0	0.8	1.8	2号人骨の貝製首飾
38	1451	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	アマオブネ	1.9	1.9	0.8	1.6	2号人骨の貝製首飾
39	1452	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	アマオブネ	1.9	2.0	0.9	1.5	2号人骨の貝製首飾
40	1453	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	アマオブネ	1.9	2.1	8.5	1.5	2号人骨の貝製首飾
41	1454	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	アマオブネ	1.9	1.9	0.9	1.6	2号人骨の貝製首飾
42	1455	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	アマオブネ	2.0	2.0	1.0	1.7	2号人骨の貝製首飾
43	1456	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	アマオブネ	1.9	1.6	0.8	1.3	2号人骨の貝製首飾
44	1457	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	アマオブネ	1.6	1.6	0.6	1.0	2号人骨の貝製首飾
45	1458	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	アマオブネ	1.8	2.1	0.7	1.2	2号人骨の貝製首飾

第９表　轟貝塚第６次調査出土遺物観察表（貝製品）　※宇土市教育委員会2008未掲載分

挿図番号	実測番号	出土地点	層位	基本層序	種別	種類	材質	計測値 長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	備考
46	1459	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	アマオブネ	1.7	1.8	8.5	1.3	2号人骨の貝製首飾
47	1460	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	アマオブネ	1.6	1.6	0.7	0.8	2号人骨の貝製首飾
48	1461	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	アマオブネ	2.0	2.0	0.9	1.6	2号人骨の貝製首飾
49	1462	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	アマオブネ	1.8	1.8	0.6	1.0	2号人骨の貝製首飾
50	1463	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	アマオブネ	1.8	1.7	0.9	0.9	2号人骨の貝製首飾
51	1464	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	アマオブネ	1.8	1.7	0.7	2.2	2号人骨の貝製首飾
52	1465	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	アマオブネ	1.9	2.1	1.1	2.2	2号人骨の貝製首飾
53	1466	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	アマオブネ	1.8	2.0	0.8	0.9	2号人骨の貝製首飾
54	1432	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	アマオブネ	1.7	1.9	0.8	1.0	2号人骨の貝製首飾
55	1433	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	アマオブネ	1.6	1.7	0.7	0.7	2号人骨の貝製首飾
56	1434	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	アマオブネ	1.6	1.8	0.6	0.7	2号人骨の貝製首飾
57	1435	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	アマオブネ	1.6	1.7	0.6	0.6	2号人骨の貝製首飾
58	1436	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	アマオブネ	1.4	2.1	0.9	1.3	2号人骨の貝製首飾
59	1438	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	アマオブネ	1.9	1.8	0.8	1.3	2号人骨の貝製首飾
60	1439	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	アマオブネ	1.8	1.9	0.8	1.2	2号人骨の貝製首飾
61	1440	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	アマオブネ	1.6	1.9	0.8	1.0	2号人骨の貝製首飾
62	1441	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	アマオブネ	1.8	2.0	0.9	1.2	2号人骨の貝製首飾
63	1442	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	アマオブネ	1.7	1.6	0.9	0.7	2号人骨の貝製首飾
64	1443	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	アマオブネ	1.7	1.7	0.7	0.5	2号人骨の貝製首飾
65	1444	AT21Gr	混貝土層-褐色土層間	Ⅳ?	貝製品	貝玉	アマオブネ	1.7	1.7	0.8	1.0	2号人骨の貝製首飾
66	1437	AT11Gr	混土貝層	Ⅱ	貝製品		アカニシ	13.8	12.5	8.8	415	２か所穿孔あり

第10表　轟貝塚第６次調査出土遺物観察表（弥生時代以降）　※宇土市教育委員会2008未掲載分

挿図番号	実測番号	出土地点	層位	基本層序	種類･器種	残存部位	器面調整 内面	器面調整 外面	胎土	焼成	色調 内面/外面	口径（cm）	残存高（cm）	備考
67	1481	CT6Gr	撹乱層	Ⅰ	弥生土器 台付甕	脚部	ナデ	ナデ	角閃石，石英，砂粒少量含む	良	褐灰/橙	—	6.6	
68	1480	CT2Gr	混土貝層	Ⅱ	円筒埴輪	頸部	ナデ	タテハケ	小礫微量含む	良	にぶい橙/浅黄橙	—	11.9	
69	1484	CT15Gr	撹乱	Ⅰ	土師質土器 皿		回転ナデ	回転ナデ，回転ヘラ切	角閃石，砂粒微量含む	良	にぶい橙/にぶい黄橙	11.6（復元）	2.5	

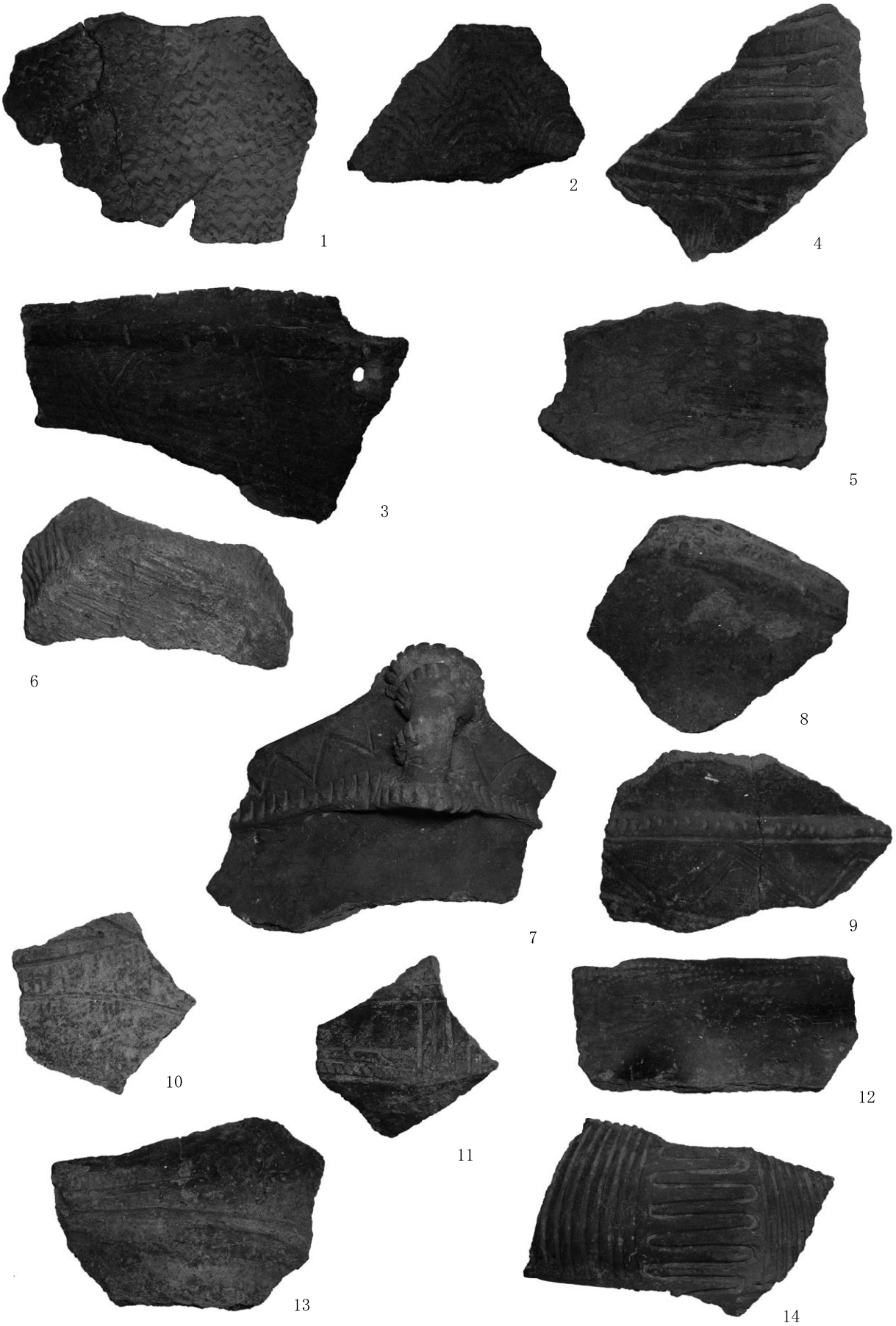


写真 24　轟貝塚第６次調査出土縄文土器

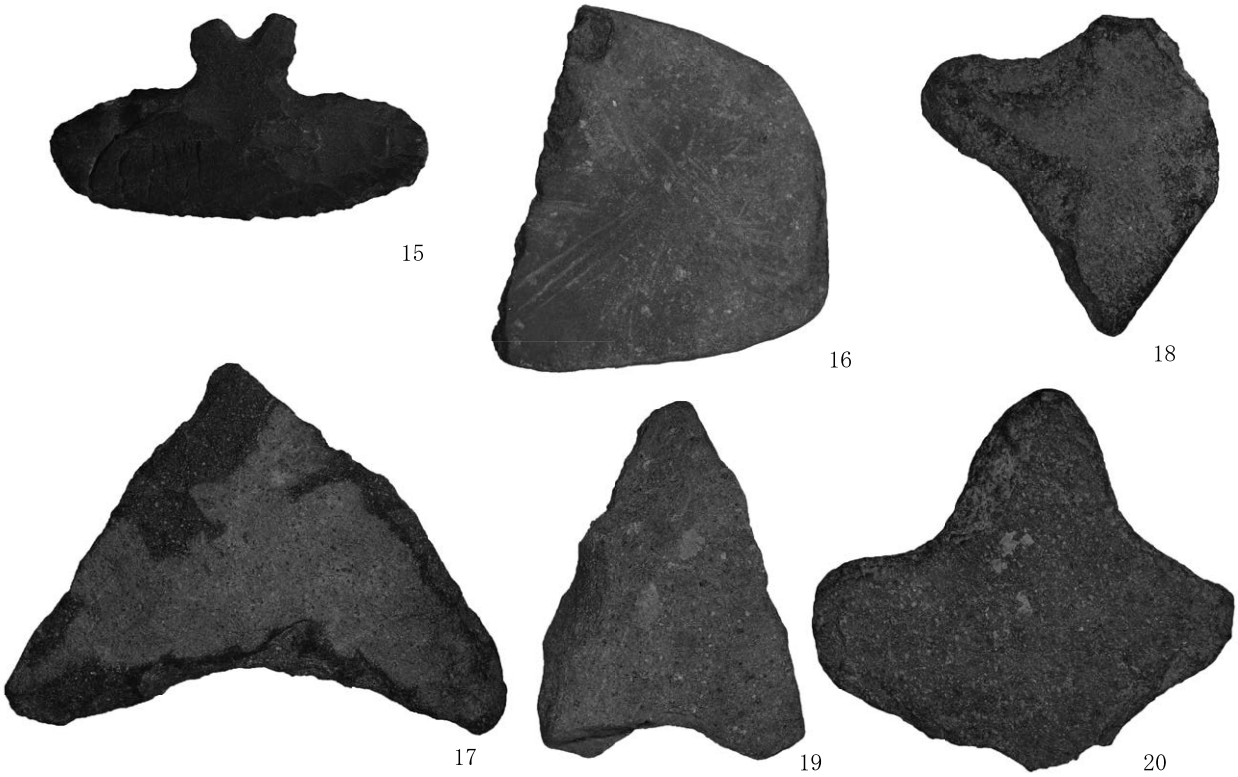


写真 25　轟貝塚第６次調査出土石器

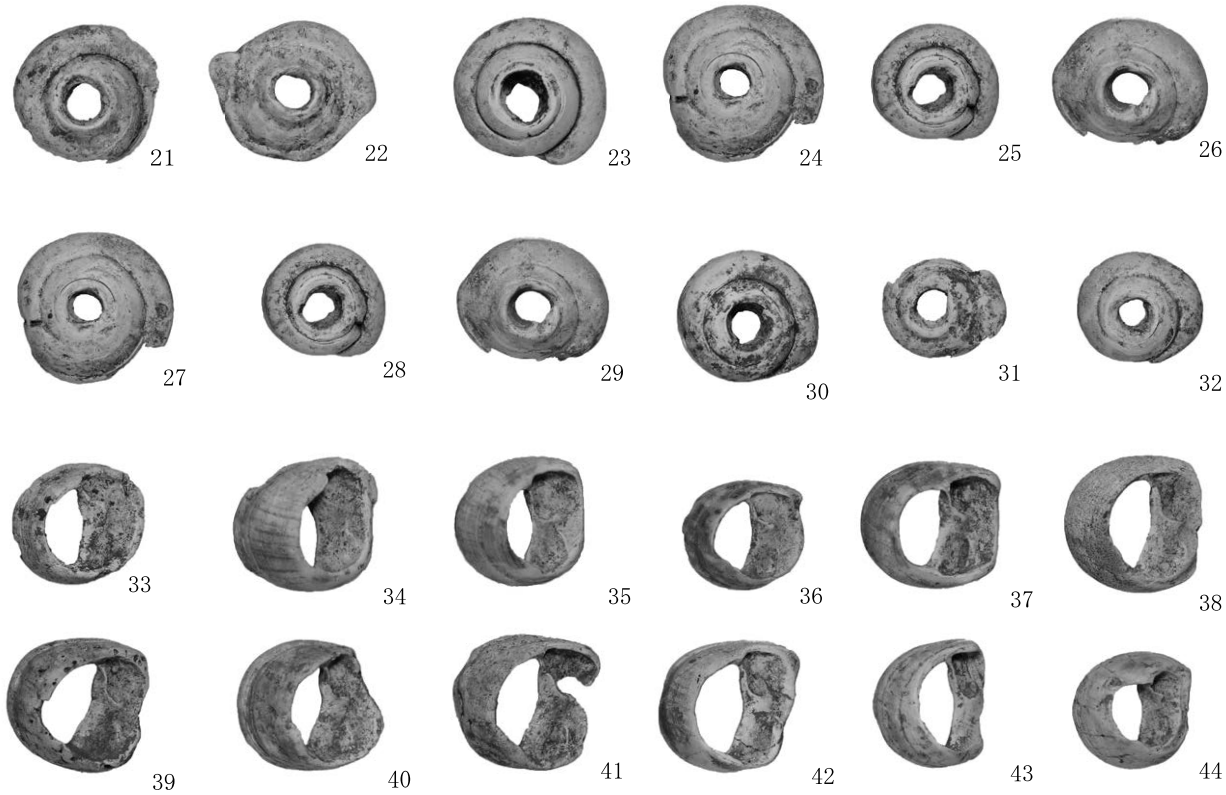


写真 26　轟貝塚第６次調査出土貝製品１

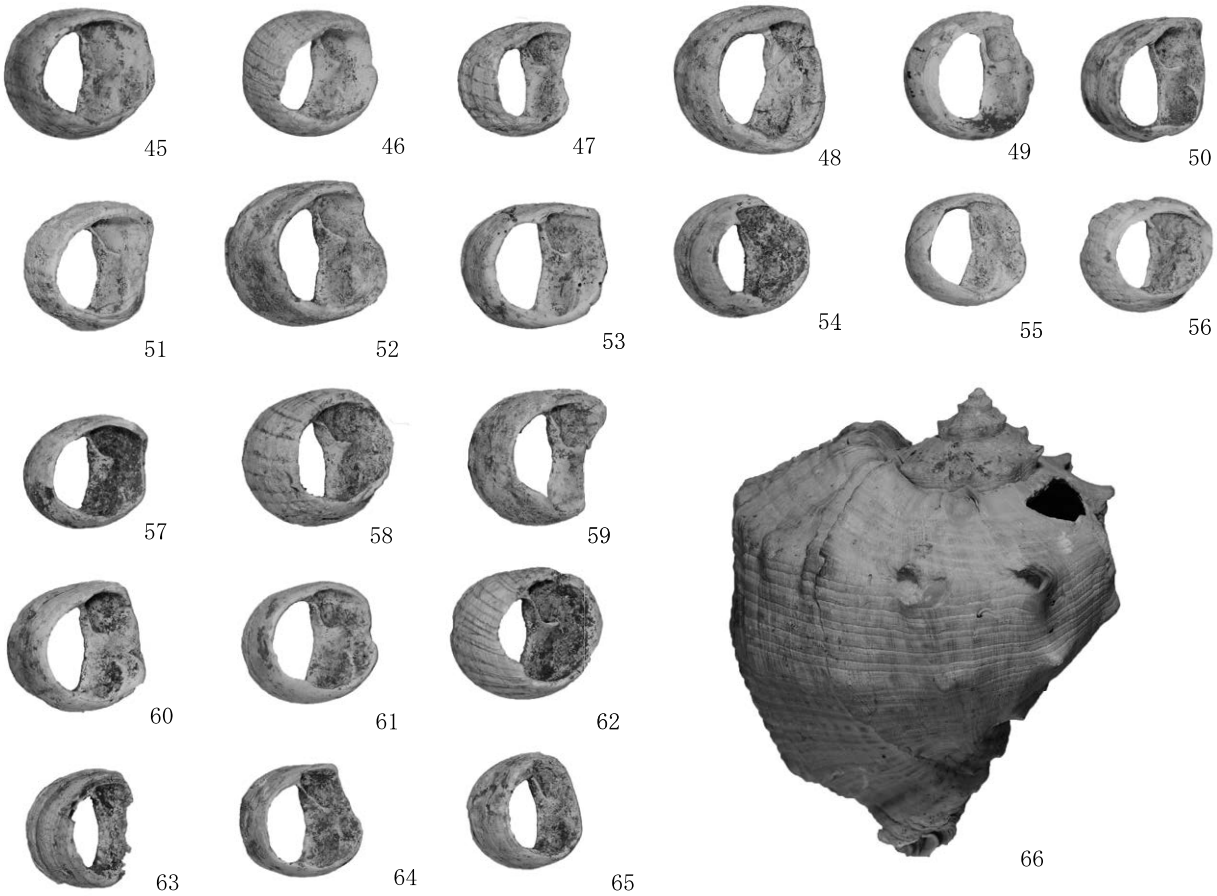


写真 27　轟貝塚第６次調査出土貝製品２

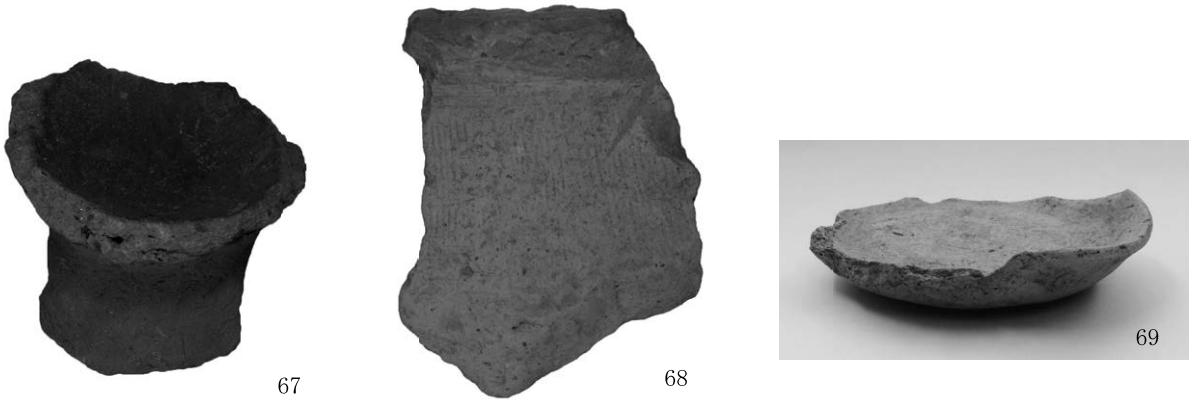


写真 28　轟貝塚第６次調査出土遺物（弥生時代以降）

引用・参考文献（付編１）

荒木隆宏　2003「阿高式土器の細分と編年」『先史学・考古学論究』Ⅳ　熊本大学考古学研究室創立 30 周年記念論文集　龍田考古会

江坂輝彌　1966「縄文土器 - 九州編〔３〕」『考古学ジャーナル』3 号

江坂輝彌　1968「熊本県轟貝塚出土の打製靴型石器について」『日本民族と南方文化』金関丈夫博士古希記念論文集　平凡社

江坂輝彌　1971「熊本県宇土市轟貝塚」『日本考古学年報』第 19 号　日本考古学協会

遠藤美子・遠藤萬里　1979『東京大学総合研究資料館所蔵日本縄文時代人骨型録』東京大学総合研究資料館標本資料報告第３号　東京大学総合研究資料館

宇土市教育委員会　2005『轟貝塚・馬門石石切場跡 - 宇土市内遺跡範囲確認調査概報 - 』宇土市埋蔵文化財調査報告書第 27 集

宇土市教育委員会　2006「轟貝塚」『轟貝塚　馬門石石切場跡 - 宇土市内遺跡範囲確認調査報告書 - 』宇土市埋蔵文化財調査報告書第 28 集

宇土市教育委員会　2008『轟貝塚』宇土市埋蔵文化財調査報告書第 30 集

宇土市教育委員会　2011『曽畑貝塚』宇土市埋蔵文化財調査報告書第 32 集

宇土市教育委員会　2017『轟貝塚』Ⅱ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第 36 集

小片岳彦　1972「古病理学的にみた日本古人骨の研究」『新潟医学雑誌』第 86 巻第 11 号　新潟医学会

海部陽介・中橋孝博・橋本裕子　1998「九州地方出土縄文時代人骨の形態学的特徴－東京大学総合研究博物館所蔵標本資料について－」『国立科学博物館専報』第 30 巻　国立科学博物館

京都大学文学部博物館　1960「宇土市宇土轟貝塚」『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第１部

清野謙次　1925『日本原人の研究』岡書院

倉元慎平　2014「轟Ｂ式土器最新段階についての一考察」『先史・考古学論究』Ⅵ　熊本大学考古学研究室創立 40 周年記念論文集　龍田考古会

桒畑光博　2016「鬼界アカホヤ噴火の土器編年上での位置づけと土器様式との関係」『超巨大噴火が人類に与えた影響』雄山閣

坂本経堯　1983「轟貝塚」『肥後上代文化資料集成』肥後上代文化研究会

佐藤傳藏　1899「九州に於ける石器時代人民」『地学雑誌』11 巻１号　東京地学協会

鈴木文太郎　1918a「肥後轟貝塚河内道明寺等にて発掘せる人骨に就いて」『人類学雑誌』第 33 巻第３号

鈴木文太郎　1918b「河内国府人骨・肥後轟貝塚にて発掘せる人骨について報じ併せて石器時代の住民に及ぶ」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第２冊

高橋信武　1997「平栫式土器と塞ノ神式土器の編年」『先史学・考古学論究』Ⅱ　熊本大学考古学研究室創立 25 周年記念論文集　龍田考古会

田中良之　1979「曽畑式土器の展開」『末盧国』六興出版

中川毅人　2001「轟貝塚出土の動物遺存体及び貝製品」『考古学研究室報告』第 36 集　熊本大学文学部考古学研究室

長谷部言人　1923「石器時代人の抜歯に就いて 第２」『人類学雑誌』第 38 巻第６号　東京人類学会

濱田耕作・榊原政職・清野謙次　1920「肥後轟貝塚発掘報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第５冊

松本雅明・富樫卯三郎　1961「轟式土器の編年－熊本県宇土市轟貝塚調査報告－」『考古学雑誌』第 47 巻第 3 号　日本考古学会

松本雅明　1958「轟貝塚の発掘」（上）・（下）　熊本日日新聞　昭和 37 年９月３日・４日号

水ノ江和同　1990a「西北九州の曽畑式土器」『伊木力遺跡』同志社大学文学部文化学科

水ノ江和同　1990b「中・南九州の曽畑式土器」『肥後考古』第７号 肥後考古学会

溝口優司　1995「宮城県清水洞窟から出土した頭蓋の形態学的研究」『国立科学博物館専報』第 28 巻　国立科学博物館

宮本一夫　1990「轟Ｂ式土器の再検討 - 京都大学文学部博物館収蔵資料を中心に - 」『肥後考古』第７号　肥後考古学会

山田康弘・日下宗一郎・米田穣　2019「熊本県轟貝塚出土人骨の年代」『先史学・考古学論究』Ⅶ　考古学研究室創設 45 周年記念論文集　龍田考古会